

# 目 次

## 論 文

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた  
.....米 山 喜 晟 1

言語権・言語法  
——言語政策の観点から—— .....橋 内 武 97

接尾辞「チック」について  
——「CD-毎日新聞」(1991-2005)および  
BCCWJを用いて—— .....村 中 淑 子 115

## 翻 訳

ババッド・タナ・ジャウイ (1)  
第1部 ババッド・バジャジャラン .....深 見 純 生 145

## 報 告

Four Experiential Learning Programs  
at Momoyama Gakuin University .....Warren DECKER 165

# 現代中国でもモンタペルティ現象が 発生していた

米 山 喜 晟

## はじめに

筆者は前論文において、冷戦後の世界におけるモンタペルティ現象について論じた<sup>1)</sup>。その結果、まずそれが発生している可能性が高い国は、ロシア、中国、ヴェトナム、ラオスの4カ国に絞られ、各国が有している事情を勘案して、中国においてそれが実際に発生しているのではないか、という推論を行った。今日の中国の繁栄ぶりを考慮すると、この推論は全くでたらめなものではないように思われる。

しかし私自身、その論証には不十分な点があること感じていた。私が自らの論証に関して不十分だと感じたのは、主に以下の2点である。その一つは、冷戦を普通の戦争と同様に考えて、東側陣営に属した国々を敗戦国と見なしたことである。一言弁解するならばアイケンベリーという国際政治学の専門家も、国際的評価の高いその著書において、冷戦における西側陣営の勝利をナポレオン相手の戦争や第一次および第二次世界大戦における勝利とほぼ同様に扱っているという事実<sup>2)</sup>があり、筆者もその事実によ

---

\*元本学文学部

キーワード：モンタペルティ現象，文化大革命，改革・開放政策，毛沢東，鄧小平

拠して、あたかも冷戦における東側陣営の敗北を、普通の戦争における敗北であるかのように論じた。

しかし東側陣営の国々の中で、西側諸国との実際の戦争によって滅亡した国家が一つも存在しなかったことは厳然たる事実である。むしろヴェトナムやキューバなど西側諸国に対して勝利や独立を勝ち取った国は存在している、西側諸国との戦争に敗れて消滅した国は存在していない<sup>3)</sup>。東側陣営のいかなる国といえども、イデオロギー闘争の敗者であることは認めても、自らを敗戦国とは見なしていないはずである。とくに私がモンタペルティ現象が発生しているのではないかと指摘した中国などは、今日も共産党による一党独裁体制を継続しつつ、世界の超大国としての地位を着々と築きつつあり、自国の敗戦などという事実は金輪際認めようとはしないであろう。だがそれと同時に中国では、文化大革命と呼ばれる恐らく世界史上最も大規模なイデオロギー闘争の後に、一転して従来とは正反対の政策に転換し、今日の繁栄を築いていることも否定し得ない事実である。ここには普通の戦争における敗戦はなくとも、資本主義との闘争というイデオロギーを廃棄したこと、すなわち毛沢東が推進したイデオロギー闘争に敗北して政策を180度転換したことは何人も否定し得ない事実である。そこで問題は、イデオロギー闘争の敗北が、モンタペルティ現象を発生させ得るかということになるが、一般的にはイデオロギー闘争の敗北と普通の戦争における敗戦とは決して同一とは見なし難いことは確かである。しかしその状況次第では、ほとんど同等の意味をもち得る場合があることを認めなければならないのではないだろうか。私は現代中国には、そのような状況が存在していたと考えているのだが、前論文においては、アイケンベリーの著書に依拠する余り、その点の記述が不十分であったことを認めざるを得ない。そこで本論においてその不備を補う必要があるだろう。

全く未知の分野を門外漢が論じている以上、有識者が見れば前論文には

## 現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

不十分な点や誤まりは恐らく多数あるはずだが、わたし自身の目から見てそのうちの最も重要なものをさらに一つだけ挙げるとすれば、前論文の論証があくまで国際的な比較に止まっていたという事実である。すなわち諸般の事情から勘案して、中国には東側陣営に属していた他のいかなる国よりもモンタペルティ現象が発生し易い条件が備わっていたことを指摘し、そのことと今日の中国の状況とを照合することによって事足りりとしていたわけである。いわば現代中国を外から検討しただけで、内側からモンタペルティ現象の発生を追及するという作業を怠っていた。これではモンタペルティ現象が発生するために必要な条件を示して、現代中国が相対的にそうした条件にもっとも恵まれていたことを示しただけであり、実際にそれが進行した経緯には全く触れる事なく、その存在を強弁しているに過ぎない。そこで本論では、紙数が許すかぎり、現代中国でモンタペルティ現象が発生し進行した経緯を辿ることにしたい。そうした経緯を辿ることによって、おそらく中国においてのみ、イデオロギー闘争がほとんど戦争と同様の影響を中国全土にもたらした事情をも明らかにし得るはずであり、先にあげた欠点をもある程度補填し得るのではないかと考える。

冷戦に関してと同様、中国に関して、おそらく普通の成人にも劣るほど無知な人間であり、第一中国語も知らない私が、不遜にも中国に関して論じる理由については、すでに前論文の「はじめに」の部分で弁明したので再度記さない<sup>4)</sup>。いずれにせよ私は、モンタペルティ現象という、これまで世界中の誰にも指摘されたことのない現象の存在を裏付けるためには、中国の近年の変化がきわめてふさわしい事例の一つだと信じるものである。目の前に発生しているこのように顕著な事例を無視して、比較的知識や語学力に恵まれた分野にのみ視野を限定することの方が、知的怠慢と見なされるべきではないだろうか。

そこで私が本論において行う論証は主に2点からなっている。まず現代

中国において戦争に匹敵するほどの重要性を有するイデオロギー闘争がいかにして発生したのかを、中国現代史の展開過程を辿ることによって明らかにしなければならない。こうしてこの闘争を強引に推し進めた毛沢東の権力の特異性が把握し得るはずである。その結果、中国における資本主義との闘争がいくつかの東側陣営の国々のように凝固した状態に安定することなく、毛沢東の死去によって一挙に転換した事情が明らかにできるであろう。そうした転換が全国に敗戦の場合と同様の速度と圧力で伝わり、その後に旺盛な市場活動を展開した経緯を辿ることによって、中国の現状を解明するためのヒントが得られるはずである。それに続く二つ目の論証として、いかに重大であったにせよ、国内で発生したイデオロギー闘争の終焉が、なぜ敗戦に勝るとも劣らぬ結果をもたらしたのかを論証する必要がある。さらにそうした闘争が終焉したために生じた転換の結果が、これまでに見て来た中世フィレンツェや現代日本で発生したモンタペルティ現象に酷似していることが、転換後の経過を辿ることによって明らかになるはずである。ただしすでに見たとおり、イデオロギー闘争はあくまで普通の戦争とは異なっているということも、否定し得ない事実である。したがってその相違が齎すものをも明らかにせねばならない。なお国際的な比較と国内に発生した現象の経緯の追及という異なった視角から論じているとはいえ、同じ対象を論じている以上、本論には前論文と重複した記述が現れざるを得ないことを予めことわっておきたい。

いずれにしても、過去も現在もモンタペルティ現象は世界史において重大な影響を及ぼし続けているのであり、決して無視し得ない歴史の動因の一つであることを、認めざるを得ないのではないだろうか。

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

## 第一章 現代中国におけるモンタペルティ 現象発生の経緯 その一 転換前

私たち門外漢にとって、現代中国の歴史は驚異の連続に他ならないが、もっとも驚くべき事柄の一つは、あの広大な領土の大半が、短期間の内に中国共産党の支配下に入ったという事実である。大日本帝国が敗北して中華民国が勝利したのが1945年8月の半ば、その時勝利したはずの蒋介石の政府が共産党勢力に次第に圧倒されて、一部での地域でまだ内戦が続いていたとはいえ、毛沢東が北京で中華人民共和国の建国を宣言したのが1949年10月1日と、わずか約4年の間に中国共産党はあの広大な領土のほとんどを席卷することができたのである。もちろんそれ以前に抗日戦争と平行して、長征などを含む国共両軍の戦闘が続いていたことは周知の事実だとしても、一応抗日戦争勝利の立役者として国際的に評価されたはずの蒋介石勢力のあっけない凋落ぶりは、私たちに勝利が当事者たちにもたらすものについての考察をうながすとともに<sup>1)</sup>、世界史に及ぼした現実的影響も大きかった。80万対60万と兵員数に劣りながら勝利した、国共対戦の「関ヶ原の合戦」とも言われる淮海戦役をはじめ<sup>2)</sup>、いずれも中共の解放軍が勝利した三大戦役の勝利を含めた毛沢東が率いる解放軍の地滑りの勝利は、私たち門外漢にとって、唯々奇跡そのものと呼んでも過言ではない出来事のように思われる。

門外漢の驚異をもう一つ記させてもらうならば、中国現代史において毛沢東の影響がけた外れに大きいことである。もしも毛沢東が存在しなければ、中共軍の地滑りの勝利はなく、「大躍進政策」にまつわる大飢饉も発生せず、当然文化大革命も起こり得ず、その結果筆者がモンタペルティ現象だと見なしている、改革・開放後の中国の驚異的な経済発展も見られなかったのではないだろうか。天児慧著『巨龍の胎動 毛沢東 vs 鄧小平』

には、現代中国史の一傍観者にとって見逃す訳にいかない以下のような一文が記されている。

（筆者注＝彼が民族主義者であったという特徴に加えて）もう一つの毛沢東の突出した特徴を探すなら、ためらうことなく軍事戦略家としての彼の卓越した能力・実力を挙げておきたい。私は「毛は多くのものが信じているような軍事的天才ではない」（B・ヤン）という見方に賛同しない。正確な論証はできないが、客観的に見て二〇世紀最高の軍事戦略家ではないかと考える。私からしてみればこれでも控え目な言い方で、ナポレオンやシーザー、チンギス・カンといった軍事戦略家にも負けないほど傑出していると思う<sup>3)</sup>。

この評価は、文化大革命の最中に林彪らによって唱えられた、政治的意図に基づく毛沢東天才説<sup>4)</sup>などとは異なり、あくまで毛沢東の実像を伝えようとして日本人の一般的読者のために書かれた概説書に記された、現代中国史の専門家の「客観的に見」た評価であるところが重要である。勿論こうした評価には異論があり、文中に記されたB・ヤン<sup>5)</sup>の見解と異なるばかりではなく、評伝『マオ』<sup>6)</sup>の評価などとは真っ向から対立する見方である。そして常日頃矮小化史観を信奉している本来の私の精神的傾向とは明らかに矛盾しているが、諸般の事情を考慮すると、私個人としては天児慧氏の毛沢東評価を受け入れざるを得ないように思われる。ただし天児慧氏の見解に追加して強調すべきことは、毛沢東の戦略家としての才能が発揮されたのが、国民党軍や日本軍相手の軍事活動に止まらなかったことで、それは中国共産党主席の地位を確立するまでの権力闘争においても、その晩年の政治活動においても、容赦なく発揮され続けたという事実ではないだろうか。

## 現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

しかも一人の政治家または人間として特に優れた識見を備えていたわけではなく、その言行はしばしば矛盾に満ち、教養や常識の点でも著しく偏りがあり、そのために信じ難いほど大きな過ちを何度も犯したにもかかわらず<sup>7)</sup>、戦闘においても政争においても希代の戦略眼を発揮し続け、自らの権力と自らが率いる集団を守るための闘争には抜群に強かったという、同一人物とは到底思えないほどの能力のアンバランスが、この人物の活動をあれほど特異なものにしたのではあるまいか。実生活と無関係な芸術的天才の場合でさえ、抜群に突出していた場合には同時代のみならず後代にも影響を及ぼし続けることが有り得る<sup>8)</sup>以上、希代の戦略眼などという物騒な才能は、同時代の国民に深刻な災厄をもたらす可能性があり、毛沢東の場合はまさにその典型的な事例だったのではないだろうか。

ついでにもう少し、毛沢東の戦略的才能をショートの伝記に基づいて具体的に眺めることにすると、まず彼は1927年に「当時の中国に存在したどんな軍隊ともちがう、軍の基盤となる方針を二つ発表した。まず、それが総志願軍であること。辞めたければ好きに辞めていいし、路銀も与えられる。残ったら、もう勝手に将校に殴られることはないし、それぞれの部隊に士兵委員会が組織されて不満のはげ口となり、民主的な運営が行われるようにする。第二に、兵たちは民間人をきちんと扱わなければならない。ていねいな口をきき、買ったものには正当な値段を払わなければならない」<sup>9)</sup>と記されている。勿論これはあくまで方針であって、この通り実行されたかどうかは保証の限りではないし、事実伝記の「第8章 富田 無垢の喪失」で記されたA B団の肅清などの記述<sup>10)</sup>によって、解放軍が一時期神話化されていたように理想的な集団ではなかったことは明らかである。それでも略奪や暴行が日常茶飯事であった当時の軍隊において、毛沢東が「兵たちは農民の家に泊めてもらったら、わら布団や寝台の木の囲いを返すこと、借りたものはすべて返すこと、壊したものは弁償すること、礼儀

正しくすること、商取引は公平に行うこと、囚人は人道的に扱うこと」という六大注意を發表し、さらに林彪が注意を二つ加え、同時に三大規律をも發表したこと<sup>11)</sup>は、一般大衆、とりわけ当時の中国人の大半を占めていた農民たちの解放軍への信頼を高めたことは疑いの余地がない。この一事だけでも毛沢東の非凡な独創性は明らかである。もしもこうした基盤がなければ、いくら革命が土地改革をもたらすことを訴えても、農民たちは聞く耳を持たなかったに違いない<sup>12)</sup>。

なお毛沢東には、生涯を通して好んで採用したと思われる戦術があった。それは井崗山に立て籠もった際に農民たちから聞いた、「戦争について知るべき唯一のことはぐるぐる回ることだ」という、山賊の頭目、老聾の朱の戦術である。毛沢東はそれを自分流に解釈して、敵の主力軍からは逃げるという戦術を編み出し、兵士たちに「ぐるぐると引きずり回せ。そして敵が混乱してわけがわからなくなったところで、一番弱いところを衝け」<sup>13)</sup>と教えた。どうやら毛沢東はこの老聾の山賊が編み出したと伝えられる、相手が手強い時には正面からぶつからず、一度はとことん引いておいて、調子に乗って追撃した相手の隙を見て、一気に反撃するという津波のような戦術を、戦争のみならず権力闘争においても、生涯用い続けたという印象を受ける。

今更断るまでもなく、私がこれまで中国に関して記した事柄も、今後に記す事柄も悉く一般人向けの概説書や伝記類の受け売りであり、常識人にとっては周知の事実の羅列に他ならず、杜撰な上に退屈以外の何物でもないであろう。しかしそれらの事柄は、私がモンタペルティ現象と見なしている事態が発生するためには不可欠な前提条件であるがために、延々と記述せざるを得ないことをまず断っておかねばならない。先に記したとおり毛沢東が建国宣言を行い、続いて中共軍が国民党軍を台湾に追い落とした後も、中国は再建に専念することを許されなかった。すなわち、その翌年

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

の1950年には朝鮮戦争が勃発したため、毛沢東は中国共産党の有力幹部たちの反対を抑えて、大量の義勇軍を派遣して北朝鮮を支援しなければならなかったからである<sup>14)</sup>。スターリンは大量の犠牲者を出した自国民の第二次世界大戦の傷痕を癒すため、アジアの問題はなるべく中国に委ねる方針<sup>15)</sup>をとっていたために、韓国に攻め入った北朝鮮軍が国連軍に対して敗勢に陥った後は、中国共産党の解放軍が、義勇軍という体裁を取りながら、自ら正面に立って国連軍を迎え撃たねばならなかった。この戦争自体は1年あまりで激戦が収まり、1951年6月以後は38度線をめぐる膠着状態に陥っていたが、スターリンが休戦を認めず、その後も約2年間戦闘状態が続いたため、中国が国連軍との戦闘状態から解放されるには、スターリンの死後数カ月を経た1953年7月を待たねばならなかった<sup>16)</sup>。

しかし当時すでに6億の人口を抱えていた中華人民共和国は、朝鮮戦争への義勇軍派遣と平行して、新国家建設を進めることが可能であった。とりわけ当時圧倒的多数を占めていた農民は、革命と平行して最大関心事である土地改革を急ピッチで推進し、予定をはるかに上回る1年10カ月後の1952年春に「土地改革はすでに全国的範囲にわたって基本的に完成した」と宣言され、天児慧著前掲書によると、基本的に農民が自分の所有地を耕すと言う中国近代史の指導者の夢が実現された。当然農民の生産意欲は高まり、1952年の生産高は大幅な増加を記録することとなった。なお同書によれば、工業生産においてもそれを上回る生産高の増加が認められ、特に農民たちは自分たちを解放した共産党と毛沢東を褒めたたえた、とされている<sup>17)</sup>。

どうやらこの時点までは、一党独裁のソ連型とは異なった社会主義国家の建設を目指す選択肢も、中国には残されていたのかも知れない。そして毛沢東自身、建国当初は国民党以外の様々な党派の存続を認め、新しい形態の新民主主義社会形成を模索する路線を約束していた<sup>18)</sup>。しかし朝鮮戦

争への参戦や、台湾に生き残った国民党勢力の存在、それを庇護するアメリカの脅威など、そして特に北部に広がるソ連との関係など、様々な条件が、そのような曖昧な路線の継続を許さなかった<sup>19)</sup>。それと同時に毛沢東自身も、レーニンやスターリンの個人的権威の下で国民に一致団結を求める当時のソ連型共産主義体制の利点に気づいたらしい。毛沢東は早くも1952年9月、ゆっくりとすすめるという従来の方針を止めて、社会主義への移行を促進する方針を打ち出した<sup>20)</sup>。これに対して農民の立場に立った慎重論も少なくはなかったらしいが<sup>21)</sup>、誰一人毛沢東の新しい方針に逆らうことができず、農民たちは分配してもらったばかりの私有地を、農業集団化のために「農業合作社」に返納し、早くも1956年12月には98パーセントが集団化されてしまった。同時に産業の公有化に関しても、同様の社会主義的政策が急激にすすめられた<sup>22)</sup>。

毛沢東とソ連との関係は、長征の前後に体験したモスクワからの指示やモスクワ帰りの中国人留学生たちとの権力闘争、さらにスターリンが久しく堅持した蒋介石への好意的な外交政策などのために、決して良好だったとは言えない<sup>23)</sup>。しかし毛沢東は終始慎重に対処して公然とソ連と対立することを避け、1945年夏の日本の敗戦以降ソ連軍による満州占領を存分に利用して、中国革命の進行を促進させた<sup>24)</sup>。そして1949年の建国宣言後間もなく、内戦の継続中にもかかわらず毛沢東はソ連を訪問し、その後は朝鮮戦争を共に戦いながらソ連型の社会主義を促進するなど、一時期はソ連一辺倒の時代を迎え、東側陣営におけるソ連の最大の盟友という地位を獲得した<sup>25)</sup>。

こうして建国以来続いていた「一枚岩」の関係に深い亀裂を生じさせたのは、スターリンの死後3年を経た1956年2月に第20回ソ連共産党大会において、フルシチョフによって行われた「スターリン批判」の秘密報告であった。それは当時ソ連と盟友関係にあった東側諸国のリーダーのだれに

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

も相談することなく行われ、大粛清をともなったスターリン独裁の実態を暴露して、ソ連共産党がそれまで信奉してきた「個人崇拜」の政策を否定するものであった<sup>26)</sup>。毛沢東は2カ月かけてその内容を検討し、4月5日の論文でスターリンの功績の7分を評価、3分を否定するという中国独自の立場を示したが、ソ連の集団指導と自己批判に対して賛同しており、公然と対立するには至らなかった<sup>27)</sup>。それどころか毛沢東は、同じ月の25日に一見ソ連の変化に同調するかのごとき「百花斉放・百花争鳴」という方針を打ち出して、自由な言論活動を奨励するような態度を示し、その方針を繰り返し表明することで知識人の反応を探ろうとした<sup>28)</sup>。この時の彼の提案は、早くもその翌年の春に反右派闘争に転じたという事実でも明らか通り、自分と対立する知識人を「ぐるぐる引きずり回して、一番弱いところを衝」くための戦術的後退だと見なさざるを得ない。いかに表面を取り繕っても、丸山昇著『文化大革命に至る道 思想政策と知識人群像』に記された胡風逮捕や丁玲批判のほとぼりが冷めないこの時期に、知識人たちがその政策に同調する気になれなかったのは当然である<sup>29)</sup>。なお丸山著前掲書の第10章「百花斉放・百花争鳴」には、毛沢東が人口問題の権威馬寅初と会って、当初は産児制限に賛成していた事実<sup>30)</sup>や、この時期毛の講話に感激して激賞したフランス文学の翻訳家傅雷が、文化大革命当時紅衛兵の執拗きわまる吊し上げに遭い、夫婦ともに縊死したという悲劇<sup>31)</sup>など、中国の知識人と毛沢東との関係が具体的に記されている。

さらにその年の9月、毛沢東が11年ぶりに開催された党大会の運営を、劉少奇と鄧小平に一任したことも、彼が行った「ぐるぐる引きずり回す」戦術的後退の一環だと見なすことが可能だろう。そしておそらく彼が予測した通り、二人は毛沢東離れの方針を明らかにした。劉少奇はソ連との友好協力関係を強調し、鄧小平は党規約改正報告で、ソ連の「個人崇拜」批判に配慮して、「毛沢東思想をもって国家のイデオロギー的指針とする」

という一節を削除した上、「党内民主主義」と「集団指導」に力を入れるべきことを力説した<sup>32)</sup>。毛沢東の身边にいて親しく仕えた侍医李志綏は、それら二つの演説を聞きながら、「これは毛沢東を怒らせるだろうなと思った」と記し、また「毛がそれ以後に仕掛ける政治的イニシアチブのすべては——党内の整風も、大躍進も、社会主義教育運動も、はたまた文化大革命も——第八回党大会の定めた総路線を骨抜きにしようとする努力であった」とした上、1968年の10月に劉と鄧の兩名を正式に追放し、中央委員の大多数を放逐して、「毛沢東思想を国の指導原理として特記することにより、毛沢東の復讐は完結するのである」と記している<sup>33)</sup>が、中国の現代史の大筋は、李志綏ならずともほぼこの通りに進んだことを認めざるを得ないのではないだろうか<sup>34)</sup>。

フルシチョフの秘密報告は、東欧諸国に強い衝撃をもたらした。早くも1956年の秋には秘密報告の影響による紛争が相次いで勃発し、ソ連はポーランドに対しては政権の交替を認めた<sup>35)</sup>が、ハンガリーでは二度にわたる武力干渉を通して、さらに過激な改革を試み、東側陣営からの離脱を企てたナジ首相を逮捕してカーダールの傀儡政権を押し付け、ナジを反逆罪で逮捕して連行し、1958年に処刑している<sup>36)</sup>。丸山昇著前掲書によると、この際中国はポーランドに関しては、毛沢東がパジャマ姿で行った会議の結果に基づきソ連の武力干渉に反対した<sup>37)</sup>が、ハンガリーに関しては、一旦はハンガリー駐留ソ連軍の撤退を決定していたソ連に対して、当時モスクワに派遣していた劉少奇と鄧小平らの代表団を通し、ソ連共産党の決定はハンガリー人民に対する裏切りだと伝えさせ、ソ連軍による武力干渉を積極的に支持するという正反対の反応を示したと記されている<sup>38)</sup>。

ハンガリー事件は、約20万人とされる亡命者が共産主義の悲惨さをヨーロッパ全域に伝えると共に<sup>39)</sup>、当時共産主義世界に共感を示していた西側世界の言論界の代表的な論客、サルトルと共産党との関係を冷却させるな

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

ど<sup>40)</sup>、フルシチョフの秘密報告に優るとも劣らぬ影響を全世界に及ぼした。どうやらこの事件は、毛沢東に対して二つの追い風をもたらしたものと思われる。第一の追い風は紛争の直接的な原因がフルシチョフの秘密報告だったために、フルシチョフ自身とソ連の威信が大きく揺らぎ、その結果東側陣営内における中国と毛沢東の権威が一気に上昇したことであり、おかげで「個人崇拜」批判という、毛沢東にとっては不愉快な運動も尻すぼみになった。後にサルトルがヨーロッパで毛沢東派なるグループに肩入れしたり<sup>41)</sup>、ポル・ポト派のような毛沢東思想を信奉する党派が一国を支配して多数の知識人を虐殺することになる<sup>42)</sup> 素地は、早くもこの時期に生じたのである。もう一つの追い風は、国内で右派・修正主義批判を進めることが容易になったことである。ハンガリー事件は西側世界では共産主義体制の悲惨さを宣伝することに貢献したが、それとは逆に東側世界、とりわけ中国では、体制側が反動勢力の根強さとそうした勢力を根絶する必要を宣伝することに貢献した。毛沢東はその数は3000万人に及ぶと語っていた<sup>43)</sup> そうだが、丸山前掲書によると55万ないし100万あまりの人々が右派のレッテルを貼られて迫害され、先に見た傅雷のように文革の際にはさらに追い討ちをかけられた。その大部分が「名誉回復」したのはようやく文革終了後の1978年のことである<sup>44)</sup>。なおこの時の反右派闘争を指揮したのは鄧小平であった。鄧小平が走資派の代表の一人として攻撃され、何度も失脚しながらも、毛沢東の庇護の下で結局生き延びることができたのも、抜群の有能さや国共内戦時における目覚ましい功績に加えて、この時の右派に対する闘争ぶりが、毛沢東の記憶に残っていたためではないだろうか<sup>45)</sup>。

1957年11月、毛沢東はロシア革命40周年の祝典に参加するために、8年ぶりにモスクワを訪問した。この時彼は外国から加わった来賓の筆頭として扱われ、フルシチョフも丁重に気を遣い、最高級の待遇を受けたが<sup>46)</sup>、本人もそれを当然と考えていたはずである。なぜならスターリン亡き後の

ロシアと、東欧その他いかなる東側陣営の国々にも、もはや毛沢東に匹敵するような偉大な革命家は一人も存在しなかったからである。ロシア革命当時全くの一兵卒として加わった1歳年下のフルシチョフと、中国革命の指導者としてレーニンとスターリンという二人の主役の役割を一身で演じている毛沢東とでは格が違い過ぎた。唯一スターリンの片腕として活躍した3歳年上のモロトフだけは、ロシア革命時代から要職についていたその経歴と、火炎瓶にも名前が付くほどの世界的な知名度とで、おそらく毛沢東と対抗できた唯一のロシア人だが、すでにこの年の6月にカガノーヴィチらと反党事件を企てたかどでモンゴル大使に左遷させられていたらしい<sup>47)</sup>。フルシチョフ追放を目的とするモスクワの反党事件に関する情報が毛沢東の耳に入っていなかったとは考えられず、そのことは毛沢東の自信をますます強めていたはずである。とはいえ、この時毛沢東はまだソ連に反旗を翻すには至らず、それどころか祝賀式ではソ連への最大級の賛辞を惜しまず、ソ連との揺るぎなき友好関係を強調した<sup>48)</sup>。ちなみにこの年の10月4日、ソ連は世界で最初の人工衛星スプートニクを打ち上げて、自国の科学技術の高さを全世界に見せつけ、とりわけアメリカをあわてさせていた<sup>49)</sup>。それでもフルシチョフらが提唱している「平和共存路線」をそのまま認める気にはなれなかったのか、「東風が西風を圧倒している」とか、「すべての反動勢力は張り子の虎である」などという、東側陣営に忠実な宣伝とも取れるが、同時に西側陣営への挑発とも取れる発言を通して、「平和共存路線」に波紋を投じることを忘れなかった<sup>50)</sup>。

帰国した毛沢東は、自分の権威に対して不都合な動きを示したフルシチョフのために、モスクワで最大限のリップ・サービスをしたことへの鬱憤を晴らすかのごとく、翌1958年の春には、「大躍進政策」なるものを打ち出した<sup>51)</sup>。こうした誇大妄想的な政策を打ち出した背景には、個人としてはともかく<sup>52)</sup>、最高権力者としての毛沢東が、解放戦争以来幸運すぎたとい

## 現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

う事実を無視できない。解放戦争の成功は、元来軍閥の軍隊の寄せ集めだった国民党軍が自壊したという要因が大きく作用していることは否定し難いし、すでに盤石の地位を築いている毛沢東に対して、挑戦者と見なされて処刑された高崗らは余りにも非力であり、後に現れた劉少奇や林彪の場合も同様である<sup>53)</sup>。すでに見たとおり、スターリンの死をめぐる一連の事件ですら、追い風として作用した。こうした幸運が続いたことと、国際的舞台上で特別高い地位に祭り上げられたために、毛沢東は自信過剰になってしまったのではないだろうか。さらにもう一つ見逃せないことは、内心フルシチョフとソ連に反発しながらも、15年でアメリカを追い越すという彼の法螺や、40年祝典で誇大に宣伝された革命の実績などによって、毛沢東が案外まともに洗脳されてしまったふしがあることである<sup>54)</sup>。すでに延安時代の1937年に、モスクワ帰りの秀才陳伯達を自らの秘書兼ゴーストライターに採用してその知識を活用してきた<sup>55)</sup> 毛沢東の場合、モスクワこそ最大の知識の源であり、その彼が最近世界で初めて人工衛星を飛ばしたソ連が流す社会主義に関する誇大宣伝に強く影響されても、全く意外ではないからである。

こうしておそらくソ連で改めて確認された社会主義信仰によって、「大躍進政策」は1958年初頭から開始された。それがもたらした最大の改革は、従来集団農業の拠点であった200～300戸から成る合作社を統合して、より大規模で行政権を有する人民公社に改編したことで、早くも1958年12月末までに、平均農家数4600戸の人民公社がほぼ全農村に設立された<sup>56)</sup>。中国のこの新しい集団農場は、公共食堂を設置して無料で住民の食を保証しながら、婦人の家事を軽減している点が魅力の一つであった<sup>57)</sup>。さらに毛沢東の「二本足で歩く」方針に基づいて、この集団が農業のみならず土木事業や工業にまで利用された<sup>58)</sup> 点が重要で、各地で大規模な水利工事を進めただけでなく、全国の人民公社が1958年10月から「土法炉」と呼ばれる原

始的な熔鋸炉を用いて鉄鋼の大生産に取り組み、この年の鉄鋼生産量は目標をはるかに上回る1070万トンに達した。だがその6割は使い物にならない粗悪品で、しかも炉の建設資材や燃料確保のための歴史的建造物の破壊や森林伐採など、大きな傷痕を残した<sup>59)</sup>。また1958年2月からハエ、カ、ネズミ、スズメの「四害駆除運動」が展開されたが、スズメの駆除はイナゴやウンカの大発生につながったため、後にナンキンムシの駆除に変更された<sup>60)</sup>。さらに農業に関しても「密植・深耕運動」などソ連から伝わった新しい手法を推進して損害を一層大きくしたらしい<sup>61)</sup>。このように「大躍進運動」は好ましい成果を残さなかったばかりか、新農法の失敗や土法炉に熱中していたために収穫に人手が回らなかったこと、あるいは配分の際の下手際などで大規模な飢饉が発生し、せっかく設けられた共同食堂でも出すものがなくなり、1500万～4000万人という大量の餓死者を出した<sup>62)</sup>。

早くも「大躍進政策」の破壊的結果が明らかになりつつあった1959年の春節から4月にかけて、食糧騒動が各地で発生し、すでに広東省からは飢餓状態や餓死の報告が届き始めた<sup>63)</sup>。同年の初頭に各地に赴いて実状を調査し、その結果を携えて同年7月に廬山で開かれた中央政治局拡大会議に出席した国防部長（＝大臣）兼副総理の彭徳懐元帥は、グループ討議で自らの危惧を表明すると共に、毛沢東の立場に配慮して、彼に私信の形で状況を報告した。ところが賛辞を交えた慎重な仕方ではあっても、自らが提唱して現在推進中の「大躍進政策」に対して批判的な内容を含む彭徳懐の書簡を読んだ毛沢東は激怒し、彭徳懐の配慮を無視して、その私信のコピーを会議の出席者に配布して討議を求めた。個々の討議の場では彭の書簡を評価したり弁護する者もいたようだが、毛沢東が自分と彭徳懐とのいずれを支持するかを選択するように迫った時、公然と彭徳懐を支持する人は一人もおらず、彭徳懐が私信を公開されたことに抗議して退場した後、彼とその仲間は右派分子として失脚し、さらに彭徳懐にはソ連との内通者とい

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

う汚名が着せられた<sup>64)</sup>。

しかしいかなる政治的決議によっても、「大躍進政策」がもたらした悲惨な現実が消えるわけではなく、大飢饉は到来した。悲惨な結果が明らかになり始めた1959年の8月末、毛沢東は演説で人民公社が崩壊していないという事実を確認してその永続を宣言した後、国家主席の座を劉少奇に譲り渡した<sup>65)</sup>。しかし共産党主席の座には止まって党務に専念するとしており、時間的余裕が生じたこと以外、その暮らしぶりに大きな変化は生じていなかったらしい<sup>66)</sup>。李志綏の手記によると、毛沢東は1962年1月30日の演説で、党中央のすべての誤りに自分は責任を負っていることを、建国以来初めて認めたが、具体的に自分の誤りが何だったかについては全く触れていないという<sup>67)</sup>。

後年の動きから考えると、結局この時も毛沢東は敵を「ぐるぐる引きずりまわす」得意の戦術的後退を行った、と言わざるを得ない。しかも相手方が彼にそれほど敵視されているとは気付いていないだけに、一層効果的な戦術的後退だった。さらに毛沢東には全国に広がる信奉者だけでなく、廬山会議に途中から出席して彭徳懐を厳しく批判した後、国防部長の地位を引き継いだ<sup>68)</sup> 林彪および解放軍の林彪派の人々という強力な味方がいた。彭徳懐自身には毛沢東に歯向かうなど意図などなかったはずだが、毛沢東は彼を更迭して自分に最も忠実な同志である<sup>69)</sup> 林彪をトップに据えることで、解放軍を改めて掌握し直した。1927年に「政権は銃剣によって獲得される」という文章を書いた<sup>70)</sup> 毛沢東は、国家主席の肩書こそ劉少奇に譲っていても、軍隊を動かす権限は譲っていないのだ。

さらにソ連との関係悪化も毛沢東の権力にとっては、有利に働いたはずである。水泳が得意ではないフルシチョフがプールで泳がされたことで有名な1958年の夏、そして10周年目の国慶節に参列した1959年秋<sup>71)</sup>と、フルシチョフはこまめに毛沢東を訪れて良好な関係の維持に努めたが、そうし

た努力は裏目に出て1960年に中ソ論争が始まり、同年中国に派遣されていたソ連の科学技術者が一斉に帰国してしまい、さまざまなプロジェクトが中断された<sup>72)</sup>。そしてソ連でフルシチョフが失脚した1964年、その失脚をあざ笑うかのごとく、中国は独力で原子爆弾の開発に成功した<sup>73)</sup>。こうした一連の動きに対処するためには、中国では毛沢東の存在が不可欠だった。しかし劉少奇と鄧小平が主な政策を決定し、周恩来が総理として行政を統括するという体制を、毛沢東は修正主義的であり資本主義的に偏向しつつあると見なして、強い不満を抱いていた。特に飢餓に瀕した農村の生産性を高める必要から、劉少奇らは毛沢東が推進した人民公社の経営方針を後退させ、自留地という家族単位に基づく資本主義的経営を認めようとしていた<sup>74)</sup>。

こうした毛沢東の現体制に対する不満に応じる動きが、二つの方面で現れた。その一つは国防部長林彪によるもので、1964年の初頭『解放軍報』の社説で毛沢東思想学習運動を呼びかけた後、同年5月に『毛主席語録』を刊行する<sup>75)</sup> という、もっぱら毛沢東に対する自らの心酔ぶりを示す行為であり、必ずしも毛沢東の不満に正面から応えたものではなかった。笠井孝之著『毛沢東と林彪 文革の謎 林彪事件に迫る』<sup>76)</sup> は、これ以後林彪が文革に巻き込まれ、一度は毛沢東の後継者にまで祭り上げられながら、逃亡して飛行機事故で死去するまでの経緯をめぐって、さまざまな謎の解明を試みた著書であり、その記述に従うならば、林彪はこの時期以後、それ相應の覚悟もないまま自分を引き上げてくれた恩人の求めに応じて行動したために、文化大革命という重大事件に巻き込まれてしまった被害者、という印象を受ける。しかし嚴家祺・高阜共著『文化大革命十年史』<sup>77)</sup> に描かれた林彪は自発的かつ積極的に活動していて、解放軍内部の派閥争いで、賀龍、羅瑞卿らの年長者を抑えて軍内の実権を握っている。林彪自身の意図はともかく、この時期毛沢東の忠臣である林彪とその部下が解放軍

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

を統制していたという事実自体が、毛沢東の支持を受けて出現した紅衛兵たちの破壊的な活動を容易にしたことは確実である。だから林彪が文化大革命という騒乱の重大な責任者の一人であったことは、誰も否定できない。

これに対して毛沢東の妻の江青は、もっと直接的に夫の不満に応えるために、仲間を組織した。後にみる通りその試みは見事に決まり、国家主席劉少奇の失脚と当時の政府の権力構造の崩壊をもたらし、江青の狙い通り毛沢東の権威は回復した。こうした試みとそこから派生した一連の動きは文化大革命と呼ばれ、江青たちのグループが国家権力の中枢に加わっていた10年あまりに及ぶ時代は、文化大革命の時代と呼ばれている。毛沢東の死後1カ月も経たないうちに、当時「四人組」と呼ばれていた江青たちのグループは逮捕されて、文化大革命が終結する。そしてその後徐々に行われた毛沢東体制からの転換こそ、現代中国におけるモンタペルティ現象発生契機であったと私は考えている。すなわち現代中国のモンタペルティ現象は、これまでに見てきた中世フィレンツェや現代日本のそれとは異なり、実際の戦争における敗戦を契機として発生しているわけではなくて、毛沢東体制の終焉とそれからの転換によって発生しているのである。しかし冷戦の終結を一種の敗戦と見なす立場<sup>78)</sup>がある以上、国を挙げて推進された毛沢東体制からの転換も、一種の敗戦と見なすことが可能であり、そうした転換が敗戦同様の影響をもたらしても決して意外ではないと私は考えている。こうした状況を明らかにするためには、やはり毛沢東主義の権威が極大値に達した文化大革命時代の中国を知らなければならない。そこでまず巖・高共著前掲書の記述に基づいて、文化大革命の発端から紅衛兵が蜂起して全国で破壊活動を展開するまでの過程を眺めておくことにしよう。

江青は毛沢東が敏感に反応することを期待して、彭德懷追放への批判とも取れる呉晗の戯曲『海端免官』を攻撃の対象に選んだ<sup>79)</sup>。首都北京では

この作品が批判できないことを悟った江青は、自分の古巣上海に戻って論客張春橋と接触、その推薦で姚文元に批判の執筆を依頼した。姚は何度も書き直した原稿を北京に送り、毛沢東自らが原稿を審査したあげく、ついに1965年11月、その第10稿が『文匯報』に掲載され、毛沢東はそれを全国の新聞雑誌に転載するよう命じた。当初は北京市長彭真らの妨害で容易に転載されなかったが、周恩来の督促などで『人民日報』等での掲載が始まり、論争が開始された。陳伯達や諜報・公安関係の権威康生、張春橋らが支援する中、閔鋒、戚本禹など若き論客が姚文元支持を打ち出し、文化大革命を促進する急進派のグループが形成された<sup>80)</sup>。北京市長彭真らは論争を純学術論争に止めようと、直接毛沢東と会うなどして奔走し、『二月提綱』という方針を発表したが、これに対し毛沢東は1966年3月の政治局の会議で、学术界と教育界は知識分子が実権を握っているが、彼らは反共であり、国民党だと断罪した。4月から5月にかけての会議で彭真、羅瑞卿、陸定一、楊尚昆らの反党分子や呉晗、鄧拓、廖沫沙などの知識人を一掃する必要が認められ、彭真率いる北京市委員会や文化革命五人小組は解体されて、新しい組織と交代した。こうして陳伯達を組長、江青を第一副組長、康生を顧問とする中央文化革命小組が指揮する文化大革命が始まった<sup>81)</sup>。

北京大学ではすでに前年から社会主義教育運動に関連して、学長の陸平と哲学科書記の聶元梓との間で対立が生じていたが、学長を支持してきた彭真が失脚したことで勢いづいた聶のグループが、壁新聞で陸平を批判した。しかし学内の圧倒的多数の壁新聞がそれに反論した。康生は聶らの壁新聞を毛沢東に送り、毛は6月1日ラジオでこれを放送させた。陳伯達は『人民日報』の実権を握り、その社説で文化大革命を宣伝し、6月2日の第一面に聶らの壁新聞全文を掲載、さらに社説で陸平らを反党集団として糾弾した。全国から数万通の激励の手紙が寄せられ、北京大学は全国の文化大革命のメッカとなった。北京市内の大学と中学（＝日本の中学・高校）

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

で党委員会に対する告発が行われ、学生や生徒の糾弾を受けたため学校では授業ができなくなったが、毛沢東はそうした状態を肯定した<sup>82)</sup>。

北京市の党委員会は混乱に陥った学校を正常に運営するため、北京大学以下の各学校に工作組を派遣して事態を沈静しようとした。この時期劉少奇と鄧小平は杭州に飛んで毛沢東に会い、毛自らこの事態を指揮することを求めたが、毛は二人に処理をまかせると答えた。劉少奇らは6月中に北京の大半の学校に工作組を派遣し、壁新聞の禁止など幹部が制定した「中央八条」に基づいて学校を正常化しようと試みた。工作組は『人民日報』などに扇動されている学生たちと真っ向から対立することとなり、郵電学院では工作組を追い出すなど、反工作組運動のうねりが高まり、北京大学で「6・18事件」が発生した。多くの人々が陸平その他「黒い分子」約60人に三角帽子をかぶらせて殴る蹴るの暴行を加えた後、市街地を引き回してさらし者にした事件で、間もなく登場する紅衛兵たちの暴力行為のモデルとなる事件であった。北京大学では工作組が「黒い分子」に対する「行き過ぎた行動」に反対し、討論を通じて教訓を学ぶよう指導し、劉少奇はこの処置を評価して全国に伝えた<sup>83)</sup>。しかし騒ぎは清華大学にも飛火し、夫のために実情を探ろうとした劉少奇の妻王光美までが反工作組の運動と衝突することになった<sup>84)</sup>。毛沢東は7月18日に突然北京に戻り、その翌日劉少奇らと会見して、工作組派遣は間違いだと宣告。7月25日夜、北京大学で江青主催の万人討論大会が工作組をブルジョワ反動路線だと批判、翌26日に毛沢東が文革小組のメンバー全員と会見、工作組の大半が誤りを犯したとしてその撤収を命じた。文革小組は、その夜再び北京大学で万人大会を開き、陳伯達が工作組の解散を提案して決着をつけた。こうした動きは北京市内の全学校に伝わり、7月29日の「文化革命積極分子大会」で北京市党委員会の工作組撤収決定が読み上げられ、終了間際に参加した毛沢東はいつまでも続く拍手と万歳の声で迎えられた<sup>85)</sup>。

工作組をめぐる紛争に平行して、聶元梓らの壁新聞が発表された直後の1966年5月26日、清華大学付属中学の数名の生徒が、「毛沢東思想の絶対的権威」を打ちたてるための「紅衛兵」組織を秘密裏に創設し、6月24日造反精神を賛美する壁新聞を貼り出した。こうした組織は北京市内のいくつかの中学でも生まれて、「混乱すればするほど良い」という主張は中学紅衛兵組織の行動指針となった。工作組によって「反革命集団」として解散させられたものもあったが、清華大付属中の紅衛兵は7月4日再び造反を呼びかけた。中学の文革運動はもっぱら教職員の審査として進められていたため、生徒対策はおろそかにされていたが、「不法組織」である紅衛兵組織への攻撃に重点をおかざるを得なくなった。これに対し7月27日清華大付属中の紅衛兵は、造反精神万歳を三度論じた。毛沢東は8月1日彼らに手紙を送り、熱烈な支持を表明、紅衛兵はただちに毛沢東の手紙を公表し、ここでも毛沢東と劉少奇の対立が明らかになると同時に、北京市内の学校や役所で紅衛兵組織が続々と誕生した。そして毛沢東は8月5日、中南海の中庭に「司令部を砲撃しよう」という壁新聞を貼り出して、自分の攻撃の目標が現政権の中核、劉少奇であることを明らかにするとともに、8月8日には八期十一中全会において「中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命に関する決定」、いわゆる「十六条」を通過させた<sup>86)</sup>。

こうしてこの年の8月は、「十六条」制定をめぐる祝祭の期間となった。林彪が解放軍の兵士のために刊行した『毛主席語録』が一般にも発売され、「語録を手から離さず、口からも離さない」ことが、革命と指導者への忠実さをはかる試金石となり、人々は争ってこの本を手に入れようとした。林彪が2年前に刊行した小冊子は、文化大革命のシンボルとなった。1966年8月18日の早朝午前1時から開始された「文化大革命祝賀大会」では、100万にのぼる全国各地の代表が、天安門広場に集まって革命の開始を祝い、主催者の陳伯達と続いて発言した林彪とが毛沢東を礼讃した。全国の

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

紅衛兵の代表も参加していて、毛沢東はその内の一人が自分の腕に紅衛兵の腕章を巻き、「紅司令」と呼ぶことを喜んで黙認し、この活動の支持者であることを公衆の前に示した。紅衛兵たちは直ちに旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣の四旧打破運動に取り組み、四旧と判断したものを破壊し始めた。紅衛兵の破壊活動は全国で展開され、多くの文化財が破壊された。「大躍進政策」の四害駆除で大失敗した毛沢東は、今度は紅衛兵を動員した文化大革命の「四旧打破運動」によって、祖国の多くの貴重な人と物とに損害を加えた<sup>87)</sup>。

以後死ぬまでの約10年間、毛沢東は老いと病いに苦しみ<sup>88)</sup>、状況も時によって異なりはしたものの、常に勝者及び裁定者であり続け、一貫性からはほど遠いとはいえ、その都度自らの意志に従って決着を付け続けている。文化大革命というこの不思議な出来事は、いくつかの概説書によって私たち門外漢でもほぼその概略を知ることができる。たとえば本論ですでに何度も引用している、巖・高共著『文化大革命十年史』を始め、マクファーカー・シェーンハルス共著『毛沢東 最後の革命』<sup>89)</sup>、日本人研究者が同時代に観察・記録した中嶋嶺雄著『北京烈烈 上 激動する中国』および『北京烈烈 下 転換する中国』<sup>90)</sup>、または天児慧著前掲書などによってその大体の経過を知ることができる。先に挙げた著書の内で、最も大胆かつユニークな構成を取っているのは、巖・高共著である。ごく短い前文に続き、第一篇 毛沢東と劉少奇、第二篇 毛沢東と林彪、第三篇 毛沢東と江青 第四篇 文化大革命の終結、の四篇から成り立っていて、年代順を全く無視しているわけではないが、時には大胆に時代を前後することによって、毛沢東とその時期の主要な後継者候補との関係との叙述を中心に書き進めている<sup>91)</sup>。第一篇は劉少奇、第二篇は林彪の死で終わり、第三篇の江青の場合はやや微妙であるが、二人の著者たちが、文化大革命を毛沢東の後継者と見なされたライバルに対するもぐら叩きと見なしていたこと

が窺えて興味深い<sup>92)</sup>。たしかに劉少奇の場合に限らず、毛沢東の権威と権力を脅かすと感じた相手に対する、毛本人とその支持者たちによる過敏な反応が、文化大革命を推進した最大の動因であったことは否定し難いのではないだろうか。私は本論において、基本的にはこうした嚴・高史観に従うことにしたい。すなわち毛沢東は、必ずしも第一義的にプロレタリア文化革命そのものの実現を目指していたわけではなく、それとは比較にならぬ程強く、文化大革命によって自らの絶対的な権威と権力を確立しそれを維持することを望んでいたと見なすべきである。それゆえ毛沢東は、おそらく江青ら文革推進派から見ると理解不可能な行動を取り続けた。とりわけ周恩来を温存し続け、彼が進めるアメリカとの国交回復路線にまで協力した上に、あろうことか一時期とはいえ、「黒猫・白猫論」<sup>93)</sup> という大失言の主で走資派ナンバー2の鄧小平までを復権させている。これは江青たちには許すべからざる文化大革命からの逸脱だったはずだが、文化大革命を推進する江青らのグループと実務官僚や軍人からなる周恩来らのグループという二つの支柱に支えられて自らの権力の絶対化を実現し、それを維持し続けている毛沢東にとっては、不可欠な選択であった。あたかも封建勢力と新興ブルジョワジーの二大勢力がヨーロッパの絶対王権<sup>94)</sup>を支えたように、林彪亡き後の中国では、拮抗する二つのグループが自らの絶大な権力を支えていることを、毛沢東はだれよりも明敏に察知していたのである。

このように、嚴・高共著前掲書などの構成から推察される文化大革命の基本方針が毛沢東権力の絶対化である以上、約10年にわたる文化大革命の時代を通してその方針が一貫することなどあり得なかった。その方針が最も単純明快な形で現れたのは、1966年の奪権闘争で劉少奇を権力の頂点からひきずり落とすまでの間であった。この時期の毛沢東は、文芸批判という奇妙な切り口から北京の教育機関という特異な分野に突入することで、

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

紅衛兵という新勢力を動員することに成功した。その前に林彪派にてこ入れして解放軍を抑えておいたおかげで、毛沢東の「造反有理」という呪文に縛られて、官僚機構の一部である警察も身動きできず、中学から始まってあらゆる集団に拮がった集団的暴力犯罪に対処し得る暴力装置は、国内のどこにも存在しなかったのである。しかし解放軍には林彪派に属さない軍人たちも少なくなく、それらの人々が疑問を唱え始めたのが、1967年の「二月逆流」<sup>95)</sup>であった。だが各界に文化大革命への期待が残り、紅衛兵運動の勢いが盛んなこの時期には時期尚早で、多くの将軍が失脚した。少年少女の暴力は早晚大人の武闘に転化せざるを得ない。江青らの扇動もあって各地で武闘が開始され、殺人騒ぎが発生した。上海では「一月風暴」<sup>96)</sup>によって文革小組の張春橋につながる勢力が覇権を握り、その闘争で活躍した王洪文は後に中央に引き上げられて、一時期は毛沢東の後継者とさえ見なされた。中央の意向がそのまま貫徹し得ない地方では激しい武闘が展開されて多くの死者を出した。武漢では、当時軍の支持を得ていた「百万雄師」<sup>97)</sup>と名乗る集団が、中央の方針と対立して7月20日の武漢事件を引き起こした。中央から派遣された文革小組の代表は危険にさらされ、その地に来あわせた毛沢東は早々に飛行機で出発した<sup>98)</sup>。後に軍の支持を失った「百万雄師」は解体され、メンバーは厳しく弾圧された。

当初「造反有理」で一直線に進んでいたはずの文化大革命は、さまざまな逆流を示し始める。その一つ「5.16陰謀」<sup>99)</sup>は謎に包まれた事件だが、その契機となっているのは、紅衛兵による一連の外国代表部へのデモと1967年8月のイギリス代表部焼き討ち事件<sup>100)</sup>である。文化大革命が外交の部門にも飛び火し、文革派の主張が極端な形で実行され、周恩来を激怒させたこの事件は、文革派の一部に高い代償を払わせることになった。文革推進派の中でも特に過激分子であった閔鋒、王力などが、他の各界の左派とともに、陰謀に加わったとして逮捕され、告発されて失脚した<sup>101)</sup>。マ

クファーカーとシェーンハルスは、ほぼ確実にでっち上げによって過激分子が粛清されたものと推測している<sup>102)</sup>。1966～7年にあれほど猛威をふるった紅衛兵たちの運命も似たようなもので、1968年8月25日に姚文元が『人民日報』で、「労働者階級がすべてを指導しなければならない」と発表したのに応えて、同月末に北京の59大学に労働者たちから成る毛沢東宣伝隊が進駐した途端、紅衛兵運動は消滅した<sup>103)</sup>。さらに同年12月22日、毛沢東が同紙に『『知識青年の上山下郷』に関する指示』を発表して、知識青年が農村で貧農たちから再教育を受けるべきことを強調した結果、紅衛兵たちの多くは農村に消えた<sup>104)</sup>。

こうした逆流の最大のもの、林彪一家の飛行機による逃亡とモンゴルにおける墜死事件<sup>105)</sup>である。1969年4月1日に毛沢東の後継者と党規約に明記された林彪が、1年半も経たない1971年9月8日になぜ逃亡したのか。一見毛沢東と林彪との間にはっきりとした対立はなく、1970年4月に林彪と陳伯達が毛沢東の国家主席就任を求めたことが、毛沢東の逆鱗に触れたためだとされている<sup>106)</sup>。毛沢東の怒りは半端ではなく、8月に林彪と陳伯達とを併せて批判した。長年毛沢東のブレインを務め、文化大革命の旗振り役でもあった陳が、一足先に文革の仲間から排除されて失脚<sup>107)</sup>したために、林彪も先が見えたと観念したらしい。再び国家主席に就任することを求められたことぐらいで、毛沢東がなぜこれほど激怒したのか。一見謎のようだが、先に記した毛沢東権力絶対主義の観点に立って文化大革命の展開ぶりを考慮すると、意外どころかむしろ当然であった。紅衛兵の暴力は大人たちの武闘を誘発し、結局その決着をつけるのは各地の解放軍の軍事力であった。そのため大半の地域では、実権を握った革命委員会のメンバーの多数は軍人であったが、毛沢東はそうした傾向をボナパルティズムと呼んで警戒した<sup>108)</sup>。毛沢東はこうして多数派を占めることになった軍人たちが、林彪の下で結束して自分の実権を奪うことを恐れたのだ。恐

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

らく毛沢東は、自分のブレインだった陳伯達が同じ魂胆で逸速く林彪に接近したものと見なし、警戒すると同時に憎悪して、二人の共同作業の実現を断固拒否するとともに、権力基盤の脆弱な陳伯達を容赦なく失脚させた。林彪の息子林立果の毛沢東暗殺計画<sup>109</sup>は、杜撰で実現性の乏しいもので、失敗するのは必然であったが、あれほど賞賛された林彪の逃亡は、文化大革命と毛沢東自身の権威を大きく失墜させた。

マクファーカーらの共著はこの時の毛沢東の失意を強調して、そのために文革初期に追放した中堅幹部を復帰させたと見なしている<sup>110</sup>。中ソ関係は悪化して1969年3月に珍宝島で戦火を交えるに至り<sup>111</sup>、中国は米国からの工作に応じて、1971年7月周恩来が訪中したキッシンジャーと対談、その翌72年2月には毛沢東自身がニクソン大統領と会談して世界を驚かせ<sup>112</sup>、同年9月には田中角栄首相が訪中<sup>113</sup>するなど、中国の西側との関係は激変した。1973年3月、毛沢東は走資派として失脚していた鄧小平を副総理に復帰<sup>114</sup>させ、5月に上海文革派の王洪文と郷里湖南省の指導者華国鋒とを中央に引き上げた<sup>115</sup>。この年から翌年にかけて、文革推進派は孔子批判に名を借りて周恩来批判を強めた<sup>116</sup>が、毛沢東はこれを許したばかりか、1975年9月に自ら『人民日報』で『水滸伝』を論じて「投降派」を批判<sup>117</sup>するなど、周恩来への風当たりが強まった。病身の周恩来に代わって、第一副総理の鄧小平が執務を代行し始め、文革で混乱した政府諸機関と軍隊の整頓に着手、自ら参謀総長を兼務する解放軍に大鉦を振るって縮小するなど、リスクを犯して各組織の再建に邁進した<sup>118</sup>。文革推進派はこれに反発し、王洪文や甥の毛遠新らは鄧小平を中傷したが、毛沢東は彼らの派閥行動を批判・叱責した<sup>119</sup>。

ついに運命の年の1976年1月8日、周恩来総理が死去。同年4月、その遺徳を偲んで天安門広場に多数の花輪が捧げられ、それらが撤去されたため、群衆と治安当局が衝突して流血事件が発生した<sup>120</sup>。4月7日、毛沢東

の提起により、華国鋒を党第一副主席・国務院総理に任命、天安門事件の責任を取らされた鄧小平は、党籍は保留されたものの一切の職務を取り消されて失脚した<sup>121)</sup>。この年は3月8日に吉林省に巨大隕石が落下したり、7月28日に唐山大地震が発生するなどの異変も相次ぎ、7月6日には、解放軍の元老、朱徳将軍が死去した<sup>122)</sup>。そして9月9日、毛沢東主席が82歳で死去した<sup>123)</sup>。すでに論じたとおり文化大革命そのものの実質は、本来の意味での革命というよりも、むしろ毛沢東が絶対的権力を奪回し、かつそれを維持するための運動であった。したがってその運動は、当然彼の死去とともに消滅する運命にあった。またそれと同時に、この運動によってもたらされた毛沢東中心の体制は、彼の死と共に必然的に転換されるべき運命にあった。したがって毛沢東の死去と同時に、転換への動力が作用し始めたのである<sup>124)</sup>。

## 第二章 現代中国におけるモンタペルティ 現象発生の際緯 その二 転換とその後

前章で見た通り、文化大革命という運動は毛沢東の存在に全面的に依存した運動だったために、彼の死去とともに終わらざるを得なかった。ただしそれは今日の時点から、多くの人々の記録を通して振り返ることで初めて分かることであって、その時点では、大半の中国人はまったく五里霧中の状態に取り残されたと感じていたはずである。しかし文化大革命が作り上げた毛沢東絶対主義的体制は意外に早く崩壊して、短い過渡期の後に転換期がやってきた。文化大革命を自分の二大偉業の一つと見なしていた<sup>1)</sup>毛沢東は、自分の死が目前にせまっていることに気付いた時、その積極的な評価が覆えされないための対策をも講じておいたのだが、その対策はどうやら毛沢東が期待した通りには機能しなかったようである。希代の戦略家といえども、自分の死後の中国までを思うとおりに支配することはでき

## 現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

なかったのである。しかしモンタペルティ現象を認める立場に立てば、毛沢東が残した膨大な負の遺産こそ、その後の転換を通して奇跡の経済発展を可能にしているものであり、今日の長期にわたる経済発展は、まことに逆説的な表現ではあるが、「毛沢東の贈り物」なのである。

毛沢東の死に対する中国民衆の反応は、かなり微妙なものであったようだ。マ・シ共著前掲書は、「泣いている人はたくさんいた。だが周恩来のときのような、手放しの悲しみではなかった」とか、「心から動揺している人はほとんど見られなかった」などという外国人の証言をはじめ、文革で家族が散々いためつけられた人々の代表である『ワイルド・スワン』の著者チアンの「あまりの多幸感に襲われ、一瞬、手足がまひしたように感じた。(中略、周囲の人々が大声泣きしており、前に学生幹部がいたので)私はすばやく顔をこの人の肩にうずめ、正しく泣きじゃくった」という嘘泣きの証言とか、おそらくでっち上げだと思われる5・16陰謀事件で監獄に入れられていた文革派内の極左分子王力の「私は泣きだした。秦城監獄は人々の泣く声であふれた」という証言など、様々な反応を記録している<sup>2)</sup>が、おそらく大半の国民はこの日が来ることを早くから予期<sup>3)</sup>していて、本当に驚いた人はほとんどいなかったのではないだろうか。そして国民の悲しみは、毛沢東が期待していたものとは程遠かった、と言わざるをえない。チアンのごとく「多幸感で手足がまひ」した人は稀だとしても、嘘泣きした中国人は結構多かったはずである。その代わり外国人の中に、泣いた人が案外多かったかも知れない。

文化大革命の積極的評価を後代にも維持したいと望んでいた毛沢東には、文革が創出した毛沢東絶対主義体制を支える二本の柱の内、文革推進派ではなくて官僚・軍人グループの誰か、中でも抜群に有能な鄧小平に体制を継がせようとした形跡が認められる。一時期鄧小平を中傷する文革推進派を叱責したり、その自己批判を求めるなどして、両派を調停する動きを示

しており、彼を要職につけて自由に活動させたこともあった<sup>4)</sup>。同時に自分に対して忠実ではあるものの、自分とは異なった発想を持ち、国民の信頼も人気も大き過ぎる周恩来の存在感を希薄にする効果をも、鄧小平の活動に期待していたふしがある<sup>5)</sup>。しかし鄧小平は、求められている自己批判を避けたばかりか、文革推進派の周恩来批判が強まる中、1975年1月に農業・工業・国防・科学技術の「四つの現代化」を打ち出した周恩来に仕えてその代役を忠実にこなした後、翌年1月の周恩来の死去に際してはその弔辞を読むなど、文革推進派に妥協・協調する意志が認められなかった<sup>6)</sup> ために、毛沢東は彼を見捨てた。彼は1976年2月3日、文革の途中で自分の郷里湖南省の党第一書記から中央に引き上げておいた華国鋒を、周恩来の後任の総理代行第一副主席に指名し、さらに同年4月7日に同人を党第一副主席・國務院総理に正式に任命、同時に4月4・5日に発生した天安門広場の流血事件の責任者として、すでに公開の場には姿を見せなくなっていた鄧小平の一切の職務を取り消した<sup>7)</sup>。その決定には、文革の途中で自分が抜擢した華国鋒であれば、文化大革命の受益者の一人として、文革推進派と協力してその肯定的評価の維持にも配慮を払うだろうという毛沢東の期待が混じっていたのかも知れない。

もしも毛沢東がそのようなことを期待していたとしたら、彼の死去から1カ月も経たない10月6日に実行された、江青、王洪文、張春橋、姚文元ら「四人組」の逮捕によって、その期待は完全に裏切られることになる<sup>8)</sup>。すでに見たとおり、毛沢東の死去で彼が死ぬ瞬間まで維持した毛沢東権力の絶対主義的体制はすでに崩壊してしまっていたのだが、文化大革命を推進した中心人物の内、この時点まで党の中央に生き残って居た最も重要な四人が逮捕されたために、この運動を推進していた精神的原動力までが消滅したのであった。前章に記した文化大革命に関する代表的概説書のどれにも彼らの逮捕の様子が記されているが、三人の男性は政治局の会議に出

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

席したところを、江青だけは自宅で逮捕された。長年毛沢東の警衛長を務めた、いわば公安のプロの汪東興が立案・実行しただけあって、この四人組逮捕は見事に成功した。他の著書よりも人脈や派閥関係にくわしい中島嶺雄著前掲書下巻には、汪東興が毛沢東と親密な関係にあり、劉少奇のソ連訪問に監視役として同行するなど、文化大革命にも深く関与していた事実が記されていて、これは彼にとっても重大な決断であったことが窺える<sup>9)</sup>が、上海グループに属していなかったことがその決断を容易にしたらしい。勿論この逮捕は汪の独断で行われたわけではなく、華国鋒総理および解放軍の長老葉劍英らの指示の下、実務派財務官僚の高官、李先念、北京市革命委員会主任の呉徳などの同意を得て行われており、王と張の逮捕には華国鋒自らが立ち会い、「党と社会主義に対する罪」で逮捕するという決議を読み上げている<sup>10)</sup>。華国鋒はこの逮捕に関して最初から首謀者の一人であり、他人の示唆によって実行したわけではない。マ・シ共著前掲書では、華国鋒が「この決断を下すのに呻吟していたようだ」と記しているが、それは勿論「自分と同じく文革の果実を手にした指導部の唯一の生き残りメンバーたちをクーデターで倒そうとしていた」<sup>11)</sup> ために他ならない。

逮捕された時、王洪文は「こんなに早く起こるとは思わなかった」とつぶやいた<sup>12)</sup> そうだが、華国鋒が早々に四人組逮捕を決断した契機となったのは、新設された王洪文直属の事務所（值班室）から総理の華に無断で多くの省党委員会に当てて変則的な命令が出され、奪権の動きがあることを湖南省の元同僚、張平化から知らされたことだった、とされている<sup>13)</sup>。それと同時に、文革推進派は『人民日報』などを通し、華国鋒とは無関係に毛沢東の遺志と称する「既定方針通りにやれ」というキャンペーンを繰り返して、毛沢東死去の影響を最小限に止め、自分たちの既得権を守ろうとしていた<sup>14)</sup> ことも確かである。これらの事実によっても、四人組の側には

文化大革命受益者の一人である華国鋒を仲間に引き入れ、彼と協調して既得権を維持しようとする方針はなかったことが分かる。たとえ毛沢東が華国鋒を後継者に選ぶことで文化大革命の評価と四人組を守ろうと配慮しておいたとしても、肝腎の四人組の側に、そうした遺志を活用するつもりはなかったのである。地方の党官僚や公安関係者として経験を積んで来た華国鋒<sup>15)</sup>と、革命闘争の指導者として文化大革命を推進してきた四人組とでは、肌合いが違い過ぎて協調することは不可能だったのだろう。また文革初期に「二月逆流」などで多数の軍人が失脚し、林彪の死後に彼らが相次いで復権していた解放軍では、四人組は極度に憎まれていた。そのため華国鋒が四人組逮捕を決意した途端、軍の一部は全面的に協力したし、事後に首謀者の葉劍英らから説明を受けた時、残りの高級幹部たちはその事実を異存なしに受け入れた。党や政府機関の高級幹部、その他の主要団体の反応も同様であった<sup>16)</sup>。一般大衆の反応はそれに輪をかけたもので、中央政治局が北京で「連絡会」を何度も開催して四人組逮捕の経過を説明すると、そのニュースはたちまち巷に伝わり、北京の市場では3匹のオス蟹と1匹のメス蟹と一緒に縛って店先にぶら下げ、人々はそれらを肴に祝杯を上げたという<sup>17)</sup>。

既製事実の成果を確実なものにするために、華国鋒は四人組逮捕の翌日に当たる10月7日、中央政治局によって、中共中央委員会主席（=党主席）、中央軍事委員会主席に任命され、国務院総理のポストと併せて一挙に三権のトップに立った<sup>18)</sup>。首都北京の状況はどうであれ、一時期全国であれば猛威を奮った運動の指導者たちの逮捕に反対する勢力が皆無だとはいいきれない。とりわけ四人組の出身地であると同時に今でも彼らの同志が実権を握っていて、文化大革命を始めるために江青が最初に同志を募った、いわば文化大革命発祥の地でもある上海の反応には警戒を要した。以下マ・シ共著前掲書の記述によると、華国鋒らは10月7日の早朝、上海最高幹部

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

の馬天水を事情の説明なしに特別機で呼び出し、彼を通して上海に工作する方針を採った。10月8日、北京との連絡が途絶えたために、異変が発生しているのに気付いた上海市革命委員会は、労働者民兵3万余りに緊急事態に備えよという警報を出し、2500の民兵に待機させた。その翌日には華国鋒が前述の二つのポストに任命されたというニュースが伝わり、四人組についての問い合わせに対して電話に出た馬天水が「みんな元気になっている」と嘘をついたので、上海の革命委員会は安心して、労働者民兵（なぜか数字は増大しているが）11万人動員の警戒態勢を解除したため、内戦の危機は去った<sup>19)</sup>、とされている。厳・高共著の記述では経緯はさらに複雑で、上海革命委員会は一時期過激な反応を示し、パリ・コミューンのように徹底抗戦して後世に革命の夢を託そうという意見さえ出たらしいが、一般に四人組逮捕のニュースが流れると、上海の三つの大学の教職員や学生が街頭デモに繰り出して新しい事態を歓迎し、全上海は四人組失脚を喜ぶ奔流に飲みこまれてしまい、その後上海市の四人組関係者は一斉に排除された<sup>20)</sup>、と記されている。

こうして毛沢東によって周恩来の後任に任命された華国鋒は、毛沢東の死後1月も経たない内に行った四人組逮捕によって、毛沢東にさえ与えられたことがなかった、党と軍と政府のトップという、中国共産党政権が成立して以来前例のない高い地位についた。しかし彼の立場はジレンマに満ちていて、はなはだ不安定なものであった。彼が今日の地位についている最大の根拠は毛沢東の指名であり、極端に言えば「あなたがやれば、私は安心だ」<sup>21)</sup>の一言に支えられている、と言っても過言ではない。しかし彼を頂点に押し上げた四人組逮捕という行為は、彼の権力の基盤である毛沢東の権威を著しく傷付けるものであった。彼らは毛沢東が自分の二大偉業の一つに位置付けていた文化大革命の推進者であり、その中には毛沢東の未亡人が混じっていたからで、これ以上に毛沢東の威信を傷付ける行為は

考えられないであろう。華国鋒は自らのよって立つ基盤を、自分の手で掘り崩してしまったのである。しかし相手が相手であり、彼の決断が中国人民に恩恵をもたらしたことは、その後の経過から見て明らかだと思われる。過渡期の権力者としては、早期に四人組逮捕を決断したというこの一事だけで、歴史上の積極的評価に値するだろう。

しかし権力者たるものは、自分の支持者に対する義理からも、自らの権力を守る衝動を押え難くなるものようである。とりわけ華国鋒のように、たとえ名目的にせよ党、軍、政府のトップという未曾有の栄誉に包まれ、メディアによって絶賛の声を浴びた場合、自らの権力を一日でも長く維持したいと望むのは当然である。華国鋒は自らの権力基盤である毛沢東の権威を高めるため、その著作集の刊行や毛沢東記念堂の建設を推進し、また毛沢東の個人崇拜政策を引き継いで、天安門広場の毛沢東の肖像の隣に自分の肖像を飾らせた<sup>22)</sup>。さらに自分の指示で執行された四人組逮捕が、中国の社会に歓迎されていることを確信できた1976年10月26日には、「当面のところ『四人組』批判と鄧小平批判とを結びつけて推進する」、「『四人組』路線は極右路線である」などと発言した<sup>23)</sup>。これは自分こそ毛沢東思想の正統な継承者であり、異端者であった四人組を排除しても毛沢東の権威は傷付いておらず、毛沢東のお墨付きは有効であるという意味に取れる。

その経歴、功績、人脈など、あらゆる意味で自分よりはるかに偉大な鄧小平の復帰を抑えておくためには、彼が毛沢東によって排除されたという事実に頼るしかないために、さらに華国鋒は、その翌1977年の2月に『人民日報』その他3紙誌において共同社説を発表させた。それは、「毛主席の下した決定であれば、すべて断固として守り、毛主席の指示であれば、すべて変わることなく順守する」という指針の宣言で、後に「二つのすべて」論とよばれている<sup>24)</sup>が、毛沢東と長らく行動を共にしていた四人組の逮捕自体この指針と矛盾していて、これを厳密に実践することは不可能で

## 現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

あった。またあらゆる面で文化大革命体制からの解放と毛沢東離れが求められている当時の中国の状況とは、真っ向から対立する指針でもあった。せっかく四人組逮捕を断行しておきながら、文化大革命の再現を招きかねないこのような指針を打ち出したことで、一般市民の華国鋒への期待は冷め、鄧小平の復帰を望む声が一層高まったはずである。鄧小平自身は、自分よりも17歳も若い後輩と正面から争うつもりはなく、すでに四人組逮捕の直後と1977年4月の二度にわたって華国鋒や党中央あてに、四人組逮捕の功績を賞賛し、自分の党籍が剥奪されていないことに感謝の意を示すなどの内容を含む友好的な書簡を送り、一応自己批判らしきものをも行っている。ただし早くも二度目の書簡では、「二つのすべて」論に問題があることを指摘しているという<sup>25)</sup>。元来それほど強烈な権力欲の持主ではなかったらしい華国鋒は、鄧小平の4月の書簡を好意的に受け入れて、その復帰を認めることにした。

華国鋒はまことに過渡期にふさわしい人物で、四人組逮捕の際だけは果敢な態度を示したが、その他の行動は全く過渡期的曖昧さに包まれていたような印象を受ける。何しろ、死ぬ数カ月前に急遽彼を周恩来の後任に任命した後、毛沢東が与えた指示自体が、「ゆっくりやれ、あわてるな」、「過去の方針に照らして行え」だった<sup>26)</sup>のだから、それも無理はないのかもしれない。すでに見たとおり、彼が打ち出した「二つのすべて」論という指針自体実践不可能であり、あるいはそこまで無理をして阻止しようとしていたはずの鄧小平の復帰をあっさりと認めたことも、一貫性を欠いていると言わざるを得ない。実は四人組逮捕という快挙自体、彼のそうした行き当たりばったりの行動の一つだったのだろう。王洪文が驚いたとおり、普通の人ならばあれほど早い時期に決断できるはずがないからである。彼の時代の経済は、プロジェクトが濫立して輸入過多に陥ったために、後に「洋躍進」<sup>27)</sup> という名で批判されているが、この事実自体も彼の行き当た

りばったりな性格の現れだと考えれば辻褄が合う。まさにこのような一貫性のない人間がトップにいたからこそ、中国はスムーズに過渡期を経て、転換期を迎えることができたのである。有能で辣腕な鄧小平にとって、こうした人物の実権を奪い取り、彼が占めていた三つの頂点を子分たちと分かち合うことがそれほど困難ではなかったからである。相手がもっと思慮深かったり、権力への執着心が強い人間であれば、こうはいかなかったであろう。第一二通の殊勝な内容の書簡ぐらいで、あれほど早く鄧小平の復帰を許したとは到底考えられない。

1977年7月、第10期中央委員会第3回全体会議が開かれ、華国鋒の党・軍の主席就任を追認、四人組の断罪と党からの永久追放などと併せて、鄧小平の全職務への復帰が決定され、彼は党副主席、中央軍事委員会副主席兼参謀総長、國務院副総理に復帰、華国鋒、葉劍英に次ぐナンバー3の地位を確保した<sup>28)</sup>。鄧小平はこの会議で、毛沢東が若い時に唱えた「实事求是」ということばを引いて、「二つのすべて」論を批判した<sup>29)</sup>。続く8月の第11回党代表大会で、華国鋒は毛沢東の継続革命論を称賛しながらも、文化大革命の終了を宣言し、四つの近代化建設を提唱した<sup>30)</sup>。その翌年1978年は、鄧小平の「实事求是」をめぐる論争が激化する中で、毛沢東体制への見直しが大幅に進んだ年で、右派分子のレッテルをはがす決定が行われ、文化大革命の悲惨な現実を描いた「傷痕文学」が続々と発表されている<sup>31)</sup>。そしてこの年の11月に始まり中央から省や大軍区の主要機関の主な責任者たち212名により、36日にわたって続いた中央工作会議は、その後の中国の路線を決定するための「関ヶ原の合戦」だったとされている<sup>32)</sup>。この席で軍の長老や党の指導者が次々と発言し、彭徳懐と文革の失脚者たち、そして第一次天安門事件の犠牲者の名誉回復が次々と決定され、また華国鋒の指導の下で進められている「洋躍進」に対する批判も行われて、汪東興と華国鋒が「二つのすべて」論をめぐる自己批判を行った<sup>33)</sup>。こ

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

うした論議の後に開かれた党第11期中央委員会第3回全体会議は、「文革路線から近代化路線へ」の歴史的転換を図るに至る<sup>34)</sup>。

鄧小平が進めた奪権の動きはその後進行し、1980年2月には汪東興ら華国鋒の取り巻きのグループが失脚し、劉少奇の名誉が回復され、同年8月には華国鋒が首相を辞任して趙紫陽と交代した<sup>35)</sup>。翌1981年6月の中共第11期中央委員会第6回全体会議における「党の歴史問題に関する決議」で文化大革命は全面的に否定され、華国鋒は党主席と党中央軍事委員会主席を辞任し、胡耀邦が党主席に、鄧小平が軍事委主席に就任して奪権は完成した<sup>36)</sup>。しかし失脚が即労働キャンプ入りを意味した文革時代とは異なり、華国鋒らはその後中共元老として、一定の待遇を受けていたらしい<sup>37)</sup>。他方文化大革命後の中国では、1978・9年に発表された魏京生の「5番目の現代化」のように、民主化を求める声が出始める<sup>38)</sup>が、鄧小平はそうした動きを認めようとはせず、毛沢東の誤りは取るにたらぬもののだとして、その功績を否定したり中国共産党の一党独裁体制を改めようとする動きには同調しようとしなかったばかりか、これを弾圧した<sup>39)</sup>。さらに1989年6月4日の第二次天安門事件では、民主化要求デモに対して解放軍に発砲させ、多くの死傷者を出しており<sup>40)</sup>、その後も中国は4つの現代化によって大きく発展しながら、2010年には劉曉波のノーベル賞受賞を妨害する<sup>41)</sup>など、民主化に関しては進展が認められない。

中央の権力の動きばかりを先走って追い過ぎたが、毛沢東が死去した後、地方でも中央に劣らない変革の動きが進行した。それは、「大躍進政策」から生まれ、毛沢東の共産主義が中国にもたらした最大の成果の一つとして礼讃されながら、実は農民の労働意欲を低下させ、中国の農業生産の発展を阻む最大要因となっていた<sup>42)</sup>人民公社にメスを入れる試みであった。共産主義諸国に見られた集団農業の試みを眺める時、私たちは人力飛行機のコンテストを眺めているような感慨に耽らざるを得ない。原理的に人力

では空を飛べない人類が、さまざまな工夫によって人力だけで飛翔する姿には敬服しないではいられないものの、空を自在に飛び回することは不可能なのである。資本主義的モチベーションを欠いた集団農場では、スローガンや勲章で一時的に労働意欲を高めることはできても、それを長期に亘って保つことは極めて困難であった。王曙光著『現代中国の経済』によると、毛沢東が死去した年の翌年の1977年から、安徽省と四川省の一部で、人民公社の集団農作業方式を小規模グループ化することで、自発的に農業生産請負制を導入した。この下からの改革は、地元党組織と行政機関からの支持、さらに中央政府の実質的黙認を得て勢いづいて周辺に拡大した。さらに「包産倒戸（戸別請負制）」に進んで、農業生産の組織は一気に農家を基礎単位にするに至った<sup>43)</sup>、とされている。

この問題に関して、その記述に若干の違いが見られる天児著前掲書では、著者自身が安徽省鳳陽県を訪ねて聞き出した、農民たちが幹部の逮捕まで覚悟して最初の一步を踏み出した様子が記されている<sup>44)</sup>が、ともかく1978年以降に鄧小平らが進めた毛沢東体制からの転換の決議<sup>45)</sup>がこうした変化に対する追い風になっていたことは言うまでもない。当時の安徽省党書記は鄧小平に近い万里で、3年間の期限付きで「包干倒戸」を容認してその成果に注視したところ、食糧生産は従来の3倍近くに上り、1980年春には同県内の他の村に、翌年には安徽省全体に、そして1982年には全国に広がった<sup>46)</sup>。毛沢東の故郷湖南省を含む8つの省で、「“単干風”を断固防ごう」との呼びかけがなされるなど、抵抗も少なくなかったらしい<sup>47)</sup>が、何度かの会議や鄧小平の評価を経た後、1982年1月、党中央は全国農村で戸別請負制を積極的に普及することを決定した<sup>48)</sup>。同年11月から12月にかけて開かれた全人代会議で、大幅に改訂された新憲法が採択され、その内の最も重要な事項の一つが「人民公社」の解体宣言であった<sup>49)</sup>。こうして人民公社が解体され、戸別請負責任制の実施が進められ、野菜や果樹の栽培に特

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

化する専業農家も出現して、「万元戸」と呼ばれる豊かな農民も出現し、解体宣言からわずか3年足らずの85年6月に解体の完了が宣言され、わずかな例外を除くと「大躍進政策」が生んだ毛沢東の共産主義の遺産はこの時消滅した<sup>50)</sup>。

今なお人口の6割が農業に従事していて、改革・開放政策が採用された1970年代後半には、農民人口が全人口の7割を越えていた<sup>51)</sup> 中国のことなので、農業以外の職業に従事していた3割に満たない人々を除くと、ほぼ何らかの形で人民公社に関与していたはずであり、その組織が解体されて個々の家族が生産の責任を負い、その結果得た成果を自由に消費するという、個人と家庭のレベルでの資本主義の復活は、中国人民に強い衝撃を与えずにはおこなったはずである。ただし人民公社の生産活動は農業に限られず、土木事業や食品加工、さまざまな工業なども行われていたのだが、それらの活動も郷鎮企業として独立した<sup>52)</sup>。いわば大人の7割以上が毎日通っていた会社が突然消滅して、その資産を貸与してやる代わりに各戸別、あるいは組織別に独立して経営せよ、と命じられたようなものだから、国民の意識改革のためには絶大な効果があったに違いない。まさにこの国民の7割以上を巻き込んだ独立採算制の私的経営、いわば資本主義的制度の復活というショック療法こそ、現代中国にモンタペルティ現象を発生させた最大の要因だったのではないだろうか。幸い人民公社の主要な業務が成員の大半が精通している農業であり、革命以前には各戸が個別に農業に従事してきたという事実があったからこそ、これほど大胆な決定が行なえたものと思われるが、おそらく中共中央の100の決議や通達よりも、人民公社の解体という一事の方が、中国人民の頭に体制が転換したことを叩きこむために、はるかに効果的だったはずである。勿論これほど膨大な数の人間が、一挙に社会主義体制から資本主義体制<sup>53)</sup>への転換を体験した例は世界史上初めてであり、ヨーロッパで何世紀もかけて進行した封建体制か

ら資本主義体制への転換などと比較すると、その規模と言い、速度と言い、まさに世界史上未曾有の出来事であった。周知のごとく、中国の農民は戸籍制度によって都市部の住民と差別されていて、不利な立場におかれている<sup>54)</sup>のだが、人口の大半を占めていたこの底辺の農民たちが、真っ先に改革・開放の衝撃を体験したという事実の影響は、いかに強調してもしきれないであろう。さらにこの決定がもたらしたものが、単なる精神的衝撃にとどまらず、当時中国が世界に最も誇ることができた豊富な人的資源<sup>55)</sup>を、様々な産業に供給するために不可欠な基本的措置であったことは、今更指摘するまでもあるまい。

ところで中国に関連したあらゆる事柄についての一人の全く無知な門外漢として、ここで一つの疑問を提起することをお許しいただきたいと思う。それは南・牧野共著『中国経済入門 [第二版] 世界の工場から世界の市場へ』に見られる、以下のような記述に関する疑問である。「(鄧小平時代に行われた) 社会主義から市場主義への移行は、いわゆるショック療法(ビッグバン)ではなく、新しい政策の成果を見極めながら漸進的に事をすすめてきた点に特徴があるといわれる。』<sup>56)</sup> たしかに経済特区を設定してその成果を確かめながら慎重に政策を模索していくやり方などに関してはこの通りのことが言えるであろうし、わが国の代表的な入門書に記されたこの一文が、中国経済の改革の全般的な傾向に関する基本的な通説を表現したものであることは理解できるつもりであるが、その後のすべての改革の出発点となった人民公社制から戸別請負制や郷鎮企業請負制への転換に関しても同じことが言えるのだろうか、というのが私の疑問である。先に記した通り農民が国民の圧倒的多数を占めていた時代に、おそらくその農民の大半が所属していた組織に対して、鄧小平が実権を握ってからわずか数年の内に解体宣言が下されているのである。この経緯を見て私を感じる疑問の一つは、もしも最初に戸別請負制の実験が行われた安徽省の寒村

## 現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

小崗で、1979年に気候不順が発生し、実験が失敗していたらどうなっていたらろうか、というものである。たまたま実験が成功したから良かったものの、失敗していたら人民公社は解体されなかったのであろうか。また寒村で行われた小さな実験の成果を桿子にして、数年の内に一挙に全国の人民公社を解体してしまうとは、これでも漸進的と言えるのであろうか。何しろ人民公社の存立は何億人もの人間の生活に関わる重大な問題である。それにもかかわらず、1979年から81年にかけて、ごく一部で行われた実験的な試みの好成績だけに基づいて、82年には人民公社解体宣言が行われ、85年にはそれが完了したとされているのである。おそらく中国の農民は、文化大革命が生み出した毛沢東絶対主義的体制にも、その毛沢東の遺産である人民公社にもすでに飽き飽きしていたということだったのであろう。勿論私は人民公社の廃止を惜しんでいるわけではない。要するに私が言いたいのは、この転換期には常に慎重な漸進策だけが用いられていたのではなく、むしろその出発点では、大胆なショック療法が、国民の大半を巻き込む仕方で行われたのではないかと、ということである。そうしたショックが出発点で与えられたからこそ、中国人は一気に走り出したのであり、一旦走り出した国民に対してはもはやショックは必要なく、慎重に試行錯誤を繰り返す漸進的な方法でも十分だったのではないだろうか。こうした私の見解が全くの誤解であれば、是非専門家からご教示いただきたいものである。

このように毛沢東的社会主義体制からの離脱は農村部において先行し、1984年ごろまでは、万元戸の出現など、農村部の農業生産においてその成果が目立っていたようである<sup>37)</sup>。しかしやがてその効果は都市部の第二次および第三次産業にも現れ始める。人民公社の場合のように解体などという極端な手段は取られなかったが、農村部において人民公社が占めていたのとはほぼ同じ「生産・生活単位」および「行政・政治単位」という役割を

都市部において果して<sup>58)</sup>、1979年の工業総生産の81.0%、都市部従業員数の78.3%を占めていた国有企業にも、70年代後半から改革のメスが入られ、企業は自主権を拡大するとともに請負制を導入し、他の役割から脱して企業として独立する方向に進められた<sup>59)</sup>。人民公社の場合とは異なり、工場の機械を分割して貸与したり、生産単位毎に独立を認めたりするわけにはいかない。「鉄碗飯」と呼ばれたその体制の改革が困難だったことは、2001年に都市部従業員の51.7%によって、工業総生産のわずか18.1%を生産しているという数字からも明らかである<sup>60)</sup>。これは1979年の小崗に竜巻が発生したために実験に失敗して、人民公社が解体されずに存続した場合の将来図を予測させる数字でもあり、少なくとも数字だけを見た場合、2001年に4.5%の従業員数で28.5%を生産する外資企業や9.0%で29.6%を生産する株式制企業と比較すると、国有企業の非効率ぶりは著しい<sup>61)</sup>。

この時期に行われたもう一つの重要な改革は、経済特区の設立である。その発足時の状況を王著前掲書の記述に基づいて眺めると、1979年末から翌年3月にかけて、党中央は広東省と福建省の党委員会から出された、深圳、珠海、汕頭（以上広東省）と、福建省の廈門の4都市に「輸出特区」を設立するという報告を承認した。それは香港、台湾、東南アジアの華僑の資本と、西側諸国の資本とを導入して、対外輸出を中心とする地域経済の発展を推進するための試みで、製品の輸出と海外における販売網開発のために、中継基地となる国際経済センターからできるだけ近い地域を選ぶ必要があったため、香港に近い広東省の3つの都市と、台湾海峡に面した廈門とが真っ先に選ばれ、そこでは国際貿易を振興するために、中国国内の他の地域とは異なった法律に基づいて、特殊な課税制度、外貨管理制度、税関制度その他が設けられることになった。経済特区に選ばれた4都市は、いずれも人口30~60万人程度の中規模地方都市で、近代的産業が空白であることや、歴史的に海外との交通が盛んで、多くの華僑が海を渡って海外

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

に進出しており、その送金に支えられて、地元住民の生活水準が他の地域より高いことも共通していた<sup>62)</sup>。

主なものだけでも以上のような改革が試みられた初期段階では、特に人民公社の解体などを見る時、まさに五里霧中の状態で試行錯誤が行われていたという感が禁じ得ないのではないだろうか。人民公社の解体、国有企業の改革、そして経済特区の創設など、いずれも毛沢東が聞いたら、烈火のごとく怒りだしたに違いないはずの改革ばかりであり、文革推進派が鄧小平を攻撃するために用いた「走資派」ということばは、非難でも誹謗でもなくて、鄧小平がやりたがっていたことのまさしく正確な表現であったことを認めねばなるまい。ところがそれ以後の中国人民は、鄧小平の真意を悟って憤慨するどころか、彼とその部下たちが構想した改革・開放路線を走り続けた。それにとまって中国経済が今日に至るまで、ほぼ右肩上がりの発展を遂げたことは周知のとおりである。その発展ぶりに関してはすでに無数の著作が刊行されているが、本論の場合、二つだけ具体的な数字の表を示してその証拠を挙げておけば十分だと思う。そこでまず最初に私が選んだのはミッチェルの『国際歴史統計 アフリカ・アジア・オセアニア 1750-2000 第4版』<sup>63)</sup>の20世紀における中国の輸入と輸出の総量を示した表から得られた、5年毎の数字の抜粋である。こうした統計の信憑性に関して論議の余地があるとしても、本論の場合中国経済の驚異的な拡大ぶりを示すことができれば十分であると思われる。(単位は10億元)

年数	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995
輸入	2.13	6.11	6.51	5.53	5.61	14.74	29.88	126	257	721
輸出	2.02	4.87	6.33	6.31	5.68	14.30	27.12	80.89	299	… <sup>64)</sup>

ミッチェルの表は1995年の輸出の欄が空白であり、それ以後も欠けてい

るので不備なものではあるが、50年代から70年代初めまで続いていた1桁の数字がわずか20年足らずで3桁になっていることから、1970年代以後の中国経済の急激な拡大の証拠としてはこれだけで十分ではないかと思われる。やや意外なことは、毛沢東が死去する以前の1970年代の前半にすでに顕著な伸びが見られることで、その変化は1972年の輸入6.40，輸出8.29から73年の輸入10.36，輸出11.69と2桁に突入したあたりを起点としている<sup>65)</sup>。1971年7月のキッシンジャー，72年2月のニクソンと9月の田中角栄の訪中などから発生した国際関係の新しい動きが，こうした変化とは無関係ではあり得ないであろう。まだ毛沢東が生存し，四人組の監視の目が光っていた時代から，早くも中国では資本主義的活動が目覚めつつあったのであり，おそらく上からの転換に先駆けて，現場レベルで産業や貿易が復活しつつあったことが推測される。

私が示すもう一つの表は中国国民一人当たりの消費とGDPと伸び率を，改革が始まった1978年を100として示した，以下の表である。

年度	1978	1985	1990	1995	1998	1999
消費	100	181.3	237.2	394	491.5	521.3
GDP	100	175.5	221	327.7	393.1	423 <sup>66)</sup>

この表は折れ線グラフの数字の部分だけを引用したものであるが，わずか21年間で消費は5倍を超え，GDPも軽く4倍を超えるという驚異的な発展ぶりを示していて，元のグラフが右肩上がりを示していたことは言うまでもない。

その後の中国の発展過程については，様々な仕方でもとめることが可能だと思われるが，参考のために中国人自身によって行われた総括を二つだけ紹介しておこう。その一つは上海の経済研究所長(り)教授の手になるもので，第一段階：初期段階（1978－84），第二段階：開拓段階（1985－

91), 第三段階: 突破段階 (1992-99), 第四段階: 深化段階 (2000-現在) の4段階に分けるといって甚だ簡潔なものである。厲教授は各段階について敷衍した後、改革の3つの道筋として、1) 非国有経済発展による経済活力の向上、2) 計画体制の突破と市場経済の樹立、3) 対外開放による国内改革の促進の3つを列挙している<sup>67)</sup>。もう一つの総括は王前掲書によるもので、序章から6章までの7つの章が各々の時代を扱っている。その目次に示された各章の見出しは、この著者による時代区分を兼ねている。参考のために、各々の章の見出しに「期」という文字を加え、後はそのまま紹介しておく。解凍期-国家再建のための改革開放へ (1975-78), 始動期-底辺からの出発 (1978-83), 展開期-全面開放の時代へ (1984-88), 挫折期-経済社会諸問題の露呈 (1989-91), 加速期-高度成長時代の幕開け (1992-95), 試練期-危機を乗り越えて (1996-98), 躍進期-新興経済大国を目指して (1999-2003)<sup>68)</sup>。この時代区分に従うならば、常に順風満帆だったわけではなく、発展途上において少なくとも2度は危機にさらされていたことが推察できる。この著書は2004年に刊行されているが、その後も好調な発展が続き、北京オリンピック (2008年) と上海万博 (2010年) が成功裡に終わったことは、周知のとおりである。

すでに見たとおり鄧小平が試みた一連の改革は、確実に毛沢東を怒らせる試みであった。こうした改革が実行されて、その成果が長年にわたって現れ続けているという事実は、文化大革命が作り上げた毛沢東絶対主義の体制が完全に崩壊したことの最も明らかな証拠である。毛沢東が林彪および江青ら文革推進派の同志とともに、年少の紅衛兵までを動員して作り上げた体制は、多数の国民に塗炭の苦しみを味あわせたあげく、一時期は全国支配を確立したかに見えたが、所詮長年にわたって国民の多数の同意が得られるものではなかった。しかし毛沢東の存命中は、彼を公的に批判している人は強制収容所の中にしか存在せず<sup>69)</sup>、そのような体制がおよそ10

年間存在していたことは否定できない。しかしその体制は、毛沢東が死去した途端、四人組逮捕という非常手段によって覆えされ、同時に改革・開放への動きが始動した。それは一滴の血も流さない措置ではあったが、すでに毛沢東という支柱を失っていた脆弱な構造を崩壊させるには十分な動きであった。したがって外国軍の侵略は全くなかったけれども、この時点で一つの特異なイデオロギー国家が敗北を喫して崩壊したと見なすことが可能なのである。したがって、一国の敗北によって発生するモンタペルティ現象が、この時点の中国で発生しても少しも意外ではない。事実この時の転換を契機として、中国経済は未曾有の発展を遂げ続け、その発展ぶりはその規模や速度から考えて、恐らくかつての第二次大戦後の日本経済の発展ぶりを凌駕するものである。こうした経緯に基づいて、筆者は文化大革命体制から転換して経済の改革・開放政策を採用した現代中国に、モンタペルティ現象が発生していると考えているのである。

### 第三章 なぜ現代中国では、イデオロギー闘争の終焉が モンタペルティ現象を発生させたのか

ようやく私たちは前二章の準備段階を経て、なぜ現代中国では文化大革命というイデオロギー闘争の終焉から、通常は敗戦から発生するはずの開放・発展型のモンタペルティ現象が発生したのかを考察する段階に到達した。すでに記したとおり、四人組の逮捕がもたらした文化大革命の終焉自体、毛沢東絶対主義を国是とする特異な国家体制の崩壊を意味しているので、毛沢東が唱えた「造反有理」のスローガンの下で展開されたイデオロギー闘争の終焉は、そのこと自体を一種の敗戦と見なすことも可能なのであるが、あくまでことばの違いにこだわる立場もあり得ることを考慮して、上記のような問題を設定し、その理由を考察しておくことは無意味とは言えない。それには単一ではなく、複数の理由が考えられるので、それらを

以下に列挙しておく。

1. まず真っ先に考えられるのは、文化大革命はたしかにイデオロギー闘争であったとはいえ、現実には戦争に極めて近い出来事だった、という事実である。毛沢東がこの闘争を構想し始めた当時の中国は、劉少奇、鄧小平、周恩来らの指導の下で、毛沢東が引き起こした「大躍進政策」の失敗から受けた損害からようやく立ちなおりつつあり、一見内外ともに安定を保っているかに見えた。そうした状況の中で彼がかつて有していた自らの権力を奪回し、それをさらに強大なものにするためには、結局何らかの暴力に頼る他ないと判断したはずである。若いころから、政権が銃剣から生まれることを信じてきた<sup>1)</sup> 毛沢東には、それ以外の方法は考えられなかったに違いない。しかし当時すでに彭徳懐を失脚させ、その後任に忠実な同志の林彪を据えることによって一応解放軍を掌握していたとはいえ、直接軍事クーデターによって劉少奇を国家主席とする体制を打倒することには不確定な要素が多すぎた。軍の上層部には、朱徳、葉劍英らの長老を始め、林彪のライバルに当たる羅瑞卿や賀竜ら有力幹部がまだ健在だったからである<sup>2)</sup>。そこで毛沢東は、当面それとは別方面に暴力を求めざるを得なかった。

こうして動員されたのが、学生・生徒たちと民衆の暴力であった。姚文元らの論文で文化大革命の烽火を上げた後、1966年の春、毛沢東と江青たち文革推進派は自ら中央の権力と対決し、文革のリーダーの地位を奪取して権力の中枢に加わるとともに<sup>3)</sup>、各地で自分たちの尖兵となって戦うグループを組織することに努めた<sup>4)</sup>。やがて解放軍でも林彪の最大のライバル羅瑞卿が失脚して林彪とその配下がほぼ首脳部を支配し、もはや文革推進派に暴力で対抗できる組織が国内に存在しなくなるころには、文革推進派による迫害のために死者が出始める<sup>5)</sup>。こうした段階に達した1966年6月18日、以前から紛争が発生していた北京大学では、劉少奇らによって派

遣された工作組をめぐる混乱に乗じ、突如造反派の教員と学生たちは行動を言論から直接的暴力へとエスカレートさせ、学長ら権力者に三角帽子をかぶらせて謝罪させた後市内を引き回すという暴力ショーを実行して、一つの全国向けモデルを提供した<sup>6)</sup>。この方式は、さまざまなヴァリエーションが加えられて、全市そして全国へと広がった。こうした動きを真似て、清華大学付属中学で発生した紅衛兵運動は、「造反有理」という毛沢東のお墨付きを得て、たちまち北京市内から全国へと拡がり、8月18日には全国から集まった紅衛兵の100万人集会が開かれて、毛沢東の接見を受けるに至る<sup>7)</sup>。紅衛兵は「四旧打破」を旗印に旧来の陋習と戦っただけではなく、由緒ある文化財を破壊し、資本主義臭が強いと判断したあらゆる西洋風の品物と人間を攻撃した<sup>8)</sup>。文化大革命の特性から考えて、また常時『毛主席語録』を携帯しているという事実から見ても、この活動には毛沢東絶対主義が貫徹していたはずだから、結局彼らの判断の基準は毛沢東にあり、毛沢東が嫌いそうだと判断した人と物には、どのような暴力を加えても許されると信じていた<sup>9)</sup>ものようである。とは言っても、何が嫌いかについて一々お伺いを立てることは物理的に不可能なので、彼らの鋭いが幼い直感に従って恣意的に判断したに違いない。自ら兵と名乗っていたのは伊達ではなく、彼らは大真面目で自分たちこそ革命戦争の兵士であると信じていたので、文革推進派が扇動するままに、毛沢東の敵と信じる者の住居を家捜しして貴重品を没収し、捕えた相手に暴力を振るい、抵抗する者と不運な者とを殺し続けた<sup>10)</sup>。こうして作家の老舍、翻訳家の傅雷夫妻らの著名人とともに、多くの罪なき市民が無知な中学（＝日本の中高）生たちによる赤色テロの犠牲となった<sup>11)</sup>。

勿論こうした暴力は、中学生の間だけに止まらなかった。紅衛兵という組織は、たちまちあらゆる集団で、おそらく多くの場合は自衛のために結成され、様々な分野で主流派と反主流派との抗争が勃発した。もはや子供

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

たちの戦争ごっこの段階を越えて、大人たちが生存するために死力を尽くして戦う段階に突入した。すると学生の紅衛兵は不要になり、1968年8月に労働者毛沢東思想宣伝隊が北京の各大学に派遣された時点で紅衛兵運動は消滅し、同年12月には毛沢東の指示により、彼らは「上山下郷」運動のため農村に四散した<sup>12)</sup>。文革推進派はそのために大きな戦力を失うことになる。紅衛兵が振りかざした「造反有理」というスローガンは、当初はあらゆる組織に受け入れられて、常に分裂を引き起こす起爆剤として作用した。こうして、潜在的には全土が内戦のつぼと化したのが、賢明な指導者たちがいる所では、適当に妥協し合って大きな犠牲を避けたはずである。中央も闘争が激化し過ぎて、すでに危ない状態にある農業や工業の生産を妨げ、飢饉を招来するような事態は避けたいので、早くも1967年1月23日に解放軍の文革全面介入を命令してその調停を要請している<sup>13)</sup>。

それでも戦闘は避けられなかった。そうした戦闘の一つは、文化大革命の主要メンバーの出身地である上海で発生した労働者による奪権闘争である。臨時工らの集団、工人革命造反司令部を率いる王洪文を中心に造反活動が進められたのに対して、市長派も正規工による総数80万人の「赤衛隊」を結成して対抗した。1966年12月30日、工総司の10万人が約2万人の赤衛隊を襲って、4時間にわたる流血の戦闘の後に降伏させ、全国的暴力の幕を開けた。上海ではその後も争いが続いたが、「一月風暴」と呼ばれる闘争の結果、上海市長とそのグループは退陣して、張春橋、姚文元、そして王洪文ら文革推進派の有力な拠点が誕生した<sup>14)</sup>。1967年7月の武漢事件もそうした戦闘の一つで、百万雄師という労働者団体が、中央から派遣された文革推進派の使者、王力と謝富治を監禁した事件である。この時はたまたまこの地域の解放軍が、中央が支持していない集団を擁護したために闘争が長引き、大規模な戦闘が発生することとなり、その時期にこの土地を訪れた毛沢東自身ですら、飛行機で退避せざるを得なかった<sup>15)</sup>。

厳・高共著、前掲書、上所収、安藤・辻作成の「文化大革命関係年表」の1967年7月20日の項に、「江青、『文で攻撃し、武で防衛する』方針を唱え、武闘広がる」<sup>16)</sup>とあるとおり、この時点はまだ全国で武闘を伴う奪権闘争が始まったばかりであった。そして全国で奪権闘争が進められた結果、結局一般的に採用されたのは、1967年1月31日という早い時点で黒竜江省で最初のモデルが誕生した、革命委員会という方式であった。この省では第一書記の潘復生が率先して改革を受け入れて毛沢東の支持を獲得し、同時に軍区司令官をも味方につけて、自らを主任、汪家道少将を副主任とする革命委員会を立ちあげ、日常的業務と平行して革命を実践する体制を構築することに成功した<sup>17)</sup>。ただし抜目のない潘のように、第一書記から革命委員会主任に横滑りできた省はわずか3つしかなく、大半は横滑りに失敗して転落し、死者にきびしい中国らしく、自殺して死後に裏切り者呼ばわりされた省レベルの第一書記が3人にのぼるといふ<sup>18)</sup>。このことは、大半の省で厳しい奪権闘争が行われて、軍の援護を得た派閥が革命委員会を掌握したことを意味している。

解放軍の側も、当然協力した分だけ権力の分け前を求めており、各地の闘争の動向の決定権を握っていたおかげで、かつてなく軍人の存在感が高まった。1967年3月、軍事委員会は「三支両軍」というスローガンを発表した。それは左派、農民、労働者の三つを支え、軍事訓練と軍事管制を行う、という意味の言葉であり、特に軍事管制とは、部、省、地区を軍の管理下におき、司令官に秩序回復をまかせることだといふ。こうしたスローガンが出たこと自体、すでに紅衛兵や民兵による内戦が蔓延しつつある国内の秩序回復のためには、軍隊に頼る他はないという現実を表していたと言えよう<sup>19)</sup>。林彪事件後の1972年8月にこの方針が廃止されて原隊に戻るまでの間に、何と280万人もの解放軍の兵士がさまざまな職務についていた、とされている<sup>20)</sup>。当然上層部に関しても同様のことが言える。文化大

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

革命の担い手とされた三結合の内、革命幹部代表と革命大衆代表に比して、解放軍幹部の代表だけが突出して多数を占めていた。県レベル以上の革命委員会には4万8千人のメンバーがいたが、その圧倒的多数は解放軍将校であった。1968年の末、その年の夏の広西チワン族自治区流血の惨事<sup>21)</sup>などを経て、何とかようやく全国の省に革命委員会が設立されたが、その主任29人の内、6人が上将、5人が中將、9人が少將（将軍の比率が68.9%）で、残りの9人だけが党幹部だったが、全員が軍の政治委員を兼務していた<sup>22)</sup>。あるいは、広東、遼寧、山西、湖南、湖北の5省だけを見ると、県レベル以上のすべての革命委員会主任の81%から98%が解放軍将校だった<sup>23)</sup>。この種の数字は多くの資料で度々挙げられているが、要するに文化大革命が始まって3年も経たない内に、社会の上から下まで一気に軍人に埋め尽くされてしまった感があり、これでは毛沢東が林彪のボナパルティズムを警戒したのも無理はあるまい。中嶋著前掲書、上、には、当時の中国を「兵営国家」と評した文章があった<sup>24)</sup>が、この時期の中国はまさしくそのように見えたはずである。「造反有理」のスローガンとともに進められたはずの文化大革命が、結局軍人まみれの国家を生み出したのである。要するに紅衛兵の活動や相次ぐ内戦のために、中国国民はおよそ10年間に互って、ほとんど戦争に近い状態を体験し続けたのである。この前後に共産中国は朝鮮戦争やヴェトナム戦争など国外の戦争を支援し、中国自体も1969年には珍宝島でソ連と、また1979年2・3月にはヴェトナムと戦っている<sup>25)</sup>が、それら本物の戦争に較べても、被害者1億人、死者2千万という人的被害の桁外れの大きさ<sup>26)</sup>を考慮しただけで、文化大革命の方がはるかに大きな被害をもたらしたことは明白である。したがってこの運動から完全に解放されたことが、いかなる終戦にも劣らぬほど強い平和の効果をもたらしたことは当然の結果であった。

2. さらに考えられる二つ目の理由は、文化大革命という運動が戦争に勝

るとも劣らぬ強力な抑圧を国民に強い続けたため、この運動の終焉が敗戦の場合と同様に、抑圧からの解放を国民にもたらした、という事実である。文化大革命はけっして典型的なイデオロギー闘争だったわけではない。実は歴史上看られるすべてのイデオロギー闘争にはそれぞれ推進者の個性が刻印されているのであり、単なる理論闘争を越えて暴力的な闘争にまで発展したイデオロギー闘争の場合、純粋で無色透明なイデオロギー闘争などはあり得ない。しかしその中でも文化大革命は、次項でさらにくわしく論じるとおり、毛沢東という人物の個性が特にはっきりと刻印されたものであった。しかしかには个性的なイデオロギー闘争であったにせよ、やはり基本的な原理として採用したイデオロギー自体に強く影響されることは避け難いことであり、プロレタリア文化大革命の名で進められたこの運動が目指したことは、資本主義的活動に止めを刺して共産主義的国家を建設することであった。すでに文化大革命以前から、毛沢東はこうした目標のために、大躍進運動の時期に、当時の国民の7割以上を占めていた農民を人民公社として組織していたし、その残りに当たる都市の住民たちの多数を「国営企業」に吸収していた<sup>27)</sup>。だがいずれの組織も毛沢東が期待したような成果を挙げておらず、そのために劉少奇や鄧小平らはそれらの組織を改造するとともに、共産主義の理想から後退させようとした<sup>28)</sup>。そうした動きに激怒していた毛沢東は、文化大革命を成功裡に進めると、当然自分が当初に採用した原則を復活させただけでなく、さらに共産主義的性格を強めようとした。おそらく文化大革命が国民に及ぼした抑圧の最大の部分は、マルクス・レーニン・スターリンそして毛沢東自身に由来する共産主義的理想を国民に押し付けるための強制にあると見るのが妥当だと思われる。その内一党独裁制のように政治的性格の強い部分は、改変されずに今日の中国でも存続しているが、人民の圧倒的多数を束縛していた人民公社という組織そのものを始め、経済的性格の強い規則や制度などの多くは、

## 現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

毛沢東死後の転換において改廃され、その分経済活動の自由が大幅に許容されるようになった。すでに輸出入の変化において見たとおり、こうした抑圧からの解放がもたらした発展の数値には驚くべきものがあり、現代中国でモンタペルティ現象が発生した最大の理由は、文化大革命終焉後の転換に生じたこうした経済的改革、すなわち鄧小平によって推進された改革・開放政策の成果だと見なし得るであろう。

文化大革命が国民に及ぼし続けた影響には、もう一種類、イデオロギーからではなく、毛沢東個人から発生する抑圧が存在していた。文化大革命がもたらしたものが毛沢東絶対主義を国是とする体制である以上、毛沢東に対する個人崇拜が、国民に数々の抑圧を強いたとしても、決して不思議ではない。紅衛兵が常時『毛主席語録』を携行していたこと自体、一種の抑圧だと見なすことが可能である<sup>29)</sup>。毛沢東が個人的に国民にもたらしたと思われる抑圧の中で、特に際立っていたと推測されることは、彼が中華人民共和国の知的・文化的活動一般に及ぼしていた強力な抑圧である。すでに多くの人々によって指摘されている通り、毛沢東個人と知識人一般との関係は最悪であった<sup>30)</sup>。勿論郭沫若のような若干の例外はあったが、それはまさに典型的な原則を強化する例外であった<sup>31)</sup>。本来文化大革命という現象自体が、毛沢東絶対主義という特異なイデオロギーに基づいて知的活動一般を抑圧するものであった。その中でも最もはっきりと抑圧があったことが記録に残されているのは、教育と学問研究の分野である。毛沢東自身は、内戦などのため時折中断されているとはいえ、当時の一般的中国人よりも長い期間を学校で過ごしていた上に、一時期小学校の校長を務めたことがあるにもかかわらず<sup>32)</sup>、学業の妨げになることが明白であるにもかかわらず、中学生や時には小学生までを革命闘争に動員することに賛同<sup>33)</sup>したばかりか、それまでにも一種の疎開として必要に応じて行われていた「下郷」運動<sup>34)</sup>を一段と強化し、多くの就学中の若者を、貧農に学ば

せるためと称して農村に下放している<sup>35)</sup>。また自分は専門教育を受けた医師を身邊に抱えてその恩恵に浴しているにもかかわらず<sup>36)</sup>、専門教育を必要としない「はだしの医者」の普及に力を入れている。こうした立場を徹底させれば、ポル・ポトの知識人・専門家虐殺事件に行き着くはずである<sup>37)</sup>。結局文化大革命の究極の目標とは、毛沢東絶対主義の無知蒙昧な信者だけを残してその体制を永久に存続させるために、暗黙裡に推進された体制批判の予備軍である知識人・専門家の虐待・虐殺運動であった、と考えても大きな誤解ではあるまい。したがって文化大革命の終焉がもたらした、こうした体制からの解放は、教育活動と学問研究の再生・復活にそのまま通じていたと言えるだろう。私は前論文で、全世界の先進諸国の大学に中国人留学生が溢れているという、一見異常とも言える状況を紹介した<sup>38)</sup>。これは転換以後の体制において生れた新しい価値観がもたらした結果であり、本人たちの努力の成果であることは言うまでもないが、その背景に文化大革命によって教育を受ける機会を奪われた彼らの親たちが、人口抑制策のために一人しか産めなかった<sup>39)</sup>自分たちの子供に、自分が望んでも果せなかった学問研究の夢を託しているという事情があることを考えれば、十分納得できる話である。

3. 第一章や前項においてすでに指摘したとおり、文化大革命は単なるイデオロギー闘争ではなく、毛沢東の個性が強く刻印された、世界史上例のない極めてユニークなイデオロギー闘争であり、マルクス・レーニン主義よりもむしろ毛沢東絶対主義という原理に基づいていたと考えた方が実情に近い<sup>40)</sup>。このことが文化大革命による人的・物的損害を大きくしたことや、中国独特の悲劇を多数生み出したことは否定できない。しかしその後の発展を考える場合、毛沢東絶対主義の特異性にもいくつかの利点があったことを認めなければならないだろう。文化大革命が開始された当初は、毛沢東と林彪と文革推進派は心をつにして、奪権闘争に専念していた。

ところが奪権に成功して毛沢東の権力が比類なき高みまで上昇した途端に、それは強力な権力特有の自律性を持ち始めて、相対的なものから絶対的なものに変質してしまったのである。こうして文化大革命は、厳・高共著『文化大革命十年史』の構成からも窺える通り、毛沢東の権力奪回闘争から、ナンバー2に対するもぐら叩きゲームに変化したのである<sup>41)</sup>。こうした変化の最大の犠牲者は林彪で、主にナンバー2であったというだけの理由のために、彼は死なねばならなかったのである。文化大革命のこうした変化は、毛沢東の個人的な意志から生じたものではなく、むしろあまりにも強力になったため絶対主義的権力と化した権力そのものから発生する自律的な動きであった<sup>42)</sup>。もはやこの権力は余りにも強大になり過ぎたため、自らを相対化するナンバー2の存在を許さなかったのである。この場合毛沢東個人は何らかの指示を出す必要はなかった。紅衛兵が進んで毛沢東の意図を読み取ろうとしたように、権力を支えている者たちが必死になって毛沢東の意志を忖度して、まず劉少奇を倒し、続いて林彪を自滅させてしまったのである。その後、同じ力が作用して、江青、王洪文、鄧小平ら、自薦、他薦のナンバー2候補が正式のナンバー2に昇格することを妨害し続け、難病を患い死を目前にした毛沢東は、辛うじて同僚の中でも無名で目立たない存在だった華国鋒を後継者に指名することに成功した<sup>43)</sup>。しかしもしも毛沢東がもう少し長生きしていたら、華国鋒とて無事であったかどうかは分からない。晩年の毛沢東はいよいよ気まぐれになり、その行動は予測しにくくなったとされているが、文革推進派と実務官僚という対立する二つの勢力に支えられて存立している絶対的権力が自己の存在を誇示するためには、それ以上の方法は考えられない。ある意味、人民の予測から逸脱していればいるほど、絶対的権力の自律性が誇示されることになるからである。そうした逸脱の最たるものが、ニクソンの訪中までをもたらした対米交渉であった<sup>44)</sup>。珍宝島でソ連と戦火を交えたとはいえ、相手方

のトップはフルシチョフとは違って堅実な官僚タイプのブレジネフで、一応周恩来とコスイギンの会談も行われていたため、中国にはこの時点で緊急避難的にアメリカにたよる必要はなく<sup>45)</sup>、これはむしろ主に1969年4月に党規約で毛沢東の後継者と明記された林彪を完全に部外者にしたまま、自らの自律性を誇示するために行った行為だと見なすべきであろう<sup>46)</sup>。勿論1969年のニクソンによって発表されたグアム・ドクトリン以降のアメリカの態度の変化の影響も無視し得ないが<sup>47)</sup>、そうした変化に反応して従来敵視してきたアメリカ帝国主義と交渉すること自体、たとえば林彪や文革推進派のような忠実な同志にとっては、余りにも唐突な決断であると思なさざるを得ないであろう。厳・高共著前掲書所収の年表によると、国家主席問題における毛・林関係の齟齬が公になりつつあった1970年12月18日に毛沢東がエドガー・スノーと会見し、「ニクソンを歓迎する」と語ったとされていて<sup>48)</sup>、このあたりに毛沢東外交の新しい展開の出発点が見られるようである。何と毛沢東はその年の5月に、全世界の人民に対して、アメリカという侵略者との対決を呼びかける声明を発表している<sup>49)</sup>のだから、180度の方向転換と見なすことができる。こうした外交政策の転換は、まさに林彪との抗争と平行して進められ、林彪が死去した年の翌年の2月にまずニクソン大統領が、さらに9月には日本の田中角栄首相が訪中して、中国の国際世界への復帰が進行し始める<sup>50)</sup>。あまりにも強大になり過ぎて、もはや一貫性を保つことが不要となった独裁権力は、最終的な段階で過去のしがらみを捨て、国際社会への参加に向けて舵を切ったのである。この時毛沢東と林彪との摩擦を利用して、中国の繁栄にとって不可欠な進路変更にも毛沢東権力を導いたのは、周恩来の手腕であったことは言うまでもない<sup>51)</sup>。いずれにせよ文化大革命が生み出したのが、単なる東側陣営のマルクス・レーニン主義的権力ではなくて、むしろそうした権力との抗争・対決を辞さない毛沢東絶対主義的権力であった<sup>52)</sup>という事実が、従来の中国

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

の外交政策からの転換を可能にして、将来の発展の基礎となったという事実は否定し得ない。

4. モンタペルティ現象を発生させるための不可欠な要件の一つは、変化した敗戦国家に対して国際社会が好意的な反応を示すことであった。中世フィレンツェの場合は、フィレンツェを取り巻く国際環境が、シャルル・ダンジュエのナポリ王国征服の結果一転したため、一旦は敗北したはずのゲルフィ党とポポロによる政権が息を吹き返し、敗戦によって受けたさまざまな試練を糧にして、経済的・文化的大発展を遂げることになった<sup>53)</sup>。この場合にはむしろ国際関係自体が先に変化して、中世フィレンツェはその変化に助け起こされたという感が強い。そのためにモンタペルティ戦争の敗戦の影響自体は見過ごされやすく、私が行った指摘も簡単には理解され難いようである。それに対して第二次世界大戦後の日、独、伊三国に関しては、モンタペルティ現象という言葉は私以外誰も用いてはいないものの、それらの国々の戦後の復興が共通してしばしば奇跡と称えられたことは周知の事実である<sup>54)</sup>。アイケンベリーの『アフター・ヴィクトリー』はこの時の戦勝国、特に超大国となったアメリカの戦後処理の功績を高く評価した著書である<sup>55)</sup>。勿論アメリカの慎重で寛大な戦後構築の背景には、ソ連の勢力拡大と中国革命などによって発生した冷戦への配慮があった。戦後処理が常にうまくいくとは限らないことは、同書の第五章で論じられた1919年の戦後構築における失敗が、早くも14年後にドイツでナチズム政権を誕生させ、20年後に第二次世界大戦を勃発させた事実によって明らかである<sup>56)</sup>。文化大革命後の中国の転換の場合でも、国際社会の反応が、その成否を左右する重要な要素であったことは言うまでもない。勿論個人的にこの変化を受け入れようとしなかった人々もいなかったわけではないが<sup>57)</sup>、一般的に見て国際社会は中国で生じた転換に対してきわめて好意的な反応を示した、と言えそうである。それにはヴェトナム戦争での敗北を

目前にしたアメリカが全面的な方針転換を迫られていた<sup>58)</sup>、という事情も有利に影響したことは否定できない。いずれにせよ、前項で記した毛沢東が林彪をつまばげ敷においたまますすめた交渉の結果が、中国に新しい展望を開いたことは確実である。国連ではすでにニクソン訪中の前年の1971年10月に、台湾の国民党政府の代わりに中華人民共和国を代表と認めるという決議がアルバニアの提案により圧倒的多数で可決される<sup>59)</sup>など、国際社会では共産中国を容認する動きが加速されていて、中国をめぐる国際関係は全般的に好転しつつあった。しかしせっかく大統領の訪中で世界の注目を集めたアメリカとの関係も、台湾問題などがネックとなって劇的な改善をもたらすにはほど遠く、正式に国交が樹立されたのは、ニクソン訪中から約7年後のカーター大統領の時代、1979年1月1日のことであった<sup>60)</sup>。しかし毛沢東存命中の中国には国際的環境を活用し得る基盤が存在しなかったことや、毛沢東死後の過渡期的状況などを考慮すると、西側陣営のリーダー、米国との国交回復はまさに絶妙のタイミングで行われた、と見なすことができるであろう。またそれ以前に中国の経済発展の始動期を助けたのは、岸内閣時代に一時中断されたものの、LT貿易を通して、国交が回復する以前の1962年から粘り強く中国との貿易を続けていた日本の存在である<sup>61)</sup>。第二次世界大戦以前に長期にわたって中国に侵攻していた日本<sup>62)</sup>は、米国よりも早く1972年9月に中国との国交を樹立したばかりでなく、中国で発生していた変化を敏感に察知し、改革・開放政策が軌道に乗り出した1979年以降はODA援助を継続し、中国における港湾や空港、道路や鉄道、あるいは病院建設などのインフラ建設を支援するなどの形で、中国が新しく採用した政策の推進に協力した<sup>63)</sup>。当時の日本人には、政治家から一庶民まで、今日の日本人からはとても想像できない、中国人との和解を望む熱意があったのだ<sup>64)</sup>。それに較べると当時アジアで猛烈な発展ぶりを示していたいわゆる「四匹の虎（韓国、台湾、香港、シンガポール）」

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

には、それぞれの独自の事情があったために、90年代までは香港を除くと中国と直接大規模な交流を結ぶには至らなかつたらしい<sup>65)</sup>。しかし元来東南アジアの国々では、中国から脱出して各地で地歩を築いてきた数千万人にも及ぶ華僑の影響力が強く<sup>66)</sup>、彼らも故国との往来や通商を容易にしてくれることが予想される新しい政策に期待して協力を惜しまなかつたはずである。やがて90年代に入って韓国やそれらのアセアン諸国と中国との交流が全開の状態に達すると、経済特区を始めとする中国全土相手の貿易や外資による直接投資の大きな部分を、それらアジア諸国と日本が占めたのは当然である<sup>67)</sup>。その中でも1997年に英国から中国に返還されるはずになっていた香港は、1979年以来常に中国への直接投資額のシェアの大きな部分を占め続けたのである<sup>68)</sup>。勿論米国を始めとする他の欧米諸国との関係も無視できないが<sup>69)</sup>、日本その他のアジア諸国が中国の国際社会への復帰を支援したことが、中国経済の発展にとって最も強力な追い風となったことは誰も否定できないはずである。

なお中国で改革・開放路線が定着し始めたのと同じ1979年末以降、ソ連がアフガニスタンに大量の軍隊の派兵を開始したため、70年代を通して定着していた米ソ間のデタント（緊張緩和）が一気に破綻したことも、中国に有利な流れを形成したことは否定できないであろう<sup>70)</sup>。ソ連は1978年にアフガニスタンで発生した社会主義者と軍部のクーデターに乗じて、中東に有力な拠点を築いて東側陣営の拡大を図ろうとしたのだが、結果的にはおよそ10年に及ぶ泥沼のような戦闘の後に、何も得ることなしに撤退したばかりか、その後にソ連の体制自体の崩壊を招くこととなった<sup>71)</sup>。この戦争がソ連を慢性的に消耗させ続けていたために、中国は以前ほどソ連の軍事的圧力を感じることなく経済活動を展開できた上に、ソ連の勢力拡大を妨害することに専念している米国から一段と好意的な扱いを受けることができた。さらに1980年には米国の呼びかけに応じて約50カ国のモスクワ・

オリンピックのボイコット仲間に加わることで、20年来の敵、ソ連の面目を丸つぶれにすると共に、始まったばかりの対米関係をさらに緊密なものにした<sup>72)</sup>。

5. さらにモンタペルティ現象の存在を証明するために論じている私には、もう一つ忘れてはならない事柄がある。それはまさに中国で改革・開放政策への転換が行われつつあったこの時期に、日本では第二次世界大戦後のモンタペルティ現象が進行していたことである<sup>73)</sup>。この時期日本で発生したモンタペルティ現象は、主に二つの仕方で中国に好影響を与えたものと思われる。その一つは当時日本で進行していた、敗戦の結果生じた純粋な形のモンタペルティ現象に特有の軍事離れの影響である。第二次世界大戦に敗れた日本は、米国の占領下にあつてそれまでも軍国主義路線からの徹底的な転換を強いられた。当時在日中の大学院生レベルのアメリカ人の青年までが加わつて執筆したとされる新憲法の草案には戦争放棄が宣言され、軍隊を持たないことが明記されていたが、日本の国会はそうした規定をそのまま受け入れたために、原則としては軍隊が持てない国家が誕生した<sup>74)</sup>。その後自衛権に基づいて自衛隊を創設することで一応丸腰の状態は解消した<sup>75)</sup>ものの、現在も在日米軍によって力の空白を補填せざるを得ないというのが実情である。しかし周辺諸国にとっては、日本の軍事的弱体化は好ましい事態であつた。とりわけ戦前日本の軍事力に散々悩まされた中国にとって、日本軍の脅威から解放されたことの心理的恩恵は私たちの想像以上に大きい可能性がある<sup>76)</sup>。ただし近年の中国には米国は勿論、ロシアやインドのような強力なライバルが存在するために、そうした恩恵は限定的だと見なすべきであろう。

おそらくそれ以上に大きな影響をもたらしたのは、日本の経済的モデルとしての役割である。そこで見逃すことができないのは、1978年の秋、当時はまだナンバー2だった鄧小平が、政府代表団長として日本を訪問し、

## 現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

国交回復以来懸案になっていた日中平和友好条約の批准書を交わすとともに、新幹線やトヨタ自動車などの先進的技術や施設の視察を精力的に行っている、という事実<sup>77)</sup>である。今日の日本にとってはすでに遠い過去の栄光に過ぎないが、「四匹の虎」などにもはっきりと日本モデルの効果があらわれていて、1981年にマレーシアのマハティール首相が発表したルックイースト政策の名称が端的に示している<sup>78)</sup>通り、この当時の世界において日本は最も成功した経済的モデルだと見なされていた。まさにトップの座について国政を指揮し始める直前の時期に、当時のアジアにおける先進モデルの展示場のごとき日本を訪問したことは、経済改革の必要性およびそれがもたらす可能性に関する彼の信念を一層強化したはずである。中国以外にはソ連しか行ったことがなかった毛沢東と違って、若いころ数年間フランスで苦学し、モスクワにも若いころから何度も滞在した他、国連本部で演説するためにニューヨークをも訪れたこともあり、当時の中国人指導者の中では例外的に国際感覚が豊かだった鄧小平にとっても、おそらくこの時の訪日は、その短い期間では考えられないほど大きな影響をもたらしたに違いない<sup>79)</sup>。経済特区のみならず全国各地において、あっという間にそれらのモデルが採用された。さらに後発のために新しい技術や機械を選択できることや、人件費が抜群に安いという利点を活かして、中国の企業は優位に立ち続け、次第に先進諸国の企業を凌駕して、世界の工場の地位を確立したばかりでなく、膨大な人口の力で世界の市場とまで呼ばれ、すでに日本からGDP世界第2位の地位を奪い取るに至っている<sup>80)</sup>。これまでに何度か私が指摘しておいた通り<sup>81)</sup>、モンタペルティ現象は単独で終わらずに、類似の現象を誘発することがある。どうやら中国のモンタペルティ現象の場合も、第二次世界大戦後の日本に発生したモンタペルティ現象によって誘発されたものと見なすことが可能である。こうした見解の是非はともかく、西側世界、特にその内でもアジアの部分が、中国の方針転換を

好意的に受け入れたことは、誰からも是認いただけるはずである。

6. すでに私がいくつかの論文において指摘しておいたとおり<sup>82)</sup>、敗戦後の転換が人間の動きを解放し、その移動を容易にすることが、モンタペルティ現象を増幅させるための要件の一つである。前論文ではこの要件に関して、先進国における中国人留学生のシェアの大きさを示すに止めた<sup>83)</sup>が、本論文では中国の経済発展にとってより直接的に重大な意義を有していたと思われる、文化大革命の終焉後に生じた中国農民の動きを眺めることにしたい。すでに見た通り、鄧小平の時代が実権を握った後に真っ先に行った改革の最大のもは、何といても1980年代半ばまでに完了した人民公社の解体である。当時の全人口の7割以上を占めていた農民の大半を囲いこんでいた、まさに毛沢東主義の象徴のようなこの組織を解体したことは、毛沢東絶対主義からの転換を全国に宣言すると同時に、農民の行動にかぶせられていた目に見えない覆いを取り除く役目をも果たした、と言えるはずである。勿論農民のすべてが集団活動から一挙に解放されたわけではなく、一部の人々は郷鎮企業に横滑りして共同経営の成員に止まったのだが、やはり多くの人々は貸与された農地を自分たちの家族の責任で経営することになり、労働条件その他は自らの責任において決定することとなった。その結果農民の活動が一挙に多様化したことは言うまでもない。さらに人民公社の解体が完了したころには、1979年から始められていた経済特区の実験に、大連や上海などを含む沿海経済技術開発区の実験が加えられて<sup>84)</sup>、改革・開放政策はますます進展しており、縛りがゆるくなった農民の受け皿がタイミングよく増え続けていたのである。

ただし中国では1958年に初めて全国的に公布された『戸籍登録条例』によって、都市部の住民は「城鎮戸口」、農村部の住民は「農村戸口」と、別の戸口に登録されており、農村から都市への移住は著しく困難であった<sup>85)</sup>。実は中国の戸籍制度自体、都市住民の食糧確保等の目的のために、

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

農民の都市流入を制限するための手段として利用されていた<sup>86)</sup>という事情があった。だから1984年以前には、農民の都市への移動は原則禁止とし、農村の余剰労働力問題はできるだけ農村地域内で解決すべきだとされていた<sup>87)</sup>。しかし1984年になると、農村の「生産責任制」が定着した結果、生産性が向上して食糧難問題が解決されたために、農村の余剰労働力問題はますます緊急の課題となった。こうして農民の都市への移動は、改革・開放政策の成功と平行して許可され始め、その数は次第に増大した。深尾光洋編、『中国経済のマクロ分析』第六章の論文、李天国著、中国における就業と労働市場<sup>88)</sup>、の記述を要約する形で、その経緯を以下で簡単に紹介しておくことにしたい。農村の余剰労働力の受け皿としてまず着目されたのは、農村に近い集鎮（中小都市）で発達していた郷鎮企業であった。そうした企業の中には、優れた経営手腕によって発展しているものが少なくなかったため、中共中央は1984年1月1日付の「農村工作に関する通知」によって、農民の農村から集鎮への移動を解禁した<sup>89)</sup>。ただし農民は食糧を自弁するなどの条件付きで、社会保険などの保証を受けることなしに、試験的に移住が許されたのである<sup>90)</sup>。さらに同年10月の「通知」によって、一定の条件を充たすことで集鎮への「非農業人口」としての転籍が認められることになり、約450万人がこの種の戸籍を取得した<sup>91)</sup>。

しかしそれだけでは発展しつつある都市の工業やサービス業の労働力の需要には全く応えられないことが明らかなので、1985年1月1日、中共中央は「農村経済を活性化させる十項政策」を発表したが、ここでは集鎮ではなく都市という言葉が用いられ、初めて農民の都市への移動が認められた<sup>92)</sup>。さらに1986年7月に出された「規定」によって、国営企業が農村から従業員を募集することが初めて許可された<sup>93)</sup>。また1988年7月の「貧困地域労働力資源開発工作通知」によって、地域間と省間の移動を奨励して、大・中都市の労働部門に農村の労働力を吸収するよう呼びかけた<sup>94)</sup>。こう

して「民工潮」<sup>95)</sup>と呼ばれる出稼ぎ労働者の大量移動が発生し多くのトラブルが発生した<sup>96)</sup>上、1989年から91年まで不況が続いたために、この時期には移動を制御・禁止する「通知」が繰り返し出されたが、いずれもあまり功を奏さなかったらしい<sup>97)</sup>。そして1992年に鄧小平が「南巡講話」<sup>98)</sup>を発表したところから、国内の景気は回復して「民工潮」はさらに一段と拡大した。それに対し1993年11月の中共中央の会議の「決定」は、農村余剰労働力の農業以外の産業への移動を奨励・促進する方針を明確に打ち出した<sup>99)</sup>。その後李論文は、今日では是正されているが、出稼ぎ農民が不完全な管理体制のため、所持すべき身分証明書その他もろもろの経費を市当局等から雀り取られていた実情などを記している<sup>100)</sup>が、まさに農民が巨大な潮流となって都市になだれ込むに至った状況は、以上の中共当局が行った様々な決定や通知から推察できるはずである。李論文によると、2004年度の場合、1.2億人、または1.03億人と、資料によって差はあるものの、とにかく1億人以上の農民がこうして都市で働いているそうである<sup>101)</sup>。出稼ぎ労働者は3Kの仕事を押し付けられることが多い上に、都市戸籍を持つ従業員よりも労働時間は50%多いにもかかわらず、平均給料は60%にも達していないなど、二元構造に由来する差別構造は深刻であり<sup>102)</sup>、中国の格差問題の底辺におかれた存在であるため、このような労働者の数が多数に上ることは決して喜ぶべきことではないが、ともかくこれほど大きな人の流れが発生していた事実によっても、文化大革命の終焉からモンタペルティ現象が発生していたことが推察されるのである。

7. 文化大革命が戦争と同様に、多くの人を殺して取り返しのつかない損害をもたらしたことはすでに記したが、結果的に人々を鍛えたことは否定できない。前項で紹介した李論文と、毛里和子編、毛沢東時代の中国、第9章の論文、内田知行著、戸籍管理・配給制度からみた中国社会——建国——九八〇年代初頭<sup>103)</sup>、とを読み比べると、改革・開放政策によって生じ

## 現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

た人の移動の質的变化が窺えて興味深い。勿論農民以外の人の移動も頻繁に行われてはいたけれども、何と云っても転換後の中国における人の移動の主流は、先に見た通り発展しつつある都市への農民たちの流入であった。それに対して、内田論文が概観している建国から文化大革命までの中国国内の人の動きは、とてもそのようには単純化できない複雑なものであるが、ほぼ一貫して流入と排出の繰り返しであったらしい。1958年の戸籍制度の確立以後、大躍進政策に乗じた農民の都市流入の動きが生じたため、それを制止するための中共中央の「指示」や「緊急通知」による措置が講じられた<sup>104</sup>。毛沢東の政策が失敗して農村が都市人口の扶育が困難になると、口減らしのための都市の労働者の帰農政策や青年子女の下郷運動が断行された。以下内田論文を要約しながら、主な動きをたどってみる。1961年6月に中共中央は、様々な条件に基づく都市人口の削減を決定し、まず都市人口1300万人、都市部の職員・労働者950万人の削減を実施し、その後も何度か同様の削減を行った<sup>105</sup>。さらに青年層に関しても、都市青年の下郷運動が行われ、62～65年に都市知識青年その他を158万人下郷させた<sup>106</sup>。また盲目的な流入や還流を「規定草案」に基づいて徹底的に取り締まっている。ただし食糧危機は都市よりも農村の方が厳しかったので、飢餓線上の母子などが乞食をするために都市に流入することは一時的に許可されたそうである<sup>107</sup>。こうして都市への流入の取り締まりを厳しくしている最中に、文化大革命が発生した。文革が始まると下郷青年は隊伍を組んで農村を離れ交流の旅に出たが、多くの青年は住みにくい農村に帰る事を願わず、都市部に居座った<sup>108</sup>。そこで1967年7月9日付の『人民日報』の社説は知識青年の即時帰村を要求<sup>109</sup>し、さらに12月22日の『人民日報』は、「知識青年は農村へ入れ」という毛沢東の指示<sup>110</sup>を掲載して、下郷運動をさらに強化した。その結果内田論文には「文革期の66-76年の間に下郷運動によって農村に移動した人の総数は1700万人にのぼった。もっとも、同時期

に1300万人の農民が都市労働者に採用された』<sup>111)</sup>と記されている。後半の一文はそれまでの記述と整合性を欠いているような印象を受けるが、ともかくそういう事実があったということであろうか。

文革期にはもう一つ重要な移動があり、それは三線建設のための移動<sup>112)</sup>であった。これは国防・安全保障上の理由から行われた重工業の奥地建設、経済拠点の内陸部への移転に伴う人の移動であるため、下郷運動とは意味が異なるものの、進んだ地域から遅れた地域への移動である点で、ある程度共通していたようである。経済効率を無視して進められた建設事業は、後に撤収を余儀なくされたものもあったらしい<sup>113)</sup>。いずれにせよ、国際社会との関係が安定するとともに、緊急に推進する必要はなくなったと見なすことができる。広い土地に恵まれた黒龍江省への移動<sup>114)</sup>のように、農民が自発的に、政府の許可なしにおこなった移動も見られたとは言え、文化大革命が終焉するまでの中国人の移動の大半は、もっぱら当局の指示と強制に基づいたもので、そうした指示と強制は多くの場合、移動する人々の願望に逆らうものが多かった、と言わざるを得ない。しかし前論文でいくつかの事例を紹介した通り、下郷運動は年少の知識青年に書物の学問からは絶対に得られない生きる知恵を与えたことは確実である。『ワイルド・スワン』の著者が毛沢東の死去に際して咄嗟に政治的に正しい嘘泣きができた<sup>115)</sup>のも、それまでに辛酸を舐め尽くした成果であった。我が国の外交官や政治家や経済人がこういうしたたかな人々と対等に渡り合えるであろうか。

以上で見て来たとおり、文化大革命というイデオロギー闘争の終焉は、敗戦に酷似した影響を中国に与えた。だからイデオロギー闘争の終焉が、中国にモンタペルティ現象をもたらしたことは、当然の結果だったのである。ただし本物の敗戦の場合とは異なり、このモンタペルティ現象には、中国の好戦性や侵略欲を抑制する効果をあまり期待できないことは、明ら

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

かだと思われる。しかし現代中国のモンタペルティ現象は、すでに別の形で世界史に影響していた可能性が認められる。そのためには、以下の中ソ両国の輸入と輸出の伸びを比較した表を見ていただきたい。

年度	1975	1980	1985	1990
ソ連輸入	100	166.7	259.9	264.8
輸出	100	206.7	302.9	252.9
中国輸入	100	202.7	854.7	1743.6
輸出	100	189.7	565.7	2096.5 <sup>116)</sup>

これは先に引用したミッチェルの著書の数字によって作成した、1975年の数字を100として、中ソ両国の貿易の伸び率を比較した表だが、ソ連は15年間で輸入、輸出ともにようやく2.5倍前後の伸びを達成したのに対して、中国は輸入は約17倍、輸出は21倍とまさに桁外れの拡大を示しているのである<sup>117)</sup>。勿論当時の人々がこうした数字を把握していたわけではないが、文化大革命終焉後に改革・開放政策を採用した中国の経済が従来例のなかった活況を呈していることには、世界中が気付いていたはずである。特にアフガニスタン侵攻とチェルノブイリの原発事故などで重症に陥っていた<sup>118)</sup> ソ連の国民に対して、資本主義社会との和解という方針転換後に生じた中国経済の拡大は、自分たちの政府の政治・国際的立場の在り方に対する懐疑を掻き立てたはずである。中国で発生したモンタペルティ現象は、そうした意味で東側陣営を揺さぶるのに大いに効果があったのではないだろうか。だから中国で発生したモンタペルティ現象は、平和に関する配当は乏しい代わりに、マルクス・レーニン・スターリン主義の体制批判においては威力を発揮しており、東側諸国の多くに対して、政治的・経済的転向をうながすための影響力を発揮したと言えるのではないだろうか。

## まとめ

前論文において現代中国でもモンタベルティ現象が発生していることを推測した筆者は、他の国々との比較だけでそうした判断を下すことは余りにも安易であることに気付き、本論でその不備を補うことにした。そこでまず現代中国史をたどることによって、モンタベルティ現象が発生した経緯を明らかにしたいと考えた。さらに現代中国の場合、外国との戦争に敗北したわけではなく、単に国内の一イデオロギー闘争に過ぎない文化大革命が終焉しただけなのに、敗戦と同様の効果が発生したのは何故か、という理由をも明らかにしておくことが必要だと考えた。

そこで第一章では、まず国民党政府を台湾に追い込んだ後の中国共産党政府の動きを、希代の戦略家毛沢東の行動を中心に概観した。その後次第に重症と化したソ連との葛藤のために、国際的に孤立しつつあった中国で、「大躍進政策」の失敗によって国家主席の地位を劉少奇に譲り第二線に退いていたはずの毛沢東が、忠実な同志林彪を通して解放軍を掌握しつつ、江青らが率いる文革推進派の工作で大規模な学生・生徒の紛争を引き起こし、紅衛兵運動を通して中央の奪権に成功、さらに解放軍の力で全国的に奪権闘争を展開して、毛沢東絶対主義的政権の確立に成功するまでの経緯をたどった。ここまで肥大した絶対主義的権力は、ナンバー2の存在さえ許さず、林彪が自滅した後は容易に後継者がきまらなかった。そして毛沢東は死のしばらく前、辛うじて華国鋒を後継者に指名したが、官僚と軍人からなる行政組織と文革推進派という二つの勢力の均衡の上に立つ毛沢東絶対主義的体制は、他の何者かによって相続できるようなものではなかったことをも指摘した。

第二章では、まず毛沢東が死去した後、「四人組」逮捕で文革推進派が一掃され、一時期華国鋒が党・軍・政府の頂点に立ったが、結局鄧小平の

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

復位を認めざるを得ず、その後数年間で、鄧小平の仲間が主要な権力を掌握するまでの経緯を見た。鄧小平とその仲間はただ単に主要な権力を奪取しただけではなく、毛沢東の方針を転換して改革・開放政策を提起するとともに、毛沢東の最大の遺産であり、当時の人口の7割以上が関係していた人民公社を解体し、また残りの多数が関係している国有企業にもメスを入れ、さらに経済特区などを通して大幅に資本主義的手法を取り入れて、生産性を高めた。そうした改革の成果は著しく、中国経済は多少の浮沈はあったものの、その後ほぼ一貫して拡大を続け、すでにGDPは日本を追い抜いて世界第二位に達し、今や世界の工場から世界の市場に変わろうとしている。文化大革命が生み出した毛沢東絶対主義的体制からの転換は、そのこと自体特異なイデオロギー国家の死滅と見なし得るので、まさに敗戦そのものと見なすことが可能であり、その結果モンタペルティ現象が発生したと解釈することは決して誤りではないものと思われる。

しかし真の敗戦とイデオロギー闘争の敗北との違いにこだわる立場が有り得るので、第三章は、現代中国におけるイデオロギー闘争の終焉が、なぜ真の敗戦と同様の効果を生み出したのか、という理由を考察する。その理由は以下の通り、複数存在している。第一の理由は、文化大革命が極めて戦争に似ていたことである。イデオロギー闘争とはいうものの、それは毛沢東の望み通り、発端近くから学生や紅衛兵の血生臭い暴力に彩られ、当時中国が関係したいかなる本物の戦争と比較しても、桁違いに多い犠牲者を出している。しかも大規模な内戦が発生したことや、至るところに内戦の可能性が認められたために、事態の収拾のために軍人に依存する機会が増え、その結果として一時期はほとんどの権力機構に軍人が加わり、とりわけ地方の各種委員会の成員の圧倒的多数を軍人が占めるという状況が発生した。したがって文化大革命の終焉は、そうした状況に終止符を打つことによって、まさに終戦と同様の効果を発揮したのである。第二の理

由は、文化大革命が中国人に対して、マルクス主義・共産主義的抑圧を強化すると同時に、専門家と知識人とを憎悪する毛沢東の個人的価値判断に基づく知的・文化的抑圧をも加えていたために、鄧小平が推進した毛沢東絶対主義的体制からの転換は、それら二種類の抑圧からの中国人の解放を意味し、まさに敗戦による軍国主義的戦時体制からの解放に勝るとも劣らぬ効果を発揮したことである。第三の理由は、林彪との関係が悪化していた毛沢東が、ソ連の脅威を緩和するとともに、自らの権力が林彪や文革推進派から独立した絶対的なものであることを誇示するため、従来の自らの外交方針との矛盾を無視して、キッシンジャー・周恩來らの用意した米国や日本との関係改善に着手し、将来の中国の国際化を準備しておいたことである。第四の理由は、鄧小平が推進した毛沢東絶対主義的体制からの転換とその後推進した改革・開放路線を、当時の国際社会すなわち日米両国や当時躍進中であったアジアの国々が好意的に受け入れ、その時期には多少ずれがあったが、ほぼ全面的に協力したことである。元来東南アジア諸国で強力な影響力を有していた華僑の協力も、当然中国の経済発展を加速させた。第五の理由として、この時日本では、第二次世界大戦の敗戦後に発生したモンタベルティ戦争が進行中であったことも重要である。敗戦後の日本における産業の復興ぶりは、アジアの国々に対してモデルとして機能したが、当時経済発展の最中であつた日本は、方針転換後の中国に対してもモデルとしての役目を果たすとともに、自らも進んで中国の経済発展のために協力したのである。第六の理由は、鄧小平による転換が、多数の中国人、とりわけ人民公社と戸籍制度によって束縛されていた莫大な数の農民の移動を可能にして、その行動半径を拡大させた結果、改革・開放政策の成果を一段と増幅させたことである。さらに第七の理由として、文化大革命時代に毛沢東や文革推進派によって課せられた多くの試練、たとえば毛沢東が紅衛兵に強制した下放などが、戦争と同様当時の中国人を鍛

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

え、今日の中国人の活躍の基礎を準備したことが考えられる。以上のさまざまな理由によって、文化大革命というイデオロギー闘争の終焉は、一国の敗戦と酷似した状況を現代中国にもたらしており、その結果おそらく世界史上最大規模のモンタペルティ現象が発生し、現在も進行中なのである。

## 注

はじめに

- 1) 拙稿、冷戦後世界のモンタペルティ現象、『国際文化論集』第43号、大阪（桃山学院 大学総合研究所）2010、143-229ページ。
- 2) G・ジョン・アイケンベリー著、鈴木康雄訳、アフター・ヴィクトリー 戦後構築の論理と行動、東京（NTT 出版）2004、第七章 冷戦が終わって。
- 3) 塩川伸明著、『20世紀史』を考える、東京（勁草書房）2004、第II篇、5 社会主義——その栄光と悲惨、の注(11)に、旧ユーゴスラヴィアや旧ソ連で発生した流血の紛争は民族紛争であり、「体制転換それ自体が大規模な衝突と流血を伴ったのは、ルーマニアだけといってよい」と記されているが、そのルーマニアも、外国の侵略を受けたわけではなく、現在も立派に存続していて、EU に加盟している。
- 4) 注1)の146-147ページ。

## 第一章

- 1) 私のモンタペルティ現象に関する一連の考察は、敗戦がもたらす結果を客観的に評価し直す試みであるが、蒋介石と国民党の運命などを見ると、勝利がもたらす結果についても客観的に評価し直す必要があるのではないかと、という感想が生じる。実は敗戦および勝利の結果の客観化と相対化は、歴史家に求められている重大な任務の一つではないだろうか。
- 2) このあたりの記述は、天見慧著、巨龍の胎動 毛沢東 VS 鄧小平、東京（講談社）2004、第二章 エリート革命から人民戦争へ（87-95ページ）、に収められた、毛沢東の逆転戦略、特に「三大戦役の勝利」の部分の記述に負っている。兵力の数字は93ページ。
- 3) 天見著、前掲書、40-41ページ。

- 4) 同上, 209ページその他。
- 5) ベンジャミン・ヤン著, 加藤千洋・優子訳, 鄧小平政治的伝記, 東京(朝日新聞社)1999, 129ページ。
- 6) ユン・チアンおよびジョン・ハリデイ共著, マオ 誰も知らなかった毛沢東, 東京(講談社)2005。
- 7) 晩年の文化大革命時代に, 彼の言行の矛盾は数多く露呈している。当時の中国人としては学生時代が比較的長かったが, その教養は元来人文科学, 特に歴史や古典文学に偏っていて, 社会科学は比較的弱かったのではないだろうか。勿論後に政治に関わってからは, 社会科学を究めないわけにはいかず, 当然猛烈に勉強している。そしてしばしば彼の著述の中国的独自性が強調されるようになる。ただし基本的には, 陳伯達その他を通して学んだスターリン時代のソ連の社会科学の影響を強く受けていたと見るべきではないだろうか。また自然科学の素養が欠落していたため, 一時期その方面の書物を読み耽ったとはされているが, 基本的知識を欠いていたため, 「大躍進政策」時代には科学的根拠の乏しい様ざまな提案に飛び付いて国家に損害を与えたい。最大の問題点は自らの教養の欠落を恥じるどころかむしろ誇りにしていたことで, 大飢饉や文化財の破壊を引き起こしただけではなく, 専門的知識に対する軽蔑を国民の間に広めたことである。
- 8) そうした存在の一例として, ミケランジェロが考えられる。
- 9) フィリップ・ショート著, 山形浩生・守岡桜訳, 毛沢東 ある生涯, 東京(白水社)2010, 上, 264ページ。
- 10) 同上, 328-352ページ。
- 11) 同上, 275ページ。
- 12) 同上, 249ページあたりから毛沢東が中国共産党の指導者として活躍し始める。当時の中国人の圧倒的多数を占めていた貧農層の支持を得て, 後に国民党を駆逐する要因となったのは, 土地革命を前面に打ち出したことだとされているが, その方針を提起したのは毛沢東自身であった, とされている(252ページ)。
- 13) 同上。274ページ
- 14) 下斗米伸夫著, アジア冷戦史, 東京(中央公論社)2004, 81ページ以下。ショート著, 前掲書, 97ページ以下。100ページに「大半は毛の意見に反対

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

だった」とある。

- 15) 下斗米著、前掲書、48ページ以下。
- 16) 同上、82-83ページ。
- 17) 天児著、前掲書、111-112ページ。
- 18) 中国共産党に夢を託して裏切られた党派や集団については、諸星清佳著、中国革命の夢が潰えた時 毛沢東に裏切られた人々、東京（中央公論社）2000参照。毛沢東はこれらの人々を騙しただけでなく、反右派闘争の標的として弾圧した。
- 19) まさにこの時期、冷戦がたけなわとなり、東欧諸国でも一党独裁体制が強化され、ソ連自体も収容所群島と化していた。
- 20) 天児著、前掲書、112ページ以下、「ソ連型社会主義の建設」の節。
- 21) 同上、113ページ。劉少奇も周恩来も消極的な意見であったらしい。
- 22) 同上、121ページにこの数字が出て来る。
- 23) ショート著、前掲書、上、11ページ以下の「プロローグ」で記されている、1935年1月の遵義会議で、毛沢東が解放軍の指導者の地位を奪った相手はモスクワ留学生あがりで、コミンテルンの支持を得ていた博古である。さらに同書、下、17ページ以下によると、(かつて上海で共産党の指導者だった)王明は、1937年にモスクワから延安に送りこまれ、毛沢東と軍の指導権を争った。彼は一時期スターリンの代理人と見なされていたらしい。同書、下、414ページ以下によると、ドイツ等のファシズムの台頭に脅威を感じたスターリンが、1935年コミンテルン大会で人民戦線路線を打ち出し、国共合作による抗日戦線を構築した様子が記されるが、解放軍がまだ弱体であるため、スターリンの期待はもっぱら蒋介石に寄せられていて、日本敗戦までそれは続いた。
- 24) ジョナサン・スペンス著、小泉朝子訳、毛沢東、東京（岩波書店）2002、122ページ以下に、解放軍がいかにソ連軍の満州進攻を利用したかが具体的に記されている。特に123ページには、ライフル74万丁、航空機800機、大砲4000基など、国民党軍が大陸で降伏した日本軍から奪った武器に匹敵するほど大量の武器を、ソ連が中国共産党の解放軍に提供した、と記されている。
- 25) 注20)でも示した通り、1960年まではソ連型社会主義を目標としていた。
- 26) この時期の状況については、ショート著、前掲書、下、125-126ページ。

- スペンス著、前掲書、149-150ページ。後者には、「彼の非難の矛先は自分にも向いている、と毛沢東の目にはうつった」と記されている。
- 27) 天児著、前掲書、123-124ページ。
- 28) 同上。
- 29) 丸山昇著、文化大革命に到る道 思想政策と知識人群像、東京（岩波書店）2001、85ページ以下の6 胡風批判と「胡風意見書」——「異端文学者集団」の足跡——、121ページ以下の7 胡風事件と毛沢東——「小集団」から「反革命集団」へ——、173ページ以下の8 丁玲批判——不条理と抵抗——、などを参照。
- 30) 同上、271ページ以下の10「百花斉放・百花争鳴」——夭折した可能性——の章所収、309ページ以下の、当初は育児制限を支持、の節。
- 31) 同上、322ページ以下の、主席の呼びかけに感激——蕭乾と傅雷、の節中の、323-327ページ。
- 32) 天児著、前掲書、125-126ページ。
- 33) 2つの引用は、李志綏著、アン・サーストン協力、新庄哲夫訳、毛沢東の私生活、東京（文藝春秋）1996、上、303-304ページおよび303ページ。
- 34) 毛沢東の侍医の記録に関しては、批判的な著書が出ているので一応目を通した。あるいは侍医の記録にも嘘や誤りが含まれているのかもしれないが、少なくともそこに描かれた毛沢東には文化大革命を引き起こす可能性が認められる。批判の書で弁護され賛美されている善良な毛沢東では、文化大革命を引き起こす可能性は感じられないようである。勿論それだけの理由で、批判の書の資料的価値を否定するつもりはないが。
- 35) 伊東孝之著、ポーランド現代史、東京（山川出版社）1988、227ページ以下。ショート著、前掲書、下、127ページ。
- 36) 矢田俊隆著、ハンガリー・チェコスロヴァキア現代史、東京（山川出版社）1978、231ページ以下。ショート、前掲書、127-8 ページ。
- 37) 丸山著、前掲書、9 スターリン批判と中国——ポーランド・ハンガリー事件の衝撃——、の章の248ページ以下、ポーランドへのソ連の武力行使に反対、の節。
- 38) 同上、253ページ以下、ハンガリー事件ではソ連を支持、の節、特に257ページ。

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

- 39) 平凡社、『世界大百科事典』, 第23巻, 208ページの「ハンガリー事件」の項。
- 40) 同上, 第11巻, 398ページの「サルトル」の項。
- 41) 同上。
- 42) ボル・ポトの虐殺そのものに関しては, 山田寛著, ボル・ポト<革命>史, 東京(講談社)2004, 第三章 ボル・ポト政権, 第四章 革命の正体, 63-160ページ, が分かり易く論じている。訳者のあとがきで, ボル・ポトの擁護ではないかと物議をかもしたとされる, フィリップ・ショート著, 山形浩生訳, ボル・ポト ある悪夢の歴史, 東京(白水社)2008, では, 第八章 黒服の男たち, 第九章 未来完了, 第十章 世界のお手本, 第十一章 スターリンの病原菌, の各章, 393-608ページ, で彼らの非情冷酷で無責任な統治ぶりが具体的に紹介されている。その第九章の455ページ以下で, 秘密裏に北京を訪れたボル・ポトが, 1975年6月21日に毛沢東と面会した様子が記されている。
- 43) 李著, 前掲書, 上, 355ページ以下。長年学生生活を送ることができた毛沢東自身, 出身に関しては明らかに富農だから, 右派分子に属していたことになる。
- 44) 厳家祺・高阜共著, 文化大革命十年史, 東京(岩波書店)2002, 上, 所収の「文化大革命関係年表」18ページによると, 1978年4月5日に中共中央が, 「すべての右派分子のレッテルをはがす請訓に関する報告」を批准したとある。9月7日にその決定に関する実施法案が公布された。なお厳・高共著, 前掲書の上巻の付録として付けられた, 安藤正士・辻康吾作成による, 「文化大革命関係年表」は, 必ずしも本文とは直接関係のない事項をも丹念に収集した良心的で便利な年表である。
- 45) 毛沢東は劉少奇と異なり, 最後まで鄧小平を完全には敵視していなかったようである。その判断の根拠の一つとなったのは, この時の闘争ぶりではないだろうか。
- 46) 李著, 前掲書, 上, 338ページ以下, 24 クレムリンの毛沢東, の章。
- 47) 『世界大百科事典』, 第28巻, 305ページの「モロトフ」の項参照。長くソ連の外交部門を指揮したため, 左翼団体が愛用した火炎瓶は「モロトフのカクテル」と呼ばれた。さらに同上, 第5巻, 76ページの「カガノビチ」の項。

- 48) 天児著, 前掲書, 132ページ。
- 49) 『世界大百科事典』, 第15巻, 125ページ, 「スプートニク」の項。
- 50) 天児著, 前掲書, 133ページ。
- 51) 同上, 134ページ以下。
- 52) 毛沢東が家庭的に恵まれていなかったことは, ショート著, 前掲書, 上, 361ページの家族のリストや, 李著, 前掲書, 上, 223ページ以下の, 「13 傷つく江青夫人」の章などから推測できる。この事実は毛沢東の私的所有に対する反感を強めたはずだし, 彼よりも家庭的に恵まれていた劉少奇や林彪への容赦なき追及にも影響しているはずだ。
- 53) 高岡による東北独立の動きは, 一種の逃亡計画に過ぎないし, 軍人の息子が杜撰な暗殺事件を企てたとされる林彪以外の人々は, ほとんど無抵抗で攻撃にさらされ, その林彪も逃亡に失敗して事故死している。
- 54) 地球儀の大きな部分が赤く染められたばかりなので, この前後はマルクス・レーニン主義が唱える歴史の必然性なるものが, 世界的に最も影響力を發揮した時代であった。
- 55) スペンス著, 前掲書, 110ページ以下。スペンスはロシア語が自在にあやつれ, イデオロギー方面に強い陳伯達を秘書に採用したメリットを大いに重視している。陳伯達は後に林彪に接近して失脚するが, それ以前には文化大革命の要所で鋭い活動ぶりを示しており, その有能さは疑う余地がない。それだけに彼が林彪に同調した時に, 毛沢東が過敏に反応したという印象が否定し得ない。
- 56) 天児著, 前掲書, 137ページ以下。数字は『世界大百科事典』の第14巻471ページによる。
- 57) 天児著, 前掲書, 138-141ページ, ショート著, 前掲書, 下, 167ページ, こうした女性の立場からの肯定的なコメントは, 1971年に中国を訪問した, クローディ・ブロイエル著, 天木・武井訳, 天の半分, 東京(新泉社)1976, 96-97ページの共同食堂に関するものである。これはフランス人女性の旅行記で, タイトルは毛沢東の「女性が天の半分を担っている」という有名な言葉に基づいている。
- 58) 天児著, 前掲書, 135ページ以下。
- 59) 同上。数字は135ページ。

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

- 60) ショート著, 前掲書, 下, 158-159ページ。
- 61) 同上, 170-171ページ。これらの事実を記した章に, ショートは「魔法使いの弟子」というタイトルを付けている。
- 62) 天児著, 前掲書, 150-151ページ。
- 63) 同上, 147ページ。
- 64) 同上, 148ページ以下。
- 65) スペンス著, 前掲書, 170-171ページ。
- 66) ショート著, 前掲書, 210ページ。李著, 前掲書, 上, 485ページ。相変わらず党主席だったため, 後者に記された毛沢東の私生活には, その後も大きな変化は見られない。
- 67) 李著, 前掲書, 下, 108ページ。なおこれに触れた章のタイトルは, 「50第二線の深慮遠謀」とあり, 1962年1月の, 毛沢東がついに自己批判を行ったいわゆる7000人大会について記述している。
- 68) 天児著, 前掲書, 149ページ。ショート著, 前掲書, 下, 183ページ。
- 69) 同上。
- 70) スペンス著, 前掲書, 211ページの注に, 毛沢東が1927年に書いたこのことばの出典が記されている。初出はまだ政権からほど遠い時期の文章だったらしい。
- 71) 1958年の会談は, プールのそばで行われ, 水泳の苦手なフルシチョフが泳がされたことでよく知られている。李著, 前掲書, 上, 431ページ, ではフルシチョフが毛沢東のすすめに応じて, 救命具を持ったままプールに飛び込んだ, とある。
- 72) 下斗米, 前掲書, 100ページ以下。
- 73) 同上, 114ページ。
- 74) 天児著, 前掲書, 155ページ以下。
- 75) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 3ページ。
- 76) 笠井孝之著, 毛沢東と林彪 文革の謎林彪事件に迫る, 東京(日中出版)2002。
- 77) 巖・高共著, 前掲書, 中, は「第二篇 毛沢東と林彪」というタイトルで, 主に二人の関係を論じている。
- 78) 本論の「はじめに」の注2)参照。

- 79) ロデリック・マクファーカーおよびマイケル・シェーンハルス共著，朝倉和子訳，毛沢東 最後の革命，東京（青灯社）2010，上，38ページ以下。
- 80) 巖・高共著，前掲書，上，24ページ以下。
- 81) マ・シ共著，前掲書，上，74-84ページ，「負け組」および「勝ち組」の節。特に79ページ以下の「勝者中の勝者」とされている，「中央文化革命小組」の人々。
- 82) 巖・高共著，前掲書，上，43ページ以下。北京大学の盛況ぶりは47ページ。
- 83) 同上，「工作組」は上，48ページ以下。「6・18事件」は上，54-56ページ。
- 84) 同上，上，57ページ以下。
- 85) 同上，上，59-66ページ。
- 86) 同上，上，73ページ以下。
- 87) 同上，上，67-72ページ。
- 88) スpens著，前掲書，201ページによると，毛沢東は晩年，ルー・ゲーリック病，すなわち筋萎縮性側索硬化症におかされていた。ショート著，前掲書，下，328ページによると，その他に褥瘡，肺感染症，心疾患，酸素欠乏症が加わる。主治医だった李志綏が挙げた性病は，歴史家には認められていないらしい。なお心臓発作で死去した。
- 89) 本章の注44)参照。
- 90) 中嶋嶺雄著，北京烈烈 上 激動する中国，および，同，北京烈烈 下 転換する中国，東京（筑摩書房）1981。
- 91) 第二篇が最も短く，第三篇が最も長い。第三篇は毛沢東のナンバー2が決まらないため，一応江青の名を挙げながらも，ナンバー2候補は，江青，鄧小平，王洪文，華国鋒らの間を漂流している感が強い。
- 92) たしかに文化大革命をこのように解釈すると，一見矛盾した動きが説明できる。
- 93) 四川省の農民の諺に基づいて，鄧小平は白猫ではなく，黄色の猫といったそうであるが，生産性を高めることを重視する彼の立場を端的に表している。
- 94) むしろ西欧の絶対主義王朝の場合以上に，文化大革命時代の毛沢東の権力にあてはまるのではないだろうか。
- 95) マ・シ共著，前掲書，上，11 老将たちの最後のふんばり，264-284ページ。
- 96) 同上，9 上海「一月暴風」，227-245ページ。

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

- 97) 同上, 12 武漢事件, 中の, 百万雄師, 289-298ページ, の節。
- 98) 同上, 300ページ。
- 99) 同上, 13 五・一六陰謀, 312-336ページ。
- 100) 同上, イギリス代表部焼き討ち事件, 316-324ページ, の節。
- 101) 本章注99)。特に, 王力, 失脚, 324-325ページ, の節など。
- 102) 同上, 13章全体がその論調で書かれているが, 特に329ページには, 「だが『五・一六陰謀』のとりわけ『陰険な』性質を何より物語るのは, その中心人物とされた人々すらもが陰謀の存在自体を知らなかったことだ」と指摘されている。
- 103) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 9ページ。
- 104) 同上, 10ページ。
- 105) 同上, 12ページ。本章, 注76)の著書が, その謎をくわしく論じている。
- 106) マ・シ共著, 前掲書, 下, 19 林彪の逃亡と死, 中の, 国家主席問題, 122-127ページ, の節。
- 107) 同上, 廬山の対決, 127-133ページ, および, 石を投げ…, 133-134ページ, の節。
- 108) ショート著, 前掲書, 下, 278ページに, 文化大革命の結果として, 1968年後半には, いかに軍人が国内で大きな勢力を占めていたかが記されている。さらに本章注106)の章中の138ページに, 林彪の死去の結果として「とりあえず毛は軍事クーデターの恐れをとり除き, ボナパルティズムの亡霊を鎮めて, 安心することができた」とある。
- 109) この計画とその破綻について, 巖・高共著, 前掲書, の中巻は, 8, 9, 10の3章, 212-262ページ, を割いて詳しく叙述しているが, 信憑性には疑問の余地がある。マ・シ共著, 前掲書, 下, は, 林彪のクーデター未遂?, 134-138ページ, とクエスチョン・マーク付きの節で扱っている通り, 計画自体はなほだ曖昧なものであり, 林彪自身の役割もはっきりしない。
- 110) マ・シ共著, 前掲書, 下, 20 毛沢東, 静まりかえる, 145-172ページ, の章, 特に中堅幹部の復権, 150-151ページ, の節など。
- 111) 天児著, 前掲書, 204ページ。
- 112) 同上, 215ページ以下。
- 113) 同上, 218-219ページ。

- 114) 同上, 221ページ以下。
- 115) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 13ページ。
- 116) 同上, 13-14ページ。マ・シ共著, 前掲書, 下, 184ページ以下。
- 117) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 16ページ。
- 118) マ・シ共著, 前掲書, 下, 211ページ以下, 「解放軍を『整頓』する」の節。
- 119) たとえば巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 14-15ページに毛沢東の王洪文ら四人組への叱責や批判が繰り返し記されている。
- 120) 天児著, 前掲書, 232-234ページ。マ・シ共著, 前掲書, 下, 24 1976年の天安門事件, 244-267ページ。
- 121) 天児著, 前掲書, 232-234ページ。
- 122) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 16-17ページ。
- 123) 同上, 17ページ。
- 124) 権力が余りにも強大になると, 自己保存力が発生して, 自らを傷付ける可能性がある存在をすべて排除し始めるのではないだろうか。毛沢東という存在は, 左翼の一革命家としてと同時に, 巨大な独裁権力としても研究されるべきではないか。

## 第二章

- 1) マ・シ共著, 前掲書, 下, 244ページ。
- 2) 同上, 281ページ以下。
- 3) たとえば, 同上, 266-267ページに記された, 汪東興が鄧小平夫妻を保護した行為などは, 毛沢東の先が短いからこそ行われたこととしか考えられない。
- 4) 前章の注, 119)および, マ・シ共著, 前掲書, 下, 22 鄧小平, 登板, および 23「四人組」登場, の章, 200-243ページ。
- 5) キッシンジャーとの交渉などで世界的な注目を浴びている周恩来の存在は, 毛沢東絶対主義にとって, 決して好ましいものではなかった。毛沢東の意向を忖度して四人組はしきりに批林批孔運動で攻撃したが, その総合的な政治力には太刀打ちできなかつたらしい。
- 6) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 16ページ。
- 7) 同上, 17ページ。

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

- 8) マ・シ共著, 前掲書, 下, 25 毛沢東 最後の日々, 所収, 「四人組」逮捕, 284-291ページ, の節。
- 9) 中嶋著, 前掲書, 下, カギを握った汪東興, 169-172ページ, の節。
- 10) マ・シ共著, 前掲書, 下, 284-289ページ。
- 11) 同上, 287ページ。
- 12) 同上, 288-289。
- 13) 同上, 284ページ。
- 14) 巖・高共著, 前掲書, 下, 366ページ以下の, 「既定方針通りにやれ」の節。
- 15) 中嶋, 前掲書, 下, 5 華国鋒の戦い, 173ページ以下, の章。その経歴は, 華国鋒の奪権, 173-177ページ, の節。
- 16) マ・シ共著, 前掲書, 下, 289ページ。
- 17) 同上, 291ページ。
- 18) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 17ページ。天児著, 前掲書, 華国鋒による権力独占, 236-238ページ, の項。
- 19) マ・シ共著, 前掲書, 下, 289-291ページ。
- 20) 巖・高共著, 前掲書, 下, 第三篇, 第10章「四人組」の滅亡, 中の, 残党始末, 376-383ページ。パリ・コムニオンについては, 381ページ。
- 21) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 17ページの1976年4.30の項に記された, 華国鋒の情況報告に対する, 華国鋒の3つの指示の一つ。
- 22) 同上, 17-18ページ。肖像については, 中嶋著, 前掲書, 下, 212ページその他。
- 23) 巖・高共著, 前掲書, 下, 391ページ。
- 24) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 18ページ。
- 25) 同上。天児著, 前掲書, 238-239ページ。
- 26) 本章の注21)の残り2つの指示。
- 27) 天児著, 前掲書, 238ページ。
- 28) 同上, 239ページ。
- 29) 同上, 239-240ページ。
- 30) 同上, 240ページ。
- 31) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 18ページ,

- 1977.8.11。
- 32) 天児著, 前掲書, 245ページ。
  - 33) 同上, 246ページ。
  - 34) 同上, 245-246ページ。
  - 35) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 20ページ。
  - 36) 同上。
  - 37) 天児著, 前掲書, 250ページ。鄧小平は華国鋒を党副主席のポストに止めた。
  - 38) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 19-20ページ。
  - 39) 同上, 19ページ, 1979.3.16, 鄧小平, 毛沢東を弁護。19-20ページ, 3.29, 魏京生逮捕。
  - 40) 天児著, 前掲書, 第七章 改革開放・近代化への邁進, 中の, 第二次天安門事件, 282-292ページ, の節。
  - 41) 中国政府は, 劉曉波の2010年度のノーベル平和賞受賞を妨害した。
  - 42) 王曙光著, 現代中国の経済, 現代中国叢書 3, 東京(明石書店) 2004, 29ページ。
  - 43) 同上, 30ページ。
  - 44) 天児著, 前掲書, 263ページ。
  - 45) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 18ページに記された, 1978年6月に鄧小平が行った「实事求是」に基づく「二つのすべて」論批判や, 同, 19ページに記された, 1978年12月18日の階級闘争から現代化実現への路線転換決議など。
  - 46) 天児著, 前掲書, 263-264ページ。
  - 47) 同上, 264ページ。
  - 48) 王著, 前掲書, 31ページ。
  - 49) 天児著, 前掲書, 264ページ。
  - 50) 同上, 「万元戸」の出現, 264-266ページ, の項。
  - 51) 川島博之著, 農民国家 中国の限界 システム分析で読み解く未来, 東京(東洋経済新報社) 2010, 153ページのグラフによる。中国の人口は資料が欠落しているらしい。
  - 52) 郷鎮とは地方自治体のことだが, 郷鎮企業とはそうした地方に存在する民

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

間の中小企業という意味で、公営企業というわけではない。

- 53) 請負制はまだ大きく共産主義的制度に依存していたため、完全に資本主義的な制度とは認め難いが、独立採算制を採用して独自に利潤を追及している点や、完全な自立が求められている点で、一応資本主義的な制度と見なし得る。
- 54) 深尾光洋編、中国経済のマクロ分析 高成長は持続可能か、東京（日本経済新聞社）2006、第6章、の論文、李天国著、中国における就業と労働市場、2. 労働市場の消失と復活の回顧、2 戸籍制度の成立と改革、190-195ページ。
- 55) 同上、4. 農村労働力の移動政策の変遷と就業状況、202-211ページ、の節で、それ以後その人的資源を利用するために、いかなる改革が行われたかが概観されている。
- 56) 南亮進・牧野文夫編、中国経済入門 [第二版] 世界の工場から世界の市場へ、東京（日本評論社）2001、第1部 総論、第1章の論文、牧野文夫著、世界の工場か、世界の市場か？ 中国経済の軌跡と展望、II 改革開放の成長と始動、13ページ。
- 57) 陳挂棣・春桃共著、納村公子・梶田雅美共訳、中国農民調査、東京（文芸春秋）2005、126ページに、1984年の12期3中全会で都市改革の決定がなされ、改革の重心が農村から都市に移った、とされている。同じページで、ほんの一部が豊かになっただけの農民に様々な負担が押し付けられたことが指摘されている。
- 58) 上原一慶編著、躍動する中国と回復するロシア、京都（高菅出版）2005、第2章の論文、余勝祥著、中国における企業システムの転換、33ページ。
- 59) 同上、国有企業の改革については、29-32ページ、数字は27ページの表による。
- 60) 日本で「親方日の丸」と称したのと同様の、食いはぐれることがない勤務先のこと。
- 61) 以上の数字はすべて、本章の注59)の表によるものである。
- 62) 王著、前掲書、39ページ。
- 63) B. R. Mitchell, *INTERNATIONAL HISTORICAL STATISTICS AFRICA, ASIA & OCEANIA, 1750-2000*, Fourth Edition, New York (Palgrave Macmillan) 2003.

- 64) Idem, p. 544.
- 65) Idem.
- 66) この表は、田暁利著、現代中国の経済発展と社会変動 「《禁欲》的統制政策」から「《利益》誘導政策」への転換 1949～2003, 東京（明石書店）2005, 285ページの図8-1 国民1人当たり消費推移状況, に記入された数字を基にした。原典は『中国統計概要』2000年版。
- 67) 京都産業大学 ORC 中国経済プロジェクト編 中国経済の市場化・グローバル化, 京都（晃洋書房）2006, 第一章 中国の経済改革の回顧と展望（分担執筆 無畏）, 1-13ページ。
- 68) 王著, 前掲書, 9-11ページ。
- 69) その一人、『ワイルド・スワン』の作者ユン・チアンの父親は、労働キャンプに収容されていた。彼は毛沢東を名指しで批判したために迫害されていたそうである。

### 第三章

- 1) スペンス著, 前掲書, 211ページの注参照。
- 2) 巖・高共著, 前掲書, 中, 所収の第二篇, 第二章および第四章で林彪と羅瑞卿, 第四章で林彪と賀竜との権力闘争が記されている。
- 3) 巖・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 5ページの1966年, 5月16日の項に, 中共中央, 「通知」（「五・一六通知」）を党内に通達, 「二月提綱」を取り消し, 文化革命五人小組を廃止し, 中央文化革命小組（中央文革小組）の設置決定, とある。
- 4) 国分良成編著, 中国文化大革命再論, 東京（慶応義塾大学出版会）2003, 第二章, 43-67ページの論文, 楊炳章著, 望月暢子訳, 北京大学における文化大革命の勃発, はそのタイトル通り, 北京大学の状況をリアルタイムに観察し, 毛沢東自身に勧告して二度も入獄していた人物の証言である。たとえば聶元梓らのグループによって発表された最初の『大字報』は, 康生夫人曹軼欧らの調査小組が北京大学に派遣されて聶と接触した後に発表されたもので, その真の起草者も明らかではないとされている。
- 5) 本章, 注2)の「年表」, 5ページ, 1966年5月18日の項に, 歴史学者・鄧拓, 迫害を受けて死亡, 54歳, とあるが, 鄧拓は将来を悲観して自殺した。

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

- 6) 嚴・高共著, 前掲書, 上, 54ページ。マ・シ共著, 前掲書, 上, 117-119ページ。
- 7) マ・シ共著, 前掲書, 上, 163ページ以下。嚴・高共著, 前掲書, 上, 85ページ以下。
- 8) その狂乱ぶりは, 嚴・高共著, 前掲書, 上, 第一篇, 第四章, 「旧世界への宣戦布告」, 90ページ以下, に描かれている。あるいは, マ・シ共著, 前掲書, 上, 6 紅衛兵, 7 赤色テロ, 8 混乱全国に広がる, の各章, 156-220ページと221-226ページの写真など。
- 9) 文化大革命を通して顕著に感じられるのは, 毛沢東の気持を一瞬でも早く付度して, 実行しようとする態度である。明文化されてもいない行為を逸早く実行しようとするため, 付度主義は活動を促進しエスカレートさせる。
- 10) 本章, 注8)参照。
- 11) 老舎については嚴・高共著, 前掲書, 上, 98-99ページ, 傅雷夫妻については121ページおよび, 丸山著, 前掲書, 324-327ページ。
- 12) 嚴・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 9-10ページ。
- 13) 同上, 7ページ。
- 14) マ・シ共著, 前掲書, 上, 9 上海「一月風暴」, 227-245ページ。
- 15) 同上, 12 武漢事件, 285-311ページ, 毛沢東の飛行機による退去は, 300ページ。
- 16) 嚴・高共著, 前掲書, 上, 所収の「年表」, 8ページ。
- 17) マ・シ共著, 前掲書, 上, 10 奪権, 246-263ページ。潘復生については, 247ページ。
- 18) 同上, 248ページ。
- 19) 嚴・高共著, 前掲書, 上, 所収の「文化大革命関係年表」, 8ページ。
- 20) マ・シ共著, 前掲書, 上, 253ページ。
- 21) マ・シ共著, 前掲書, 下, 14 紅衛兵の最期, 所収, 革命委員会の主力は軍人だった, 20-22ページ, の節。「四万八千人」は, 21ページ。
- 22) 同上, 21ページ。
- 23) 同上。
- 24) 中嶋著, 前掲書, 上, Ⅲ 奪権闘争とその矛盾, 5 文化大革命の本質とその意味, 所収の, 「兵営国家」としての中国, 257-8ページ, の節のタイトル

ルとして用いられている。

- 25) 三野正洋・田岡俊次・深川孝行共著, 20世紀の戦争, 東京(朝日ソノラマ) 1995。朝鮮戦争は, 239-257ページ, 中越戦争は, 551-556ページで扱われている。
- 26) 同上, によると, 朝鮮戦争における中国軍の犠牲者は, 死傷者13.3万人, 捕虜23.5万人, 中越戦争の場合は, 相互に相手方の約4万人を殲滅したと公表したが, いずれも過大な数字で, いずれも戦死者4000人~5000人で, 負傷者はその2~3倍と見られている。文化大革命の場合は, Daniel Chirot, *Modern tyrants: the power & prevalence of evil in our age*, Princeton (Princeton University Press) 1996, p. 198 によると, 約1億人が被害を受け, 少なくとも100万人, おそらく2000万人が死んだ, とされている。こうした数字を単純に比較することは馬鹿げているようだが, ともかく文化大革命が本物の戦争をはるかに上回る損害をもたらしたことは確かだと思われる。
- 27) 7割という数字は, 本論, 第二章, 注51)参照。さらに上原一慶編著, 躍動する中国と回復するロシア——体制転換の実像と理論を探る, 京都(高菴出版) 2005, 25-43ページ所収の論文, 余勝祥著, 中国における企業システムの転換, の表I-2-I (27ページ)によると 1979年現在, 国有セクターが都市部従業員数の78.3%で工業総生産の81.3%を占め, 残りを集団セクターのみで分担していた, とされている。
- 28) マ・シ共著, 前掲書, 上, 序章 毛沢東はなぜ文革を始めたのか, 所収, 国内のジレンマ, 28-30ページ, の節。
- 29) 中嶋著, 前掲書, 上, II 文化大革命の現場から, 所収, 4 世界のベストセラー『毛沢東語録』の内幕, 182-195ページ。
- 30) そうした記述は多数見られるが, たとえばスペインス著, 前掲書, 184ページ以下。
- 31) 郭沫若は文革当時, 1966年4月という早い段階で自己批判を行った。彼は経歴その他から考えて, きわめて弱い立場にあることを自覚していた点を考慮すべきだろう。
- 32) 毛沢東は24歳で中等師範学校を卒業した後も, 北京大学の図書館に勤めながら研究会に加わったり, 論文を書いたりしており, その後も政治活動に加わりながら, ジャーナリストの卵のような生活をしている。そして26歳には

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

長沙師範学校付属小学校の校長に採用されている。

- 33) 巖・高共著、前掲書、上、文化大革命関係年表、6 ページ、1966年 8 月 1 日の項。
- 34) 毛利和子編、毛沢東時代の中国、東京（日本国際関係問題研究所）1990、第九章の論文、内田知行著、戸籍管理・配給制度から見た中国社会——建国一—一九八〇年代初頭、268ページの60年代前半に関する記述。
- 35) 巖・高共著、前掲書、上、所収、文化大革命関係年表、10ページ、1968年 12月22日の項。
- 36) 李著、前掲書、には、侍医の著者の他、多くの専門医、漢方医、歯科医らが登場する。
- 37) 山田著、前掲書、146ページ以下によると、ボル・ポト政権は、子供の医師や薬剤師を起用して民衆を震え上がらせた。『ワイルド・スワン』の著者も、まだ少女だったころにはだしの医者をした経験を記しているの、二つの状況に大差はなさそうである。
- 38) 本論「はじめに」の注 1)の論文の205ページ。
- 39) 勿論、毛沢東の死後、1979年に登場した「一人っ子政策」のためである。多少は手直しを加えられたが、すでに30年を経過して、中国は少子高齢化への道を進んでいる。
- 40) 1970年 9 月13日、林彪は毛沢東を「当代で最も偉大なマルクス・レーニン主義者であり、マルクス・レーニン主義を天才的、独創的、全面的に新しい段階に高めた」と礼讃しているので、すでに比類なき孤高の思想家として持て囃されていた。
- 41) 第一篇は劉少奇、第二篇は林彪、第三篇では江青に代表される王洪文、鄧小平ら。
- 42) 会社などでも、強力なワンマン社長の下では、ナンバー 2 は自動的に淘汰されている。
- 43) 無名な後継者の指名は、独裁者の権威を一層高める効果がある。
- 44) 米国の大統領が共和党・保守派のニクソンなので、意外性がさらに高まり、毛も周もその点にも期待したようだ。
- 45) ソ連の危険が薄らいだことも、逆に毛沢東の対米交渉意欲を高めたはずである。

- 46) しかし何よりも、林彪を交えないで進めている重大案件であることが、毛沢東の意欲を掻き立てたはずである。
- 47) マ・シ共著、前掲書、下、18 戦争の影、所収、対米解放、116-120ページ、の節。
- 48) 巖・高共著、前掲書、上、「文化大革命関係年表」、11ページ。
- 49) 同上、10-11ページ。
- 50) 同上、12ページ。
- 51) 周恩来は毛沢東に対して卑屈に見えるほど忠実ではあったが、独自の構想力があった。
- 52) ユーゴだけは一見似た立場にあったが、国家の基盤が脆弱過ぎた。
- 53) 米山喜晟著、敗戦が中世フィレンツェを変えた、東京（近代文芸社）2005。
- 54) 拙稿、潮流に乗って——第二次世界大戦後のモンタベルティ現象——、『国際文化論集』、第11号、大阪（桃山学院大学総合研究所）2009。
- 55) 本論文の「はじめに」の注2)の著書。
- 56) 同上、第五章 一九一九年の戦後構築、127-177ページ。
- 57) 最もきびしく中国の方針転換を批判した書物の一つに、シャルル・ベトレーム著、山田侑平訳、毛沢東に背いた中国、東京（日中出版）1980、がある。
- 58) 本章の注47)。
- 59) 天児著、前掲書、第六章 革命と近代化の確執 毛・周体制と米中接近、217ページ。
- 60) 同上、第七章 改革開放・近代化へ邁進 毛沢東「準軍事外交」から鄧小平「改革開放外交」へ、251-262ページ。
- 61) 日中間の断絶から、LT貿易の開始に至る経緯は、添谷芳秀編著 現代中国外交の六十年 変化と持続、東京（慶応義塾大学出版会）2011、第1部「歴史」と戦後日中関係、第4章 戦後初期日中関係における「断絶」の再検討（1958-1962）——「闘争支援」と「経済外交」の協奏をめぐる、93-114ページ、に記されている。
- 62) 日中間の戦争は1931年から1945年まで続いた。当時と今日とでは、戦争や植民地に関する世界の通念が大きく変わっていることを忘れてはならない。
- 63) 規模が拡大した今日の中国経済から見ると、ODAの金額はそれほど大き

## 現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

くは見えないが、当時最低限度必要とされていたインフラを補充して将来の発展に寄与した点で、金額以上に効果を発揮していた。

- 64) 周知のごとく、国交回復を実現した当時の首相田中角栄と外相大平正芳は、下級兵士および公務員として、日本が侵攻していた当時の中国で勤務した体験があった。
- 65) 王著、前掲書、154ページの図50、海外直接投資に占める香港・台湾資本の比重、によると、台湾資本がその図に現れるのは1990年からである。また2010年に習近平が、シンガポールと中国との国交20周年記念式典に参加したことを伝えた記事に、1990年10月3日に両国の国交が樹立されたことが記されている。さらにインターネットで読める創価大学平成19年度『紀要』に掲載された、新井高志著の論文、韓国外交史における韓中外交——韓国の対中外交樹立の目的とその影響、によると、中国は北朝鮮の金日成が1991年10月に訪中した際、米朝修交が成立するまで中国は韓国との修交をしないようにと要請し、鄧小平がそれに同意したにもかかわらず、中国はその翌年の1992年に韓国との国交を樹立したと記されている。それらの国々とは異なり、本注冒頭の図によると、香港は早くも1979～83年当時から、中国への直接投資の約6割を占めており、多少の変動はあっても常に5～7割のシェアを堅持し続け、90年代の後半ようやくシェアの5割を割るに至っている。それまでの蓄積たるや、日米両国をあわせても遠く及ばない。
- 66) 南・牧野共編、前掲書、第10章、171-190ページの論文、杜進著、中国は国際社会にとって脅威か？ 中華経済圏の形成と米中経済摩擦、I 大中華圏の生成、の節、特に172ページ。
- 67) 同上、174ページの表10-1によると、アジア諸国が中国への直接投資で占める比率は、1992年で89.7%、2003年で61.8%。
- 68) 本章、注65)の香港に関する記述。
- 69) 同上、の図によると、米国は1979年以来日本と大差のない1割前後の割合を占めている。1990年代後半からその比率が縮小し、世界のその他の国々の投資の比率が増える。
- 70) ソ連と東欧諸国の穀物不足や、米国のヴェトナムでの敗勢などによって、1960年代末米ソ間のデタント（緊張緩和）が進み、70年代の大半はそうした風潮が支配的だった。

- 71) 共同通信社編, 世界年鑑 2010, 東京 (共同通信社) 2010, 228-229ページ。サミュエル・ハンチントン著, 鈴木主税訳, 文明の衝突, 東京 (集英社) 1998, 373ページ以下。ハンチントンは, この戦争を (冷戦開始以来?) 最初の文明間の戦争として重視している。
- 72) 共同通信社編, 世界年鑑 1981, 683ページの, ソ連のスポーツの項の末尾に, ソ連のアフガニスタン侵攻に抗議して, カーター米大統領が1980年のモスクワ・オリンピックのボイコットを呼びかけたために, 米国, 西ドイツ, 日本, 中国等が参加せず, 参加国は81カ国, 7000人に止まったことが記されている。
- 73) 拙稿, 「モンタペルティ現象」試論, 『国際文化論集』第39号, 大阪 (桃山学院大学総合研究所) 2009, 143-204ページ。および拙稿, 潮流に乗って——第二次世界大戦後のモンタペルティ現象——, 『国際文化論集』第41号, 大阪 (桃山学院大学総合研究所) 2009, 35-104ページ。
- 74) ジョン・ダワー著, 三浦・高杉・田代共訳, 敗北を抱きしめて, 下, 第12章 GHQ が新しい国民憲章を起草する, および第13章 アメリカの草案を日本化する, 151-249ページ。
- 75) 1950年朝鮮戦争が勃発したため, 日本駐留中の米軍が朝鮮に派遣されて手薄になったのを補うために, 同年8月にマッカーサーの承認を得て警察予備隊が創設され, さらに米国の期待に答えて1952年8月に警察予備隊は保安隊に改組, 海上保安庁内の海上警備隊も保安庁内の警備隊に改組された。1954年に成立したMSA 条約が日本のさらなる防衛努力を求めたため, 政府は防衛二法を強行成立させ, 保安隊は陸上自衛隊, 警備隊は海上自衛隊に改組され, 航空自衛隊が新設されて今日に至る。
- 76) あるいは全く国策に基づく官製デモかも知れないが, 小泉首相の靖国参拝に対する中国人学生の反応には, 今にも日本人が攻めてくるような真剣さを感じられた。
- 77) 天児著, 前掲書, 253ページ。肖敏捷著, 人気中国人エコノミストによる中国事情, 東京 (日本経済新聞出版社) 2010, 32-35ページも, この視察を重視して, 35ページでは, 「日本に学ぼう」の号令となった, と記している。
- 78) 残念ながら, その地域の対日感情は必ずしも良好とは言えないので, こう

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

した事実がまともに考慮されるとは思われないが、1993年の世界銀行のレポートで「東アジアの奇跡」とさえ呼ばれたほどの発展を遂げている、韓国、台湾、香港、シンガポールの内、前の2つは長年日本の植民地であり、後の2つは第二次大戦中日本の占領下にあったことと、今日の経済発展とは無関係ではあり得ない。

- 79) 肖著、前掲書、34ページも鄧小平の国際感覚を評価している。
- 80) 日本経済新聞社編、日中逆転 膨張する中国の真実、東京（日本経済新聞出版社）2010。
- 81) そうした予測の下に、シエナに発生したと思われるモンタペルティ現象を論じたのが、拙稿、敗戦の効果——世界史の中のモンタペルティ現象——、『国際文化論集』第42号、大阪（桃山学院大学総合研究所）2010、28-50ページ、第二章 フィレンツェとシエナ——同時多発的モンタペルティ現象——、である。
- 82) たとえば、本論の「はじめに」の注1)の論文の178ページに、「第四にそうした転換が個人の解放や行動の自由度の増大と結びつき、第五に敗戦前後の体験が国民を鍛えることで、モンタペルティ現象はさらに大きく開花することであろう」と記しておいた。
- 83) 同上、205ページ。
- 84) 王著、前掲書、48ページの表4。
- 85) 毛里和子編、前掲書所収、第九章の内田論文、263ページ。
- 86) 同上。
- 87) 深尾光洋編、中国経済のマクロ分析 高成長は持続可能か、東京（日本経済新聞社）2006、第六章の李論文、中の203ページの記述。
- 88) 同上。
- 89) 同上、203-204ページ。
- 90) 同上、204ページ。彼らは「食糧を自弁する戸籍証明」が発給され、事故等も自己責任で対応したらしい。
- 91) 同上、204ページ。なお同ページの注34)によると、「集鎮」は都市ではなく、小さな町を指すので、非農業地域と訳すべきだとし、都市への移動はもう少し先だとしている。
- 92) 同上、204ページ。

- 93) 同上。
- 94) 同上, 94-95ページ。
- 95) 同上, 95ページ, 内陸部の省から沿海部へと出稼ぎに向かう労働者の集中移動のこと。
- 96) トラブルは, 乗りなれない交通機関, トイレ, 食糧調達, 宿泊施設, 社会治安, 労働市場管理, 就業中の事故, 賃金の支払い等に関連して連日, 無数に発生した。
- 97) 同上, 205ページ。
- 98) ヤン著, 前掲書, 第三章 垂簾の治者——富強中国の夢 5 引退はしたが [1990~93年], 298ページ以下。
- 99) 注87)の李論文, 205ページ。
- 100) 同上, 205-206ページ。
- 101) 同上, 207ページ。国家統計局の調査では, 1.2億人, 農業部のそれでは, 1.03億人。
- 102) 同上, 賃金差別は, 209ページ, 事故が多発する劣悪な条件は, 210ページ。非国有企業で起きた労働災害の被害者の8割は, 出稼ぎ労働者だという。まさに蟹工船の世界であるが, 二元構造の基になっているのは毛沢東時代の戸籍制度だから, 亡霊を呼び出して再度革命を起こしてもらっても無駄である。
- 103) 本章注85)と同じ。
- 104) 同上, 266-267ページ。
- 105) 同上, 267ページ。
- 106) 同上, 267ページ以下。
- 107) 同上, 269ページ。意外にも農村よりも都市の方がゆとりがあったらしい。農村は都市によって収奪されていたのである。
- 108) 同上, 269ページ。
- 109) 同上, 269-270ページ。
- 110) 同上, 270ページ。それにしても知識青年とは持ち上げたものである。同時に知識への軽蔑がこめられているのではないか。
- 111) 同上, 270ページ。
- 112) 同上, 270-271ページ。
- 113) 同上, 271ページ。

現代中国でもモンタペルティ現象が発生していた

- 114) 同上, 271ページ。
- 115) マ・シ共著, 前掲書, 下, 281-282ページ。
- 116) この表は, 本論, 第二章の注63)で記したミッチェルの著書のアジア篇の中国の項と, 下記のヨーロッパ篇のロシアの項から作成した。B.R. Mitchell, *INTERNATIONAL HISTORICAL STATISTICS, EUROPE 1750-2000* Fifth Edition, New York (Palgrave Macmillan) 2003, p. 584.
- 117) 最初の5年間はほとんど差がないため, 格差は80年代の10年間に生じたものである。
- 118) 1986年4月26日にウクライナの原子力発電所の実験中にメルトダウンが起きて大爆発を起こした事故は, アフガニスタン戦争で消耗したソ連にさらなるダメージを与えて, その崩壊につながった。崩壊については, 佐藤優著, 自壊する帝国, 東京 (新潮社) 2006やデイヴィッド・レムニック著, 三浦元博訳, レーニンの墓 ソ連帝国最後の日々, 東京 (白水社) 2011などでその経緯が分かる。

## **The Montaperti Phenomenon (M. P.) Happened Also in Modern China**

YONEYAMA Yoshiaki

In the first chapter, I traced the process of the Cultural Revolution (C. R.) and showed the characteristics of the absolutistic order of Mao Zedong that the C. R. had generated. The authority of Mao became too great to permit the appearance of rivals. In the second chapter, I showed the marvelous changes that happened after the death of Mao. After the arrest of Jiang Qing and her comrades and the short transitional time of Hua Guofeng, Deng Xiaoping and his group subverted Mao's order and began economic reform. First they broke up the People's Communes and permitted trade with capitalist nations in some special zones. After the success of several economic experiments, the Chinese people became busy with capitalistic activities. At this time, M. P. was advancing in Japan, and the models and capital of Japan and other Asian nations greatly helped the development of the Chinese economy. As a result, the People's Republic of China continued to grow and became the second economic power in the world. Thus the end of Mao's order, that is to say, the defeat of Mao's ideological struggle after his death brought about the marvelous economic development of modern China.

In the third chapter, I explained why the defeat of an ideological struggle could bring about the same results as the defeat of a real war in modern China. Firstly, the C. R. greatly resembled a real war. It began with violence and the number of victims surpassed vastly that of the real wars of the period, and the military played the same important role as in a real war. Thus the end of the C. R. brought similar results to the end of a real war. Secondly, the C. R. had imposed the same repression on the Chinese people as a real war, and the

end of it liberated them like at the end of a real war. Thirdly, Mao's authority became so great that he could decide diplomatic policy without being bound too much by former policies. Thus he could invite US President Nixon and begin negotiations with the USA. Fourthly, international society, especially Japan, USA, and some Asian countries, welcomed the new policies of Deng Xiaoping that changed radically the economic system of modern China and liberated the Chinese people to take part in economic activity. Fifthly, another M. P. preceding then in Japan, contributed to the birth of the Chinese M. P., offering a model to imitate and other cooperations. Sixthly, after the end of the C. R. and the break-up of the People's Communes, Chinese farmers began to leave their home villages to earn more in the cities. The large-scale movement of Chinese farmers amplified the development of the Chinese economy. Lastly, the hard experiences of the period of the C. R. trained the people, especially the young, both mentally and physically.

# 言語権・言語法

——言語政策の観点から——

橋 内 武

## 1. はじめに

法言語学における「法と言語と社会」の問題を人権の観点から考えると、言語権の問題が浮上してくる<sup>1)</sup>。言語または言語権に関する法制度という点では、言語法という実定法の有無が焦点になる。それがもしあればどのようなものか、言語政策の一環として言語法はEUやコモン・ローの国々ではどのような形を採っているか、「多文化共生社会」の日本にはどのような言語政策があるのか問うてみよう。

## 2. 言語権とは何か

### A. 言語権の定義

言語権 (language rights) とは、簡潔に言えば、自己が自ら望む言語を使うことができる権利である。だから、「被疑者または被告は自己に不利な供述は強要されない」とする黙秘権とは、言語の使用・不使用という意味合いにおいて反対概念であると言える (Gibbons 2003: 256)。

言語権なるものは、環境権や知る権利などと同じく、近年注目されてき権利である。これは、「言語的人権」(linguistic human rights) とも言われ、

---

\* 本学国際教養学部

キーワード：法言語学，言語権，言語法，多言語主義，言語政策

「自己もしくは自己の属する言語集団が、使用したいと望む言語を使用して、社会生活を営むことを誰からも妨げられない権利である」（鈴木 2005: 8）。この定義には、つぎの2つの観点が含まれる。

- ① 自己または自集団が使用したい言語を社会的場面で自由に使える権利
- ② その社会の中で自己の言語が使用する環境を国家が整えることを要求する権利

このうち、①の方が一義的であり、一種の自由権である。②は一種の社会権である。

では、それぞれの定義についてより詳しく検討してみよう。言語権は、精神の自由権の一部である。確かに精神の自由の中核をなす点で個人権であるが、言語集団のアイデンティティーに深く係わる点で集団権でもある（鈴木 2000: 8f.）。だからこそ、使用する言語に自己決定権があるのだ。

社会権としての言語権は、少数派言語の地位向上を求めて主張され、以下の4領域で用いられる共同財と認識される（渋谷・小嶋 2007: 28f.）。

#### ① 国家的領域

立法・司法・行政の三権を中心とする国家機関または自治体における公的業務言語・文書言語

#### ② 企業活動の領域

企業内の就労言語・業務言語、広告の言語、商品説明書、契約書の言語

#### ③ 市民的公共領域

公営または民営のマス・メディアの言語（特にテレビ・ラジオ・新聞）

#### ④ 学校教育の領域

公立または私立の学校において教育言語または教科（科目）としての当該言語の教育

言語権の観点から言えば、来日移民・移住者には次のような施策が必要であろう。

## 言語権・言語法

- ①の国家的領域に関しては、外国人への言語サービス、特にコミュニティー通訳（司法・医療・学校・行政・災害・行事）が十分保障されるべきである。専門別の通訳者が養成され、適切な報酬が保障されるべきである。
- ②の企業活動の領域に関しては、就労する従業員の国際化と市場の多様化に合わせて、言語的多様化が図られるべきである。
- ③の市民的公共領域に関しては、多言語情報の提供やエスニック・メディアの発達が助成・推進されるべきである。
- ④の学校教育の領域に関しては、外国籍児童・生徒への教育が義務化され、日本語を教育言語として学習すると同時に継承語の学習も支援されるべきである。

### B. 少数言語と手話の地位

地域語・少数言語の話者や手話を母語とするろう者は言語上の差別を受けてきた。しかしながら、1948年国連総会採択の世界人権宣言は、第2条において、人種・性別などによる差別と並べて、言語による差別があってはならないとしている。1966年国連総会採択の国際人権規約（B規約）の第27条は自己が言語を使用する権利について言及し、言語を人権の内容として位置づけている。そして、1992年採択の民族的又は種族的、宗教的及び言語的少数者に属する者の権利に関する宣言（マイノリティ権利宣言）においては、彼等の保護・促進に関する国家の義務の基本原則を示している。さらに、1996年採択の世界言語権宣言では、「言語権が個人的権利であると同時に集団的権利でもある」と明言し、もっとも進んだ考え方を表明している。以上の諸宣言に関しては、言語権研究会編（1999）の「第3部 資料編」を参照。

言語権は、言語社会の多数派・主流派には、取り立てて問題視されることはなかった。だが、そのような権利の保障は、地域語・少数言語の話者

において、特に重要である。日本列島の地域語としては、北方先住民のアイヌ語と沖縄人の琉球語が挙げられる。確かに、アイヌ新法の成立によってアイヌ文化の振興が叫ばれてはきたものの、アイヌ語はもはや地域社会の生活言語ではないから、その使用領域は極めて限定的で、「危機に瀕する言語」とみなされている。他方、沖縄の琉球語（ウキナーグチ）は、年配の方々によって使われているものの、若者への継承が不十分である。というのも、日本語（ヤマトウグチ）への言語的同化が進んだからである。その中であって、りんけんバンドなどは、琉球語の使用ジャンルを広げるのに貢献した。つぎのC. 裁判の言語と司法通訳で述べるが、裁判における地域語（方言）の使用は、言語権をめぐる議論に問題を投げかける。

その他に、少数言語としては、オールドカマーの朝鮮語や中国語、ニューカマーのブラジル・ポルトガル語、スペイン語、フィリピン語などの移民・移住者の言語がある。果たしてそれぞれの言語権が社会生活の諸領域でどの程度保障されているだろうか。それはまさに「多文化共生社会」の課題である（桂木 2003, 徐・遠山・橋内 2000, 米勢・ハヤシザキ・松岡2010）。

ところで、耳の不自由な人々の間で使われる手話も言語である。そこでろう児をもつ親の会は小嶋勇弁護士を代理人として、2003年に「ろう児の人権救済申立」を行った。この申立てによれば、日本手話を母語として育つろう児は言語的少数者であるから、教育言語としての日本手話の使用が言語権として保障されるべきであるという。国内の大抵のろう学校では日本語による口話法で教育が行われてきたが、ろう者の母語である日本手話は（音声）日本語とは異なる独自の言語である。このことを認識して、手話法による教育が保障されるべきだ。日本語の口話法による教育はろう者の母語を抹殺するものであって、ろう児の言語権を軽んじている。だからこのようなろう教育は止めて、手話法による教育に切り替えるべきである。——以上がこの申立ての骨子である（小嶋・全国ろう児をもつ親

の会2004)。なお、2011年（平成23年）に改正された障害者基本法では、「言語（手話を含む）」とし、手話を言語として認めるようになったのは画期的な出来事である<sup>2)</sup>。

### C. 裁判の言語と司法通訳

日本の裁判法74条には、「裁判所では、日本語を用いる」という規定がある。では、「日本語」とは何を指すのか。いったいウチナーグチ（琉球方言または琉球語）は日本語であるのか、その他の各地の方言は裁判で使えるのか。札幌（2009）は、abcdeの5名の裁判官に法廷における方言の使用について問うている。その回答は下記のようにまちまちである。

- a. 「方言」使用を政治的示威行動、あるいは抗議運動と見る。
- b. 方言も日本語の一つであるから、方言が通じる場合は、方言を用いることに何ら支障はない。
- c. ウチナーグチも日本語であり、通訳を付けるなどそのような意味をとらえることができるような措置をとることが適切である。
- d. 日本語は標準語を意味し、地方の方言は含まれない。
- e. ウチナーグチは日本語の範疇に入らないが、[外国語ではないから]通訳をつけるわけにもいかない。

札幌（2009）は「言語権の中に方言権が含まれる」と考えている。そして法廷で方言を使う意味は3つあるというのである。

- ① 法廷の中で事実を明らかにするため、
- ② 法廷における方言権の確立のため、
- ③ そのことばを使用する自身のアイデンティティーのため、である。

被告人が日本語を解さない外国人の場合には、要通訳の裁判が行われる。刑事裁判の場合には、裁判所が通訳人を選任する。特に、被告人の言語権の保障という点で問題になるのは、的確で公正な通訳が行われなかった場

合、つまり誤訳や通訳エラー（訳し落とし、語句・文の追加、編集、文法上の誤り、文の意味の誤訳、レジスターの不一致、言い淀み追加など）が生じた場合である。古くはメルボルン事件（1994）、新しくはニック・ベーカー事件（2002）やベニース事件（2009）がこれに当たる。いずれの場合にも言語弱者・情報弱者である外国人被告人に不利にはたらし、信頼すべき公正な裁判が受けられなかったことになる。この点に司法関係者は留意して法廷通訳人の資質の向上に力を注ぐべきだろう（渡辺ほか 2010）。

### 3. 言語法と言語政策

#### A. 言語法とその類型

言語権を実定法化したものが言語法であり、国家が領土内で用いる言語の地位や使用に関して規定する法律である。「言語法」という名の成文法をもつ国は多くないが、ここでは憲法・刑事訴訟法や民族的少数者・メディア関連の法律などの実定法における言語関連法の総体を指すこととする。

鈴木（2000）によれば、世界各国の憲法における言語の規定は、ほぼつぎの4つに分類される。

- ① 憲法で、国語、公用語を宣言するもの。例、スイス連邦。「スイスの国語はドイツ語、フランス語、イタリア語及びレトロマンズ語である。ドイツ語、フランス語及びイタリア語は連邦の官庁語とされる。」（憲法第116条）。スペインやベルギーの憲法にも言語規定がある。
- ② 多様な言語を承認、保護しながら、将来、国語の統一を目指す憲法。例、インド連邦。「インド領またはその一に居住する公民であって固有の言語文字又は文化を有するものは、これを保持する権利を有する」（憲法第29条第1項）そして憲法第343条において、ヒンディー語を連邦公用語とし、英語を「連邦の公のすべての目的のために継続して」使用することとしている。また、第347条は州の人口の多数が使用す

る言語を公に承認するとし、憲法第8付則に22の言語を例示している。

- ③ 民族語を尊重する憲法。例、中華人民共和国。「中華人民共和国は、多民族の統一国家である。(中略)各民族はすべての自己の言語、文字を使用、発達させる自由を有し、自己の風俗習慣を保存し、又は改革する自由を有する。(以下省略)」(憲法第3条)
- ④ 特に、国語や公用語には触れない憲法。例、日本(日本国憲法、後述) 世界各国の憲法における言語の地位に関して特に注目すべきは、①EUの公用語、②欧州諸国における公用語と地域語の扱いである。③カナダやウェールズにも地域語尊重の言語法があり、社会言語学的な関心と呼ぶ。

#### B. 欧州連合と欧州評議会の多言語主義

ヨーロッパの国際機関として注目されるのが、欧州連合(European Union, EU)と欧州評議会(Council of Europe, CoE)である(橋内 2010)。前者の本部はブリュセルとルクセンブルグ、欧州議会はフランスのストラスブールで開かれる。後者の本部はストラスブールにある。

欧州連合(EU)は、その前身である欧州石炭鉄鋼共同体(1951年)・欧州経済共同体(EEC, 1957年)を経て、欧州共同体(EC, 1967年)を1993年に発展させたものである。2011年現在27の加盟国があるが、その公用語は23を数える。この点で他の国際機関と比べて突出している。EUは「多様性の中の統合」を目指し、多言語主義(multilingualism)・多文化主義(multiculturalism)の政策を採るからだ。加盟国の数と公用語の数が同数ではないのは、英語は連合王国とアイルランドとマルタで、フランス語はフランス・ベルギー・ルクセンブルグで、ドイツ語はドイツ・オーストリア・ベルギー・ルクセンブルグで公用語の地位があるからである。そして、国によっては複数言語を公用語として認めている。例えば、マルタではマルタ語と英語が公用語である。(EUについては村上 2009を、多言語主義

については 三浦 1997を参照。)

欧州委員会，欧州議会，欧州理事会や欧州裁判所などの諸機関ではEUの公用語を使うことが可能であり，通訳官によって同時通訳される。系統の異なる少数言語の公用語（例えば，フィンランド語とマルタ語）の間では，作業言語を介してリレー通訳がなされる。公式文書もこれらすべての公用語に翻訳される。但し，EUの様々な部局の委員会における主な作業言語は英語・フランス語・ドイツ語である。

EU内の欧州委員会（European Commission）では，加盟国が申請すれば公用語に加えて国内の地域語を併用公用語として認める。だから，例えば，バルセロナの市民がカタルーニャ語で欧州委員会に問い合わせをすれば，同委員会はカタルーニャ語で回答をしなければならない。

他方，欧州評議会（CoE）は，第2次世界大戦後の1949年に議会制民主主義と法秩序の維持と人権擁護を基本理念とし，平和主義を標榜する国際機関である。本部はフランスのストラスブールにあり，欧州人権裁判所を併設している。2007年現在，47カ国が加盟している。公用語は英語とフランス語，作業言語はドイツ語，イタリア語，ロシア語を含む。この機関の本部には言語政策局があって，2001年以来CEFRの枠組による複言語主義（plurilingualism）・複文化主義（pluriculturalism）（個人レベルでの多言語・多文化対応能力の向上を目標とする）の言語教育政策を提言している。欧州評議会による政策提言は，EU各国で採用されて，「母語+2」の三言語教育が実施されている（大谷ほか 2010，橋内 2010）。

### C. ヨーロッパ諸国の言語法

ヨーロッパ諸国においては，「言語に関する法律」が個別に制定されている（渋谷 2005）。それは，国家が国全体の公用語として認知する言語，国内のある地域・自治州において公的に認める言語を規定するものである。

EUの多言語主義は加盟各国の国内法制定に影響を与えている。例えばオーストリア東部のオーバープルンドルフ (Oberpullendorf) とオーバーヴァルト (Oberwart) においては、地域語のハンガリー語が行政・郵便・鉄道・軍隊で公用語としての法的地位を得た (Gibbons 2003: 258)。これらの地域社会におけるハンガリー語からドイツ語への言語移行 (language shift) を食い止めて、地域少数言語を振興するねらいがある。

つぎに述べるスペインとベルギーの例は、地域語を公用語とする地方分権という点で興味深い。

スペインは、フランコ独裁の時代 (1939-1975) には中央集権国家であったため、スペイン全土においてスペイン語 (カスティーリャ語) のみを唯一の公用語としていた。だが、議会君主制民主主義を謳う1978年憲法の第3条では、スペインの国家公用語はスペイン語であるものの、各自治州ごとに公用語をもつことが認められている。それは、言語の多様性を文化財として尊重し保護する考え方とも関連する。それゆえ、カタルーニャではカタルーニャ語 (1979年)、バスクではバスク語 (1979年)、ガリシアではガリシア語 (1981年)、バレンシアはバレンシア語 (1982年)、ナバーラはバスク語 (1982年)、バレアレス諸島はカタルーニャ語 (1983年) を各々の自治州の自治憲章に規定した。それらに関連して、各州ごとに地域公用語に関する法律が制定された。さらに、カタルーニャ自治州のアラン谷では「アラン谷特別体制法」(1990年)により、アラン語も公用語の地位を得た。カタルーニャ語などの自治州の公用語は、欧州連合 (EU) の欧州委員会 (European Commission) における併用公用語の地位も獲得した (渋谷 2005: 112)。

他方、ベネルックス3国の一つである「ベルギーは共同体と地域圏で構成される連邦国家である。」(1994年憲法第1条) 言語共同体毎に地域自治が行われている。①ワロニー地域圏 (フランス語共同体, ドイツ語共同体),

②フラーンデレン地域圏（オランダ語共同体）、③ブリュッセル首都地域圏（フランス語・オランダ語併用共同体）である。各共同体は言語境界線によって区分されていて言語共同体毎に公用語が異なる。連邦政府における「各議院の選出議員は、法律をもって決められた方法により、フランス語言語集団とオランダ語言語集団に分けられる。」（憲法第43条）そして「憲法の法文はフランス語・オランダ語・ドイツ語で作成される」（憲法189条）。

現在ベルギーは、立憲君主制の連邦国家であり、図1のような複雑な国家体制を施している。（図1は石部 2011: 31を参考にした。）

連邦国家国	ベルギー王国			
言語圏	オランダ語圏	首都二言語併用圏	フランス語圏	ドイツ語圏
共同体	フラーンデレン共同体	フランス語共同体	ドイツ語話者共同体	
地域	フラーンデレン地域	ブリュッセル地域	ワロニー地域	
州	5州		5州	
自治体	589自治体			

図1 ベルギーの国家体制

ベルギーの言語法は1930年の独立以来、言語政策（language policy）の変遷とともに4つの時代区分により変化してきている（石部 2011: 64）。

第1期（1830年－1860年代） 単一言語主義——フランス語のみ公用語

第2期（1870年代－第1次世界大戦） 二言語主義（フラーンデレンのみ）

第3期（第1次世界大戦後－1950年代） 地域別一言語主義

第4期（1960年代－現在） 連邦制と地域別一言語主義の厳格化

ベルギーでは、各時代に異なる言語法が制定された。言語政策の方針が変わるたびに、行政・教育・裁判・軍隊の領域別に新たな法律が制定された。これら4つの領域が「言語戦争」の主戦場であったのである。法律が

修正・改正されること毎に新たな言語政策が展開したのだ。

先に述べたスペインの場合は、カスティーリャ語と地域語（例えば、カタルーニャ語）による社会的バイリンガリズムを推進する言語政策が実施されている。それに対して、ベルギーの場合には、言語圏・共同体ごとに公用語が異なり、二言語併用地域である首都ブリュッセル以外ではモノリンガリズム（単一言語主義）を強化させる施策で推移しているように見える。

#### D. コモン・ローの国々の言語規定

では、英米法で代表されるコモン・ロー諸国の言語規定について取り上げてみよう。以下カナダとウェールズについては、主に鈴木（2000）による。

##### ①カナダ

1988年7月に成立した「カナダにおける多文化主義の維持と振興に関する法律」（略称、カナダ多文化主義法）により、二言語二文化主義を発展させて、多文化主義を前進させるようになった。ここで二言語二文化とは英語とフランス語、二文化とはイギリス文化とフランス文化を指す。これら二言語はカナダ連邦の公用語として機能している。新たに多文化主義を謳うのは、政府には先住民（イヌイトとファースト・ネイションと称されるアメリカ原住民）と移民の文化を含めたモザイク型社会を維持、発展させようという姿勢があるからである。この点でときにメルティング・ポットと喩えられるアメリカ合衆国の政策とは対照的である。

カナダ多文化主義法の第3条と第5条にはつぎのように謳っている。

第3条① ここにカナダ連邦政府の施策として次のように宣言する。

(i) カナダ公用語の地位と使用を振興するとともに、英仏語以外の言語

使用を保持し、推進する、そして

- (j) カナダ公用語への国家的公約と調和させながら、カナダ全体を通じて多文化主義を進めること。

第5条① 担当大臣はカナダの多文化主義政策の実施にあたって、必要と考える限度において、(中略)次によりこれを施行しなければならない。

- (f) カナダの多文化継承財産に寄与したすべての言語の修得、保持及び使用を促進すること。

なお、多文化主義という点で、カナダはオーストラリアと比べられることがある。類似点はともにイギリス・アイルランド系住民が多数派・主流派であって、それに先住民と多様な移民からなる国であること。相違点はカナダは主にケベックなどに居住するフランス系市民に配慮して英仏二言語を連邦の公用語とするのに対して、オーストラリアは英語のみが公用語であることである。

## ② ウェールズ

ウェールズは、連合王国の一部をなすが、ケルト系の言語であるカムリー語(ウェールズ語)の文化が息づいている。1940年代からカムリー語高揚運動が高まり、1967年にカムリー言語法(全5条)が成立した。この言語法は1942年ウェールズ裁判所法第1条を廃止して、次のように改定された。

「ウェールズ言語法及びマンモスシャーにおける法手続きのいかなるものであっても、カムリー語の使用を望む当事者、証人あるいはその他のいかなる人々も、カムリー語を用いることができる。カジストレート・コート以外の裁判所で取り扱われる事件についても、これに基づく裁判所規則で定めるところに従い、また通訳に関して必要とされる諸規定もこれに従って作られるものとする。」とある。

この規定によって、裁判所においてウェールズ語を使う権利が保障され

## 言語権・言語法

たのである。カムリー語の訴訟に関しては、必ず通訳が行われた。上級裁判所では法廷内に同時通訳の設備が設けられ、必要な通訳要員を国家の費用で養成した。このようにカムリー語が英語と同等の地位が得られるような司法制度改革が進んだのである。

1993年には新しい「カムリー言語法」(全37条)が成立し、カムリー語委員会によるカムリー語運用計画と地方教育委員会によるカムリー語教育計画が盛り込まれた。この言語法はカムリー語の地位を確固たるものにし、EU内における言語少数民族の言語と文化の尊重という国際的な要請にも対応するものである。

なお、ウェールズと同様ケルト系のアイデンティティーをもつアイルランド共和国の場合は、ゲール語(アイルランド語)を国語・第一公用語とし、英語を第二公用語としている。伝統的ゲール語社会は辺境の地に散在している。

以上述べてきた国々は、すべて多言語国家または複数言語国家である。世界全体の言語状況から言えば、それが一般的である。というのも、世界にある200余の国家の中で、合わせてほぼ7,000近くの言語(Ethnologue 2009)が使われているからである。

### E. 日本の言語法

日本には、実定法としての「言語法」はないし、その必要性が公に論じられたことがない。日本国憲法には、この国の国語や公用語に関する条文はない。言語に関する言及は、裁判所法第74条「裁判所では日本語を用いる」という規定に留まる。国の言語規定が乏しいのは、長い間「わが国は日本語だけの単一言語社会である」という暗黙の前提・思い込み(つまり「単一言語国家」の神話)が多数派である日本語母語話者の間にあったからである。

人権を重んじる立場からすれば、憲法改正の折りには、第14条（法の下  
の平等）「すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社  
会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別  
されない。」に「言語」を加えることが望まれる。もっとも、現行の日本  
国憲法第14条にある「人種」以下の文言は例示であつて列挙ではないと解  
釈するならば、すでに「言語」も含まれていると判断できるだろう。

現実の日本列島は、歴史的・地理的に北方先住民のアイヌ語、日本語  
（共通語と方言）、沖縄の琉球語に加えて、日本手話、来日移民の諸言語  
（中国語、韓国語、ブラジル・ポルトガル語、スペイン語、フィリピン語  
など）が使われる多言語社会であるのだが、法制度を含む社会の諸制度が  
そのような多言語状況に対応しきれていないのが現状である（真田・庄司  
2005）。

刑事訴訟法第175条には「国語に通じない者に陳述をさせる場合には、  
通訳人に通訳をさせなければならない。」とある。しかしながら、法廷通  
訳人の能力に高度なものを要求していない（東京高裁平9.7.16高刑集49-  
2-354V）がために、的確で公正な裁判が必ずしも保障されていない。手  
話通訳士の資格認定制度が有効に機能する一方で、外国語通訳担当の通訳  
人資格技能検定は2011年度から一般社団法人・日本司法通訳士連合会  
（JLIA）によって始められることになったばかりである。

## F. 日本の言語政策・言語計画

ところで、言語法は言語政策という施策に基づいて法制化される。一連  
の言語政策は「言語計画」（language planning）と称され、次の3段階を  
経る。

- 第1に地位計画（国語・公用語の選定、地域語や少数言語の扱い）、
- 第2に実体計画（文字の創案・標準語と標準表記の確定、語彙の近代化）

## 言語権・言語法

第3に普及計画（公的機関・教育機関・メディア等を介して使用・普及）が推進される。そうならば、近現代史を言語政策の点から捉え直す価値がある。

総じて、日本の行政は縦割りのため、省庁間の関係が乏しい。そのため共通の理念に基づく、明確な言語政策が打ち出されていない。そういう中において、国語政策は、明治以来第1に日本語を「国語」に定め、第2に語彙の近代化（借用翻訳語彙の採択と文体の言文一致）と国語の標準語化・共通語化を図って、文法・語彙・書記体系（漢字制限や送り仮名、仮名遣い）などの規範化を行い、第3に共通語を公的機関・教育機関・メディアを介して普及させた（西原 2010）。戦前、台湾・朝鮮などの旧統治領において、「国語」が植民政策の一環として教えられたのである。その結果、日本手話、地域方言、アイヌ語・琉球語や旧統治領の言語は、中央集権的的同化政策により周縁化・矮小化されたのである。

他方、外国語政策（自治体の言語サービスなど）と日本語教育政策（地域日本語教育）は、先に述べた日本社会の多言語化状況に十分に対応しているとは言えない。「多文化共生社会」という認識が進む中であって、日本の外国語教育政策は、小中高大というすべての教育段階で英語偏重であるから、中国語・朝鮮語・ロシア語を含む隣語教育や複言語教育の推進が俟たれる。今後は言語権や言語法への一般の関心を高め、総合的な言語政策の立案と実現が求められる。

## 4. ま と め

言語権も言語法も「法と言語」の研究課題である。言語権は言語的弱者が自己の言語を自由に使用し得る権利である、と同時に自らの集団のアイデンティティーを確立するための権利でもある。言語や言語権について法制化されて、言語法という国家の言語規定になる。日本の実定法では、裁

判法第74条に「裁判所の言語は日本語である」とあり、刑事訴訟法第175条には「司法通訳」、同第176条には「手話通訳」そして改正障害者基本法第3条3に「言語（手話を含む）」への言及があるほかは、これと違って言語に関する規定は認められない。

言語規定の乏しさは単一言語国家という前提に由来するのであろうが、「多言語社会」・「多文化共生社会」の現実に対処するためには、他にも言語規定が必要になるのではないか。外国において法制化されている言語法のような規定は、国の言語政策の一環として作られるべきものである。明示的な言語政策は欧州諸国やコモン・ローの国々には認められる。だが、日本には経済政策や教育政策などはあっても、明確な言語政策はない。日本も多様な背景をもつ市民と共に生きる社会にあるという認識が進む中であって、言語法の法制化を含む言語政策の欠如と遅れは目を被うばかりである。このような政策課題に向けて、国・自治体を含む機関・組織の今後の取り組みを大いに期待するところである。

#### 参 照 文 献

- ・石部尚登（2011）『ベルギーの言語政策——方言と公用語』、大阪大学出版会
- ・大谷泰照ほか編著（2010）『EUの言語教育政策——日本の外国語教育への示唆』、くろしお出版
- ・桂木隆夫編著（2003）『ことばと共生——言語の多様性と市民社会の課題』、三元社
- ・言語権研究会編（1999）『ことばへの権利——言語権とはなにか』、三元社
- ・小島勇監修・全国ろう児をもつ親の会（2004）『ろう教育と言語権——ろう児の人権救済申立の全容』、明石書店
- ・真田信治・庄司博史編（2005）『事典 日本の多言語社会』、岩波書店
- ・渋谷謙次郎編（2005）『欧州諸国の言語法——欧州統合と多言語主義』三元社
- ・渋谷謙次郎・小島勇編著（2007）『言語権の理論と実践』、三元社

## 言語権・言語法

- ・鈴木敏和（2000）『言語権の構造——英米法圏を中心として』，成文社
- ・徐龍達・遠山 淳・橋内 武編著（2000）『多文化共生社会への展望』，日本評論社。
- ・西原鈴子（2010）「日本の言語政策の転換」，田尻英三・大津由紀雄編『言語政策を問う！』，ひつじ書房，pp. 33～49.
- ・橋内 武（2010）「欧州連合と欧州評議会の言語（教育）政策」，『国際文化論集』，43号．pp. 51～68.
- ・札埜和男（2009）「法廷における方言的ことば」，『社会言語学』IX pp. 213～231.
- ・三浦信孝編（1997）『多言語主義とは何か』，藤原書店
- ・村上直久編（2009）『EU情報事典』，大修館書店
- ・米勢・ハヤシザキ・松岡編（2010）『公開講座 多文化社会論』，ひつじ書房
- ・渡辺修・水野真木子・中村幸子（2010）『実践司法通訳』，現代人文社
- ・Gibbons, John (2003) *Forensic Linguistics: An Introduction to Language in the Justice System*. Oxford: Blackwell.

## 註

- 1) 本稿は文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究「裁判員裁判における言語使用と判断への影響の学融的研究」（研究課題番号21200046，研究代表者 堀田秀吾）の研究成果の一部である。と同時に，去る2011年3月20日に名古屋の金城学院大学で行われた法と言語学会2011年度第3回研究会での報告「言語権と言語法」に基づいている。なお，近刊の橋内 武・堀田秀吾編著（仮称）『法と言語——法言語学へのいざない』（くろしお出版）の「第3部 法と言語と社会」の第12章には，本稿とほぼ同じ内容のものが載る予定であることをお断りしておく。
- 2) 障害者基本法の一部を改正する法律（平成二十三年法律第九十号）の第三条第三項によれば，「全て障害者は，可能な限り，言語（手話を含む）その他の意思疎通のための手段についての選択の機会が確保されるとともに，情報の取得又は利用のための手段についての選択の機会の拡大が図られること。」とある。

## **Language Rights, Legislation about Language: Language Planning Viewpoint**

HASHIUCHI Takeshi

Legislation about language is an important area in language and law research.

One of its concerns is language rights: the rights to use certain languages for public purposes and for one's identity. Such multilingual nations as Belgium, Spain, and Canada clearly state language rights in their constitutions, and define their national and official languages along with the status of the local and minority languages.

However, the Japanese Constitution does not have a single article related to legislation about language. We find in the court law that the language of the law court is Japanese. Thus when at least one party in a legal dispute is unable to understand and to express oneself in the Japanese language, court interpreters have to be provided to resolve the non-communication or miscommunication.

The recently revised fundamental law for the handicapped defines that their language includes sign language of the hearing impaired, so that this minority language has finally gained its proper legal status.

In regard to language rights, the endangered Ainu and Ryukyu languages have been neglected in the Japanese law system, so that their status in the public domain must be reevaluated. And with the increase of the immigrant population, there are plenty of needs for public services in their languages. However, conservative language policy and planning seems still to maintain Japan as a monolingual state. In conclusion, the author stresses the language needs of the growing diversified local community in the 21st century.

# 接尾辞「チック」について

——「CD-毎日新聞」(1991-2005)およびBCCWJを用いて——

村 中 淑 子

## 1 はじめに：本稿の目的

接尾辞「チック」とは、たとえば、ロマンチック (romantic)、エキゾチック (exotic)、ドラマチック (dramatic) のような外来語の一部として日本語に入ってきたものである。

英語の場合、-tic は -ic の異形とされており、「…の、…に関する、…的な」の意の形容詞を作る接尾辞である (ジーニアス英和大辞典)。たとえば上記の romantic, exotic, dramatic においては -tic の形であるが、Platonic や heroic, Arabic などにおいては -ic の形となっている。

日本語の場合、「イック」ではなく「チック」の形が接尾辞として機能しているとみてよいだろう。たとえば、漫画チック、乙女チックといったことは、すでになじみのあるものである。それぞれ、漫画、乙女という名詞に「チック」が接尾辞として付いて、ナ形容詞を形成し、「漫画チックな事件が起きた」「乙女チックな空想に耽る」のように使用される。

本稿では、「○○+チック」の形の造語に注目する。すなわち、ロマンチック・エキゾチックのような、英語における単語がそのまま日本語のナ形容詞として使われるようになったものではなく、漫画チック・乙女チッ

---

\* 本学国際教養学部

キーワード：接尾辞、造語、新聞、BCCWJ、コーパス

クのような、日本語における既成の語に「チック」が後接して新たな形容詞となったものに注目する。外来語由来の接尾辞「チック」の使用状況と造語力について調べたい、というのが目的である。

外来語が日本語に占める割合が増加しつつある、という指摘は頻繁になされている。雑誌や新聞等の語彙を対象とした計量的研究が行われており、外来語語彙使用の経年変化を知ることができる（国立国語研究所1964，国立国語研究所1987，国立国語研究所2005，橋本2010など）。「トラブル」や「メリット」などの単語の使用状況の経年変化に注目した研究もある（金2006a，金2006b，柏野2007，宮田2007，茂木2007，茂木2008等）。

しかしそれらの研究は、語彙レベル、もしくは単語レベルの現象に着目したものである。単語を形作る一部分としての外来語、すなわち、接尾辞・接頭辞などの造語成分レベルの外来語が、日本語の中でどのような位置を占めているか、またその要因は何であるか、などについては、あまり研究が進んでいないとみてよいだろう。

野村1977は「外来語が（中略）造語能力をもつものとして、漢語につぐ存在となりつつある」、野村1984は「外来語は借用の段階をこえて、造語の問題にふかくかかわろうとしている」と述べており、接尾辞・接頭辞などの造語成分レベルの外来語の存在を指摘している。外来語由来の接辞を列挙したものとしては、森岡1985，田辺1990，永田1994，鈴木2008等があり、造語成分の網羅を目指して辞書調査を行った研究に山下2007がある。しかし、外来語由来の接辞を個別的に詳しく扱った研究は見当たらない。

そこで本稿では、語彙レベルもしくは単語レベルの現象だけでなく、造語成分レベルの外来語の、日本語におけるはたらきを詳細に知ることに意義がある、という観点から、対象を「チック」にしぼり、その実態について考察する。前掲の金2006a・金2006bは、抽象的な意味を持つ外来語の中に、日本語の基本語彙の仲間入りをしたものがあること、またその要因は

## 接尾辞「チック」について

言語内的に明らかにすべきことを指摘している。外来語由来の接辞も「抽象的な意味を持つ外来語」に該当するであろうが、「チック」の場合は基本語化していると言えるのかどうか、その点についても検討したい。

次章以下では、2種類のデータを用いて分析を行う。まず2章で15年分の新聞記事データにおける接尾辞「チック」の使用度数、前接要素、接尾辞「チック」によって形成されたナ形容詞が修飾するもの、出現分野、に注目しながら使用状況を明らかにする。次に3章で書きことばコーパス(BCCWJ)における検索結果を検討する。さらに4章ではそれらを比較しながら「チック」の造語力、および日本語における位置づけについて、考察を進めていく。(以下、本稿では、特に断らない限り、「～チック」は接尾辞「チック」が造語成分として機能した結果として作られた語形を表すこととする。)

## 2 「CD-毎日新聞」(1991～2005)による調査と分析

### 2-1 データと検索について

本章で用いたデータは、次のものである。

「CD-毎日新聞」(著作権者：毎日新聞社、発売：日外アソシエーツ)の1991年分から2005年分まで。それぞれ、毎日新聞1年分の東京・大阪本社の朝夕刊最終版の記事をフルテキストで収録したCD-ROMである<sup>1)</sup>。

1年分ずつ、「チック」をキーワードにして検索を行ない、目的以外のものをいちいち取り除いた。著作権の関係で、CD-ROMにおいてはタイトルと掲載年月日しか検索できない記事がいくつかあったが、それらに関しては、縮刷版で該当箇所を探し、内容を確認した。

### 2-2 「～チック」の使用度数の変遷

「CD-毎日新聞」(1991年～2005年)によって「～チック」を検索した

結果を、表1に示す。横軸の「漫画系」「乙女系」「SF系」は、まとまった数の出現があったため、項目として立てたものである。

15年間で39件、1年あたり平均2.6件と低頻度であるが、使われていない年は無く、安定的・継続的な使用が行なわれていると見てよいだろう。

この2点、すなわち、①なぜ頻度が少ないのか、②なぜ安定した使用があるのか、の要因については、後で検討する。

表1：毎日新聞全記事における「～チック」の語形と出現度数の推移  
(2回以上出現した場合は、語形の後ろに回数を示した)

出現年	漫画系	乙女系	SF系	その他	計
1991	漫画チック				1
1992	漫画チック	乙女チック	SFチック 3		5
1993	漫画チック 2				2
1994		乙女チック	SFチック	演歌チック	3
1995	劇画チック				1
1996	少女漫画チック	乙女チック		成金チック	3
1997	漫画チック 2			小説チック	3
1998		少女チック			1
1999	漫画チック 2				2
2000				おもちゃチック 変態チック レトロチック	3
2001	漫画チック	乙女チック		古典チック 劇場チック	4
2002	漫画チック			おばちゃんチック	2
2003		乙女チック		反動チック 絵画チック SMチック	4
2004				映画チック	1
2005	漫画チック 少女漫画チック			絵画チック 2	4
計	14	6	4	15	39

## 接尾辞「チック」について

### 2-3 「チック」の前接要素

表1から前接要素の全般的な傾向をみると、「漫画」「乙女」の2つで約半数を占めており、この2つについては、「漫画チック」「乙女チック」という語がすでにナ形容詞として固定化しているともみえる<sup>2)</sup>。そのほかの前接要素についてはばらばらであり、チックの付いた形が固定化しているとはみえない。「チック」がさまざまな語に付いて、新しく語を作る力をもっていることが伺える。

「漫画系」としてまとめたものの中に「劇画チック」1件「少女漫画チック」2件、「乙女系」としてまとめたものの中に「少女チック」が1件ある。これは、「漫画チック」「乙女チック」の派生的バリエーションと考えられる。このような派生形が生じうる余地があるということは、「チック」の柔軟性を示すものであろう。

「SF」が4件あるが、このうち2件は同一筆者によるものである。「その他」としてまとめたもののうち、複数回出現しているのは「絵画」の3件であるが、これは3件とも、同一筆者による。「～チック」の特定の形を好んで使う筆者がいることを示唆している、とみてよいだろう。

前接要素は全て語であり、句や文がついたものはない。

前接要素の語種をみると、漢語（漫画、演歌、小説、変態、古典、劇場、反動、絵画、映画）、和語（乙女、おもちゃ、おばちゃん）、外来語（レトロ、SF、SM）、混種語（成金）のいずれもみられるが、漢語が特に多いといえよう。

前接要素の品詞はほとんどが名詞であるが、「レトロ」だけは名詞ではなくナ形容詞である。チックを付けなくても「レトロな」というナ形容詞として使えるのに、わざわざ「レトロチック」という形にしている。

前接要素の名詞群には、なにか意味的な共通点があるだろうか。「漫画」「少女漫画」「乙女」「SF」「演歌」「成金」「おばちゃん」などをみると、

ステレオタイプの的に特徴を取り出しやすいもの、と言えそうである。比較的、揶揄の対象として扱われやすいもの、とも言えそうであるが、では、マイナス評価の意味を帯びるものが多いだろうか。「成金」「変態」「おばちゃん」「反動」「SM」はマイナスに傾くものであるといえるだろう。しかしこれはあくまでも前接要素単独でとらえた場合である。チックが付いてできた語が、ある文脈に置かれた場合、どのようなニュアンスを帯びるかについては、次節以降で見ていくことにする。

#### 2-4 「～チック」の品詞性

ここで「～チック」の品詞としての性質を確認する。表1の「～チック」の語形39件について、直後に来る形をみると、次の通りである。「～チック」はナ形容詞であるとみて問題ないだろう。

～チックな [名詞] 21, ～チックに [動詞] 7, ～チックで 5,  
～チックだ 2, その他 4 (～チック過ぎる／と／。／ [名詞])

#### 2-5 「～チック」は何をどのように形容するか

ここでは、ナ形容詞「～チック」が何をどのように形容しているのかを、前接要素ごとにみていく。

##### 2-5-1 「漫画チック」が形容するもの

まず、一番多かった「漫画チック」について。目立つものとしてまず挙げられるのは、映画やテレビ番組等における人物造形への形容に使う例である。

(1) NHK ドラマ「秀吉」の竹中直人のキャラクターが漫画チックともいわれ、評価が大きく分かれた。だが、私は大河ドラマの型にとらわれず竹中秀吉の良さが出たドラマだったと思う。

接尾辞「チック」について

(1997/1/6朝刊, 40歳主婦の投稿)

(2) キャラクターは、かなり漫画チックになっていて、小さい子でも退屈しないだろう。  
(1999/3/12夕刊, 映画「バグズ・ライフ」評)

(3) おまけにブラナー [筆者注<sup>3)</sup>: ケネス・ブラナー] の漫画チックな表現も楽しい。

(1999/12/3夕刊, 映画「ワイルド・ワイルド・ウエスト」評)

(4) ただでさえ漫画チックで派手な囚人服で街を行く三人 [ルー大柴とナインティナイン] に「これでは一時間で捕まってしまって番組にならない」とスタッフを心配させたが (略)

(1993/11/26朝刊, テレビ東京の番組紹介「逃亡者! 東京大捜索」-ルー大柴ら“3容疑者”12時間で捕まるか-)

(4)の例は、「囚人服」を修飾しているともとれるが、「三人」を修飾しているとしたら、ルー大柴とナインティナインの、顔や姿形、身体の動きや顔の表情も含めたようすを「漫画チック」と形容していると考えられ、人々に見せるものとしての自己演出も含めた人物造形の形容であるととれる。

映画・テレビにおける人物ではなくても、知り合いの人物を公の場で説明するための談話において使われている例があった。

(5) 「早川さんのキャラクターの問題もあるが、歩いている人を倒すところを想像できますか? 早川さんは漫画チックなところがあるんですよ」

(1997/9/20朝刊, オウム裁判の記録における端本被告の証言)

さらに、人物ではなく、競馬馬の性質を擬人的に形容した例もあった。

(6) 「漫画チックでお人好し」

(1992/12/26朝刊, 更級四郎『馬ものがたり』の紹介, 名馬グリーングラスについて)

次に挙げるのは、人々の行動の結果生じた状況・事物について、形容し

た例である。

(7) 漫画チックに描く，政府の危機管理

登場する人物設定のおかしさ，おもしろさは抜群だ。(略)個性があふれ魅力的。(略)漫画チックな味わいがあり，ユーモアたっぷり。笑いこぼしてしまう<sup>4)</sup>。(2001/6/11夕刊，落合信彦『騙し人』への批評)

(8) 漫画チック過ぎる弁済金プール

裏金プールに備え，返済金プールというのも漫画チックです。ブラックジョークですか。

(2002/3/19朝刊，投稿欄，77歳無職の人の投稿，外務省の裏金に関して)

(9) 京都では醜悪な京都タワーができ，京都が京都を否定しだした。私たちは京都じゃないんだぞーって。それをもっと高いボリュームで発信したのは京都駅の駅ビル。巨大で，漫画チックで。

(2005/12/9夕刊，アレックス・カー氏へのインタビュー記事)

最後に挙げるのは，絵についての形容の例である。

(10) (略) 学生に自画像風を課題としましたけど，最近の学生は自分を漫画チックに表現するのが実に上手ですね。

(1991/4/26夕刊，彫刻家広井力氏の談話)

(11) 同店では(略)おひなさま手ぬぐいも用意している。男びな，女びな，三人官女，五人ばやしが漫画チックに描かれているだけだが，(略)

(1993/2/16朝刊，記事「にぎやか「ひな祭商戦」皇太子妃決定で追い風に」)

以上をまとめると，「漫画チック」が形容するものは，およそ次の2つであり，プラス評価的な例もマイナス評価的な例もある。

①「大げさ」「表現にメリハリがある」「誰にでもわかりやすい」「滑稽

## 接尾辞「チック」について

味がある」「現実とは思えないおかしさがある」というような、漫画のステレオタイプの特徴をもつ人物・状況・事物を形容する場合

②漫画に似たタイプの絵（単純化、かわいらしさ、滑稽味等の特徴をもつもの）を形容する場合

漫画系としてまとめた「劇画チック」は、映画のカメラワークについて評したもの（1995/12/5夕刊、映画「クイック&デッド」評）、「少女漫画チック」は、初期のレディースコミックを形容したもの（1996/7/16夕刊）と、韓国映画の見せ場（キスシーンなど）を形容したもの（2005/3/25夕刊）であった。これらは、形容される側（映画のカメラワーク、レディースコミック、映画の見せ場）と、形容する側（劇画、少女漫画）が、もともと類似のカテゴリ（視覚的表現芸術）に属するものであるという点で、上記の②と共通している。

### 2-5-2 「乙女チック」が形容するもの

「漫画チック」に次いで多かった「乙女チック」について。典型的な使い方としては、次のような例が挙げられる。

(12) とても優しい先生に私はあこがれていた。(略) 胸のドキドキは心臓病ではなく、あこがれゆえのときめきだと年がいてもなく乙女チックなことを思いめぐらしていた。

(1994/2/11朝刊、「女の気持ち」投稿欄、主婦53歳)

(13) たばこを吸い、酒を飲む豪快さの反面、恋愛ドラマに号泣する乙女チックな役に、小泉は「今までにない役。(略)」

(2003/12/4夕刊、小泉今日子へのインタビュー)

これらの「乙女チック」は、「年若く経験の少ない女性（すなわち乙女）が（恋愛に関して）持っている」と想定されるような、素直な感受性を持つ

ているようす」の形容として使われているとみてよいだろう。

上記の例2つにも、また次の(14)にも言えることであるが、「乙女チック」を人物描写として使う場合は、いかにも「乙女チック」な人物というよりはむしろ、「乙女チック」でない部分がかかなりある人物（上記の例の中の「年がいもなく」や「豪快さの反面」等の表現を参照）について、意外な側面があることを好意的に説明する場合に使われる傾向があるようである。

(14) そんな瀬川さん [瀬川瑛子] が「おしゃれカンケイ」にやって来ました。(略) 過去の恋の話、乙女チックな女子高生のような部屋、一心不乱の応対が温かい。 (1996/9/6夕刊, 腰山一生氏によるテレビ番組評)

ほかの「乙女チック」の例は、人物とは関わりなく、音楽やマンガ等の芸術表現を形容するものであった。

(15) ユーモラスな君平さんの詩のイメージを、若い女性向きに、カラッと明るく、乙女チックな女声合唱組曲に仕上げている。

(1992/4/3朝刊, 「話のポシエツト」という小記事欄)

(16) 『りぼん』で活躍する乙女チック少女マンガのよい意味での後継者 (略) (2001/7/6夕刊, ヤマダトモコ氏によるマンガ・書評)

### 2-5-3 その他の「～チック」が形容するもの

「漫画チック」「乙女チック」以外の「～チック」の例を見わたして、目につく特徴を挙げよう。

「漫画チック」に見られたように、隣接領域の大衆芸術を説明するための形容表現として「～チック」が用いられている例がある。

(17) 奇をてらわぬ落ち着いたロックサウンドに、演歌チックでシンプルなメロディーと歌詞が乗り、一度聞くと忘れられぬ魅力がある。

(1994/2/21夕刊, 音楽評, スターダスト・レビューの曲について)

接尾辞「チック」について

(18) 仲田のかなは、優美な線の流れと絵画チックなイメージが1つの特徴であるが  
(2003/5/22夕刊, 書についての批評)

(19) 彼は、映画チックな甘いピアノ協奏曲「シルク・ロード」を自ら作曲して弾くかと思えば、怒とうのようなモーツァルト「トルコ行進曲」を展開する。(2004/4/5夕刊, クラシック音楽評, ファジル・サイについて)

これらはそれぞれ、ロック音楽を「演歌チック」、書道を「絵画チック」、ピアノ曲を「映画チック」、と表現している。

「～チック」に形容されるものが誰に属するか、という視点から見ると、発信者自身の思考や産物、行動、見た目などを、やや自嘲的に形容する場合に使われる例が散見される。

(20) 思えば子供のころ、「(略)」などというSFチックな思いで、ギャグを飛ばしあったりしたものだ。

(1992/8/15夕刊, コラムニスト小杉なんぎ氏のエッセイ)

(21)=(12) とても優しい先生に私はあこがれていた。(略) 胸のドキドキは心臓病ではなく、あこがれゆえのときめきだと年がいてもなく乙女チックなことを思いめぐらしていた。

(1994/2/11朝刊, 「女の気持ち」投稿欄, 主婦53歳)

(22) 中谷美紀ふんする美しい人妻が(略)サスペンス。「変態チックな愛を見て下さい」と笑う中田監督に聞いた。

(2000/10/23夕刊, 映画「カオス」の監督へのインタビュー)

(23) 東急ハンズでアルミのドカベン弁当箱を購入したり、頭にはアイパーをあてて柳屋ポマードや丹頂チックで整髪するなど、物狂おしいほどレトロチックな生活スタイルを追い求めている。

(2000/11/5朝刊, 日曜くらぶ, 申間努氏)

(24) 地人会が「アンチゴース」30年ぶりの上演, 南果歩・有川博で-東京

で3日から

南 [果歩] はこう語る。「(略) せりふに敬語や比喩が多く、今の人には古典チックに聞こえるかもしれません」 (2001/6/1夕刊)

㉕) 35歳、今がチャレンジどき

「昼のドラマは初めて。これでおばちゃんチックになっちゃうんじゃないかと心配しました (笑い)」(略)「母親役をやっていると、おうちに帰っても、つい腰に手を当てて、おばちゃんらしくなってるの (笑い)」

(2002/6/28夕刊。南野陽子へのインタビュー)

㉔)の「SFチック」は自分の過去の空想について、㉑)の「乙女チック」は医者への自分の思いについて、㉒)の「変態チック」は自分の監督した映画について、㉓)の「レトロチック」は過去の自分の生活について、㉔)の「古典チック」は自分が出演する演劇のせりふについて、㉕)の「おばちゃんチック」はいわゆる昼ドラ (平日午後早い時間帯に放送される主に主婦層向けの帯ドラマ) に出演する自分について、それぞれ形容している表現である。やや自嘲的、あるいは謙遜、というようなニュアンスが感じられる。

以上、2-5 で述べてきたことをまとめると次の通りである。

「～チック」は、前接要素である名詞のステレオタイプの特徴を持った人物造形・状況・事物等の形容に使われる。

「～チック」は、大衆芸術を説明するための形容表現に使われる。なかでも、前接要素と被修飾要素が隣接領域である場合がよくみられる。

「～チック」には、自嘲的、意外さ、揶揄、といったニュアンスが生じやすい。

2-6 「～チック」はどのような新聞記事に出現するか

## 接尾辞「チック」について

「～チック」は、どのような分野・ジャンルの新聞記事に出現しているのか。

繰り返しになるが、本稿で用いたデータは、毎日新聞の東京・大阪本社の朝夕刊最終版の記事のフルテキストを収録したCD-ROMである。つまり、日本のある全国的な一般紙における、全紙面のすべての記事である（中山・桐生・山口2007の用語でいえば、すべての「面種」、すなわち1面・2面・3面・スポーツ・家庭・科学・解説・経済・芸能・国際・社会・社説・総合・特集・読書・文化の16種すべての記事である）。

しかし、前節の例文をみてもわかるように、新聞において「～チック」の出現する箇所は、非常に狭く限定されている。具体的に挙げるならば、本・映画・演劇・テレビ番組・音楽などの紹介記事、エッセイ類、読者の投稿欄、ほのぼのとした楽しい感じの軽めの小記事、インタビュー記事、などである。

ここで「ほのぼのとした軽めの小記事」と呼んでいるのは(1)のことであるが、他にも次のような例がある。

(26) 真新しい札幌ドームは観客席の傾斜が急で、緩やかなカーブを描く天井には照度の高いライトが輝く、モダンな造りだ。巨人・原ヘッドコーチが思わず「劇場チックだなあ」ともらしたほど。こけら落としのゲームも芝居のように展開した。  
(2001/6/27朝刊, プロ野球)

このように、接尾辞「チック」が使われる分野・ジャンルにはかなり強い制限がかかっていると思われる。「面種」よりもさらに狭いカテゴリで考える必要があるだろう。ここでは、その文章の目的から考えてみる。まとめると、次のようになる。

新聞記事の場合、次の(ア)(イ)(ウ)のいずれかの条件にあてはまる文章において、接尾辞「チック」が用いられる可能性がある。

(ア) 情報提供を目的とせず、娯楽提供を目的とした文章。

- (イ) 情報提供を目的とした文章の場合は、大衆的な表現芸術の批評・紹介がテーマとなっている場合。
- (ウ) 文章の目的に関わらず、特定の人物の口頭言語として、カギカッコ等でくくられ、その文言が直接的な形で引用されている場合。

## 2-7 まとめ：15年間の新聞記事における接尾辞「チック」

以上、毎日新聞記事データ（1991～2005）を用いて接尾辞「チック」を調査・分析した。結果をまとめると次の通りである。

- ① 1年間あたり平均2.6件と低頻度である。
- ② 15年の間、途切れず毎年出現し、安定的・継続的な使用がある。
- ③ 前接要素は語である。語種は選ばない。
- ④ 前接要素は通常、名詞である。まれにナ形容詞の場合がある。
- ⑤ ステレオタイプのな特徴を取り出しやすい名詞を前接要素とする傾向がある。
- ⑥ 「漫画チック」「乙女チック」については、ほぼ固定的な形となっている。
- ⑦ 「～チック」の品詞は、ナ形容詞である。
- ⑧ 前接要素である名詞のステレオタイプの特徴を持った人物造形・状況・事物等の形容に使われる。
- ⑨ 大衆芸術を説明するための形容表現に使われる。なかでも、前接要素と被修飾要素が隣接領域である場合が、よくみられる。
- ⑩ 自嘲的、意外さ、揶揄、といったニュアンスが生じやすい。
- ⑪ 書きことばとしては、「娯楽提供を目的とした文章」もしくは「大衆的表現芸術に関する批評・紹介等の情報提供をする文章」において用いられる。
- ⑫ 話しことばをそのまま写した直接引用のなかで用いられる。

### 3 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』による調査と分析

#### 3-1 データと検索について

2章で、15年間の新聞記事における接尾辞「チック」の使用状況を調べ、一定の見通しを得た。

本章では、新聞も含めた現代日本語全般における接尾辞「チック」の使用状況を確認するため、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(略称BCCWJ)を用いる。「中納言」(検索ツール短単位検索 Web アプリケーション)によって検索し、検索結果として出現した語形を、次節で表2として示す<sup>5)</sup>。

BCCWJで「中納言」を用いて検索できるデータは、合計約1億480万語である(2011年3月現在)。新聞・雑誌・書籍・教科書・白書・広報紙<sup>6)</sup>・法律・韻文・国会会議録・Yahoo!知恵袋・Yahoo!ブログの11種のデータから、それぞれ無作為抽出によってサンプルが抜き出されている。11種のデータの発行年、サンプル数、句読点・記号を除いた推定語数は次の通り。

- ・書籍(1971～2005年, 21,943件, 約6,230万語)
- ・雑誌(2001～2005年, 1,989件, 約440万語)
- ・新聞(2001～2005年, 1,479件, 約140万語)
- ・白書(1976～2005年, 1,500件, 約490万語)
- ・教科書(2005～2007年, 412件, 約90万語)
- ・広報紙(2008年, 354件, 約400万語)
- ・Yahoo!知恵袋(2005年, 91,445件, 約1,030万語)
- ・Yahoo!ブログ(2008年, 52,680件, 約1,030万語)
- ・韻文(1980～2005年, 253件, 約20万語)
- ・法律(1976～2005年, 346件, 約100万語)
- ・国会会議録(1976～2005年, 159件, 約510万語)

(<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/> による。

[http://www.ninjal.ac.jp/kotonoha/ex\\_6.html](http://www.ninjal.ac.jp/kotonoha/ex_6.html) も参考にした。)

「～チック」の場合、辞書項目として立てられていない造語を目的として検索するため、「短単位検索」「長単位検索」ではなく、「文字列検索」を行った。「～チック」を網羅的に取り出すために、次のような手順で検索した。まず、サブコーパスごとに分けて検索した。すなわち、「新聞」「雑誌」「白書」「ベストセラー」<sup>7)</sup>「Yahoo! 知恵袋」「Yahoo! ブログ」「法律」「国会会議録」「広報紙」「教科書」「韻文」については、それぞれ文字列「チック」で検索し、結果を「キー」で並べ替えて見やすくした上で該当のものを取り出した。以上のサブコーパスにおいては、「チック」のヒット数は500以下であった。「流通・書籍」「生産・書籍」については、文字列「チック」で検索するとヒット数がそれぞれ790件と620件で、そのうちのランダムな500件しか表示されないため、「スチック」を含むものと「スチックを含まずチックを含むもの」に分けて検索することにより、ヒット数を500件以下にして検索結果全てを表示できるようにし、網羅性を確保した(村中2011で見たとおり「チック」を含む文字列には「プラスチック」が多いためこの方法をとった)。ただし、「流通・書籍」は、「チック」790件、「スチック」426件、「スチックを含まないチック」364件、でズレはなかったが(426+364=790)、「生産・書籍」では「チック」620件、「スチック」302件、「スチックを含まないチック」317件で、1件のズレがあった(302+317=619≠620, 原因不明)。

### 3-2 「～チック」の語形と出現の割合

「中納言」によってBCCWJを検索し、得られた「～チック」の語形を、表2に示す。表2の縦軸はサブコーパスである。「～チック」の出現がゼロだったサブコーパス(新聞・教科書・白書・広報紙・法律・韻文・ベス

## 接尾辞「チック」について

表2：BCCWJにおける「～チック」の語形

(語形のアイウエオ順。2回以上出現した場合は語形の直後に出現回数を記した。計は、延べ数。)

Yahoo! ブログ	アニメチック 2, インスタントチック, 榎園さんチック, お菓子チック, オカマチック, オカルトチック, 乙女チック 4, おまけチック, 喫茶店チック, ギャグチック, ギャルチック, 求肥チック, クワガタポイントチック, 劇画チック, 高級チック, サスペンスチック, サバイバルチック, 首都圏チック, 聖子ちゃんチック, 制服チック, セーラー服とほにやらら編チック, 低音チック, 展望台チック, 天ぷらチック, 箱庭チック, パワブルガールズチック, 変態チック, マンガチック, 漫画チック, ミリタリチック, ミルフィーユチック, メビウスチック, メルヘンチック 6, やらせチック, 夕日チック, リアルチック, レトロチック	計 46
流通・ 書籍	英語チック, オカルトチック, オトメチック 2, 乙女チック 4, 芸術チック, 童画チック, 変態チック, ボルノチック, マンガチック, メルヘンチック 6, 物語チック, 理系チック	計 21
生産・ 雑誌	アジアンチック 3, SFチック, お菓子チック, おしゃれチック, 女のコチック, 歌謡曲チック, サラシモノチック, 少女漫画チック, 南国チック, 姫チック, マンガチック 2, 漫画チック, 水商売チック, 妖艶チック, レトロチック	計 18
生産・ 書籍	SFチック, オカルトチック, 古典チック, 自動車チック 2, 日本の銭湯チック, 廃墟チック, マンガチック 2, メルヘン・チック, メルヘンチック 6	計 16
Yahoo! 知恵袋	アジアンチック, オカルトチック, お嬢様チック, 刈上げチック, カルトチック, 金属チック, 高級チック, コントチック, 哲学チック, 東北弁チック, メルヘンチック 2, 面倒チック, ヤンキーチック	計 14
国会 会議録	スキャンダラスチック, ムネオチック	計 2

トセラ)については、表に示さなかった。

サブコーパスごとの出現度数を見ると、Yahoo! ブログが圧倒的に多く、書籍、雑誌、Yahoo! 知恵袋がおよそ同程度であるようにみえるが、各々のサブコーパスごとの総語数はかなり異なる。そこで、比較のために、接尾辞「チック」出現度数と各サブコーパスのおよその総語数、および、総語数を1000万語として換算した出現率(小数点以下第三位を四捨五入)を示したものが、表3である。「流通・書籍」と「生産・書籍」はまとめて「書籍」とした。また表3には比較のため出現ゼロの「新聞」も示した。

表3をみると、接尾辞「チック」の出現率は、「ブログ」が最も高く、

表3：接尾辞「チック」の出現度数とサブコーパスごとの出現率

サブコーパス	ブログ	書籍	雑誌	知恵袋	国会	新聞
出現度数	46	37	18	14	2	0
総語数（概数）	1030万	6230万	440万	1030万	510万	140万
1000万語あたりの出現率（概数）	44.66	5.94	40.91	13.59	3.92	0

「雑誌」がそれに次ぐ高さである。その約3分の1程度の数で「知恵袋」が続き、「書籍」はさらにその半分以下である。

2章で扱った毎日新聞記事データには、接尾辞「チック」が低頻度ながら15年間毎年出現していたにもかかわらず、BCCWJのサブコーパス「新聞」では出現ゼロとなっているのはなぜか。2章で扱ったデータは15年間の毎日新聞記事フルテキストデータであったが、BCCWJのほうは、サンプリングによって抽出されたデータであり、新聞の全紙面の全記事ではない。また、母集団の大きさもことなる。毎日新聞全記事の、1年分の総語数は、山口2007の図1によれば、およそ3000万語～4000万語である<sup>8)</sup>。15年分であれば、少なく見積もっても4億語を超える。仮に4億語とすると、1000万語に1語の出現割合であれば、4億語の中には40語の出現がある計算になる。2章で見た接尾辞「チック」の出現延べ数は39語であった。つまりこのBCCWJの「新聞」サブコーパスの総語数がもし1000万語であれば、接尾辞「チック」が1回出現してもよいわけであるが（毎日新聞の15年間のデータとBCCWJの「新聞」のデータが等質であると仮定した場合）、実際は「新聞」サブコーパスの語数は約140万語であるので、出現数ゼロはじゅうぶんありうる結果と言えるであろう。

BCCWJのサブコーパスごとのデータ発行年の幅がかなり異なるため、ここでは経年変化はみないこととし、BCCWJを現代日本語のおよその総体を代表するものと見なして、以下、「～チック」の使用状況をみていく。

## 接尾辞「チック」について

### 3-3 「チック」の前接要素

表2のとおり、前接要素のバラエティは、大変ゆたかである。異なり数68、延べ数117である<sup>9)</sup>。

前接要素の異なり数68のうち、語が66とほとんどなのであるが、句も出現している。「日本の銭湯」「セーラー服とほにゃらら編<sup>10)</sup>」の2つであり、「生産・書籍」と「Yahoo! ブログ」にそれぞれ出現している。前者の「生産・書籍」の前分脈・後分脈をみると、対談における発言に含まれるものであった。口語性の強いテキストでは、句に接尾辞「チック」がつくことが許容されていると考えられる。

前接要素の語種は、漢語25・和語15・外来語22・混種語4と、やはり語種に制限はない<sup>11)</sup>。しかし新聞記事データに比べると、外来語の割合が比較的多い<sup>12)</sup>。

前接要素の品詞を見ると、異なり語数66のうち8件までがナ形容詞である（インスタント、スキャンダラス、リアル、レトロ、おしゃれ、高級、面倒、妖艶<sup>13)</sup>。「チック」は、もともとは名詞に後接してナ形容詞を作るためのものだったと考えられ、ナ形容詞に「チック」をつける必要はないはずである。にもかかわらず、わざわざつけるものが1割を超えている。「チック」の持つ性質のうち、ナ形容詞を形成するという文法的機能がはたらかず、それ以外の機能が中心的にはたらくケースが生じてきたと考えられる。

また、前接要素の名詞には、ステレオタイプ的特徴を取り出しやすいものが多い、というのが新聞記事データから得た結論であったが、BCCWJのデータには、「サラシモノ」「やらせ」のような、特徴を取り出すことができる名詞と言うよりは、特徴そのもののような名詞が見られた。形容詞に近い名詞ともいえよう。

前接要素に、固有名詞（有名人の名前：楳図さん、聖子ちゃん、ムネオ

[鈴木宗男])が見られるのも、新聞記事データにはなかった特徴である。特定のイメージが多くの人に共有されている有名人の名前が、前接要素として使われている。

毎日新聞記事データ（1991～2005）には出現しなかったが、BCCWJに多く見られる形として、「メルヘンチック」がある（延べ117件のうち21件）。漫画チックや乙女チックと同様、ナ形容詞としてほぼ固定化した形とみてよいだろう。

### 3-4 「～チック」の品詞性

「～チック」の直後に来る形を分類すると表4の通りである。

「な」「に」「で」および「だ・です」などのコピュラを合わせると104で、やはり「～チック」がナ形容詞であることは動かないようだ。ただ、「無し」（直後に句点や？♪や★などが来て文が終わっているもの）がやや目につく。Yahoo! ブログに多い形で、口語的な用法と思われる。

表4：「～チック」の直後に来る助詞類

	国会 会議録	生産・ 書籍	流通・ 書籍	生産・ 雑誌	Yahoo! 知恵袋	Yahoo! ブログ	計
な	2	11	16	13	7	24	73
に		3	1	2	2	4	12
で		1	2		2	6	11
だ・です等 <sup>14)</sup>				2	2	4	8
の					1	1	2
から		1					1
名詞			2				2
無し				1		7	8
計	2	16	21	18	14	46	117

#### 4 まとめ：「CD-毎日新聞」(1991-2005)と BCCWJ の 検索結果を比較しながら

ここまでみてきたとおり、15年間の毎日新聞全記事データにおける接尾辞「チック」の使用状況と、BCCWJにおける使用状況には、共通点もあるが、相違点も見られる。ここで両者を比較しつつ、「チック」の造語力および日本語における位置づけについて、述べる。

まず、接尾辞「チック」は、造語力のかなりゆたかな接尾辞であると言っ  
てよいだろう。前接要素の形は、表1・表2で示した通り、さまざまなバ  
リエティがある。前接要素の語種は、和語・漢語・外来語・混種語のいず  
れもありうる。毎日新聞記事データと BCCWJ を比べると、後者には、前  
者にはなかった、句に接続した例や固有名詞に接続した例が少数ながらみ  
られることから、接続の可能性が広がりつつあることが示唆される。

新聞記事における日本語が、やや規範的・保守的な用法を保とうとする  
傾向があるとすると、もともとは、ステレオタイプ的な特徴を取り出しや  
すい名詞に接尾辞「チック」が後接してナ形容詞を形成し、そのステレオ  
タイプ的な特徴を有するものの形容に使う、というパターンが基本的であっ  
たと思われる。

いっぽう、BCCWJ が、規範的／非規範的、保守的／進歩的、などさま  
ざまな日本語を含んだ現代日本語の代表であるとする、現在は上記のよ  
うなパターンではないものが増えて、意味用法が広がってきているよう  
である。すなわち、「AチックなB」において、Aのステレオタイプ的な特  
徴を有するBの形容ではなく、ただ単純に、AにBが似ている、あるいは  
Aの有する雰囲気やイメージにBが似ている、あるいはAに関係するもの  
にBが似ている、というようなやや曖昧な形容のしかたが増えていよう  
に思われる。たとえば、次のような例である。

(27) その中枢となるのが Lingo という Director ならではの簡易なスクリプト言語。これまでのプログラム言語と違い、非常に英語チックで理解し易い (LBm0\_00011)<sup>15)</sup>

(28) 海母水はヨカッタ。日本の銭湯チックで。汗蒸幕もいよいよチムチムチルバンの方がまるやかな熱さかな。(PB22\_00257)

(29) 薄暗いドーム型の高架下には、廃墟チックな店や住居が並んでいる。(PB13\_00275)

上記の3例はそれぞれ、「(Lingo は) 英語に似ている」「(韓国の「海母水」は) 日本の銭湯に似ている」「(高架下の店)は 廃墟に似ている」というような意味で使われている。

次の3例は、省略・飛躍のある文で、それを補わないと形容が理解しにくいものである。

(30) かつてニッポンには、そうした心理に強く訴える「自動車チック」なアクセサリーを搭載した少年用スポーツ車が氾濫した時代があった。(PB15\_00302)

(31) お菓子チックなパッケージはバレンタインコレクション。チョコの香りのグロスとシアークリームシャドウで甘い恋到来? (PM41\_00716)

(32) ピンクの♡ラインストーンにラブリーなりボンがついて姫チック。(PM41\_00781)

(30)の「自動車チック」は「(自動車そのものではなく)自動車につけられるアクセサリーに似た」、(31)の「お菓子チック」は「(お菓子そのものではなく)お菓子に使われるパッケージに似た」、(32)の「姫チック」は「(姫そのものではなく)いわゆるお姫さまの着るドレスに似た」あるいは「お姫様にまつわるイメージに似た」というような意味で使われている。

また、3-3でも述べたように、「チック」は名詞に後接してナ形容詞を形成するための接尾辞であると考えられるのだが、BCCWJデータにおい

## 接尾辞「チック」について

では、ナ形容詞に「チック」を後接した語形（例：おしゃれチック、高級チック等）が異なり数で1割を超えていた。これらの語形は、接尾辞「チック」をつけなくてもナ形容詞なのであるから、この場合の接尾辞「チック」のはたらきは、品詞を変えるという文法的機能以外のものである。

接尾辞「チック」の、文法的機能以外の機能として、2つのものが考えられる。まずひとつは、文体表示機能である。

接尾辞「チック」の出現する新聞記事の文章の性質には制限があった。「娯楽提供を目的とした文章」もしくは「大衆的表現芸術に関する批評・紹介等の情報提供をする文章」において用いられていた。そうでない場合は、話しことばをそのまま写した直接引用のなかで用いられていた。また、BCCWJではサブコーパスによって、接尾辞「チック」の出現する割合が異なっていた（ブログ>雑誌>知恵袋>書籍>国会会議録>新聞、白書、広報紙、教科書、法律、韻文）。使われる文章・ジャンルの偏りと、その含まれる文章を読んだときに受ける印象を合わせて考えると、接尾辞「チック」は、口語的・娯乐的・堅苦しさをなくだけた感じ・おどけた感じ等のニュアンスを添えるはたらきをもっており、テキストがそのような文体であることを表示する機能を持っていると考えられる。

接尾辞「チック」の、文法的機能以外のもうひとつの機能は、「言い切り回避機能」とでも呼ぶべきものではないかと考える。「スキャンダラスな」ではなく「スキャンダラスチックな」、「面倒な」ではなく「面倒チックな」、を使うことにより、明確に言い切ることを避ける心理があるのではないだろうか<sup>16)</sup>。

ここまでの議論をまとめると、次の通りである。

- (ア) 接尾辞「チック」の造語力はかなりゆたかである。
- (イ) 前接要素としてとりうるものの可能性が広がりつつある。

(ウ) 意味・用法が広がりつつある。

(エ) ナ形容詞を作り出すという文法的機能以外に、文体表示機能ももつ。また言い切り回避機能が働く場合もある。

## 5 おわりに：今後の課題

外来語由来の接尾辞「チック」について、新聞記事データおよび書きこことばコーパスを用いて調べた。

15年間の毎日新聞全記事データによれば、接尾辞「チック」は、①低頻度ではあるが、②安定的・継続的な使用がみられた。

低頻度の理由は、接尾辞「チック」の文体表示機能が、使うことのできる文脈を強く制限するためと考えられる。いっぽう、安定的・継続的使用の理由は、前接語の自由度が高いために既成の語を使って次々とナ形容詞を作り出すことのできる便利さ、造語力のゆたかさであろう。名詞のみから名詞・ナ形容詞への接続の広がり、および、意味用法の広がり、もあることから考えて、今後ともとうぶんすたれずに使われることが予想される。しかし汎用性の低さから考えて、現在「基本語化」はしていないし、今後ともとうぶん「基本語化」はしそうもないと考えられる。

今回は「チック」の部分がカタカナ表記されているものを調べたが、実際には「おとめちっく」のようなひらがな表記の形もある。また、「チック」のバリエーションとして「ティック」の形もありうる。それらも含めた分析は、別の機会に譲る。

また、今回は15年間の新聞記事データおよびBCCWJを調べたが、さらに長いスパンでの通時的調査、すなわち明治時代からの通時的な調査も必要であろう。もともと-ticの訳語であった「的」や、「ふう」「ぼい」「みたい」などの類義語との比較も行う必要がある。

## 接尾辞「チック」について

### 注

- 1) 学術・研究向け商品（タグ付テキストデータ）「CD-毎日新聞データ集」の入手・使用が困難であったため、大阪市立中央図書館所蔵の一般コンシューマー向け商品「CD-毎日新聞」を使用した。
- 2) 毎日新聞記事データ（1991～2005）においては、「まんがチック」「マンガチック」「おとめチック」「オトメチック」という表記は出現しなかった。
- 3) 新聞データからの例文中で、必要と思われる場合には適宜、[ ] を用いて筆者注を入れる。
- 4) 例文(7)と(8)には、2カ所に「漫画チック」が出現するが、同一記事の中のタイトルと本文に重複して出てくるものなので、表1の作成にあたってはそれぞれ2つではなく1つと数えた。
- 5) 村中2011においては「現代日本語書き言葉均衡コーパス」モニター公開データ（2009年度版）のCD-ROM（略称BCCWJ2009）を用いた結果、接尾辞「チック」が24件検索されている（ひらがな表記の「ちっく」も含むと28件）。本稿で「中納言」を用いて検索したBCCWJは、BCCWJ2009よりもサブコーパスが増え、収録語数が大幅に増えたため、検索結果の出現語形も増加している。
- 6) BCCWJのウェブサイト上では、広報誌／広報紙の両方の表記があったが、本稿では「広報紙」に統一することにする。
- 7) BCCWJの「書籍」はサブコーパス「ベストセラー」「流通・書籍」「生産・書籍」に分けられている。「ベストセラー」は各年のベストセラー20位までに挙げられた書籍、「流通・書籍」は東京都内公共図書館で広く收藏されている書籍、「生産・書籍」は日本国内で発行された当該期間のすべての書籍、からそれぞれサンプリングされたものである。
- 8) 山口2007では語ではなく形態素としているが、およその数としてここに示すことにする。
- 9) 異なり数においては「漫画／マンガ」「乙女／オトメ」のように表記のみ異なる場合もまとめて一語として数えた。メルヘン・チックとメルヘンチックについても異なり数においては一語としてまとめた。
- 10) Yahoo! ブログにおける出典の文をみると、「セーラー服とほにゃらら編チックに撮影してみましたが萌えましたかあ～???」（原文ママ）となっている。

る。「セーラー服と機関銃」という映画に似たイメージで撮影をした、というような意味であろう。

- 11) 語種の判断は主に『新潮現代国語辞典第2版』によった。日本人名(固有名詞)は和語とした。
- 12) これは「CD-毎日新聞」の検索システムがカタカナ連続を検出しにくいために、新聞記事データにおける「チック」の前接要素の語種として外来語が少ないという結果が出た可能性もある。
- 13) ここでは、確実にナ形容詞であると判断できるもののみを挙げた。ほかに、オカルト、カルト、メルヘン、ヤンキー、理系、お嬢様、などもナ形容詞として使われる可能性がありそうだが、標準的ではないと判断した。
- 14) 「だ・です等」の中に、「なのは」「なんだけど」「なんでしょう」「やねん」も含めている。
- 15) 以下、BCCWJの例文は、末尾にサンプルIDを付して示す。
- 16) 「明確な言い切りを避ける」機能を持つという点で、「チック」は「的」と共通する。

#### 参 考 文 献

- 柏野和佳子(2007)「「外来語」言い換え提案対象語の頻度推移類型—読売新聞・毎日新聞14年分を調査して—」『公共媒体の外来語—「外来語」言い換え提案を支える調査研究—』国立国語研究所報告126
- 金愛蘭(2006a)「外来語「トラブル」の基本語化—20世紀後半の新聞記事における—」『日本語の研究』2-2
- 金愛蘭(2006b)「新聞の基本外来語「ケース」の意味・用法—類義語「事例」「例」「場合」との比較—」『計量国語学』25-5
- 国立国語研究所(1964)『現代雑誌九十種の用字用語 第三分冊 分析編』国立国語研究所報告25, 秀英出版
- 国立国語研究所(1987)『雑誌用語の変遷』秀英出版
- 国立国語研究所(2005)『現代雑誌の語彙調査—1994年発行70誌』国立国語研究所報告121
- 小西友七・南出康世編集主幹(2001)『ジーニアス英和大辞典』大修館書店
- 鈴木俊二(2008)「和製英語の研究—その構造と思想」『国際短期大学紀要』23

## 接尾辞「チック」について

- 田辺洋二（1990）「和製英語の形態分類」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2
- 永田高志（1994）「和製外来語の複合語」『近畿大学文芸学部論集 文学・芸術・文化』6-1
- 中山恵利子・桐生りか・山口昌也（2007）「新聞に見る基幹外来語」『公共媒体の外来語－「外来語」言い換え提案を支える調査研究－』国立国語研究所報告126
- 野村雅昭（1977）「造語法」『岩波講座日本語9』岩波書店
- 野村雅昭（1984）「語種と造語力」『日本語学』3-9
- 橋本和佳（2010）『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房
- 宮田公治（2007）「外来語「メリット」とその類義語の意味比較－新聞を資料として－」『公共媒体の外来語－「外来語」言い換え提案を支える調査研究－』国立国語研究所報告126
- 村中淑子（2011）「外来語由来の造語成分「チック」について」特定領域研究「日本語コーパス」平成22年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集
- 茂木俊伸（2007）「国会会議録を用いた外来語の分析－「イノベーション」を例として－」『公共媒体の外来語－「外来語」言い換え提案を支える調査研究－』国立国語研究所報告126
- 茂木俊伸（2008）「国会会議録における行政分野の外来語」松田謙次郎（編）『国会会議録を使った日本語研究』ひつじ書房
- 森岡健二（1985）「外来語の派生語彙」『日本語学』4-9
- 山口昌也（2007）「新聞記事における語彙の時間的変化分析－語種との関係を中心に－」『公共媒体の外来語－「外来語」言い換え提案を支える調査研究－』国立国語研究所報告126
- 山下喜代（2007）「現代日本語の語構成要素－外来語を中心にして－」『青山学院大学文学部紀要』48
- 山田俊雄・築島裕・白藤禮幸・奥田勳編（2010）『新潮 現代国語辞典 第二版』（第2刷）新潮社

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（略称 BCCWJ）検索ツール  
短単位検索 Web アプリケーション「中納言」

URL : <https://chunagon.ninjal.ac.jp/search>

『CD-毎日新聞』（1991～2005）日外アソシエーツ

『毎日新聞 縮刷版』毎日新聞社

## Japanese Suffix *chikku* Derived from English “-tic” : Investigation Using Two Kinds of Data

MURANAKA Toshiko

The Japanese suffix *chikku*, of English origin, is examined using two kinds of data. The Japanese suffix *chikku* corresponds to the English suffix *-tic*. For example, in the word *mangachikku*, *chikku* attaches to *manga* (comics), and *mangachikku* becomes a *Na*-adjective, meaning “seemingly comic-like”. It is the purpose of this paper to investigate the use situation and the power which makes a new word from the Japanese suffix *chikku*.

Data1: CD–Mainichi Shinbun 1991–2005 (CD-ROM in which all the articles in Mainichi Newspapers were recorded with the full text.)

Data2: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ), created by the National Institute for Japanese Language and Linguistics.

BCCWJ is a corpus of a total of about 104,800,000 words, and the sample was extracted by random sampling, from 11 sorts of data: newspapers, magazines, books, textbooks, white papers, public information papers, texts of the law, verse, the Parliament minutes, Yahoo! wisdom, and Yahoo! blog.

As a result, the following things became clear. The suffix *chikku* is of low frequency. However, for 15 years, it did not disappear, but appeared every year, and stable and continuous use was seen. It is thought that the reason for the low frequency is that the style display function of the suffix *chikku* is to restrict strongly the context which can be used. On the other hand, it is thought that the reason for stable and continuous use is that the flexibility of the word placed immediately before *chikku* is high. That is, one new *Na*-adjective after another can be made by suffixing *chikku* to an established word. Any word

of Japanese origin, a Chinese word, a foreign word, or a hybrid word may be sufficient as the element attached before *chikku*.

Although *chikku* has become a suffix placed behind a noun and to form a Na-adjective, in the data in 2, there are some word forms (e.g., *osharechikku* (fashionable), *koukyuuchikku* (seemingly high rank), etc.) which placed *chikku* behind a Na-adjective instead of a noun, over ten percent by number. Furthermore, if the data in 1 are compared with the data in 2, since examples linked to a phrase instead of a word and examples linked to a proper noun instead of a general noun are seen in the latter but not in the former, it will be suggested that the possibility of connection is increasing.

〔翻 訳〕

# ババッド・タナ・ジャウイ (1)

第1部 ババッド・パジャジャラン

深 見 純 生

## 訳 者 序 言

本稿はいわゆるメインスマ Meinsma 版『ババッド・タナ・ジャウイ *Babad Tanah Jawi* (ジャワ国縁起)』の冒頭部分の翻訳である。ローマ字化されたジャワ語原文〔Ras 1987a〕からの翻訳であるが、随時オルトフ W. L. Olthof によるオランダ語訳〔Ras 1987b〕を参照している。刊行された『ババッド・タナ・ジャウイ』ではいわゆるバライプスタカ Balai Pustaka 版がもっとも真正性が高いとされる。しかしこれはジャワ文字ジャワ語の韻文であるため、現在の訳者の能力をこえているので、国際的にもっともよく利用される、散文であるメインスマ版を訳出することとした。

訳文は原文に忠実な逐語訳とはせず、読みやすさを重視した。ただし文の順序を入れ換えるほどの改変はしていない。結果的に段落の区切りをジャワ語原文よりもオランダ語訳に従った場合が多いが、どちらにも従っていない場合もある。訳注は最小限に留めた。

ジャワ語の辞書では Pigeaud 1938 の全面増補版である Albada 2007 が不

---

\* 本学国際教養学部

キーワード：ババッド, ババッド・タナ・ジャウイ, マタラム,  
パジャジャラン

可欠であり、この辞書なくしてはどうも読めなかったであろう。またガジャマダ大学文化学部のスハルトノ Suhartono 教授にご教示いただいた部分もある。

本稿は桃山学院大学2008年度特別研修の研究成果の一部である。

## 解 題

### 1. 『ババッド・タナ・ジャウイ』

ババッド babad はイスラム時代のジャワにおける史伝のことである。英語では history あるいは chronicle の語があてられる [Robson 2002: 62]。特定の歴史的出来事や個人の伝記のこともあるが、王国あるいは王家の史伝にババッドを称するものが多い。ババッドの語に「(森を) 開く」の意味もあり、史伝の作成と国を建てることの間にある不可分の関係を示唆するとされる。ただし王国や王家の史伝がすべてババッドを称するわけではなく、スラット Serat やスジャラ Sejarah などと称するものもある。

ババッド作成の起源ははっきりしないが、17世紀前半には祖型と見なしうるものが存在したといわれ、アラブなど外来の歴史伝統の受容によるものではなく、『パララトン Pararaton』<sup>1)</sup> などジャワの文化伝統に根ざすものと考えられている。

メインスマ版など少数の例外を除いて韻文である。もともと宮廷詩人が朗詠するものであり、王と王家の正統性を謳う機能をもつものであった。18～19世紀のジャワとその周辺でそれが書き留められ、書き継がれた。現存する写本は古くて18世紀のものである。

ババッドの内容は大きく二層に分かれる。第一は神話伝説である。預言者アダムに始まり、インドの神々やジャワの開闢へと続くこともめずらしくない。神々、精霊、悪魔、武人たちの伝説に満ちている。イスラム時代以前の諸王国が語られることも多い。その内容は近代的な歴史学の成果と

あまり接点を持たないが、ジャワがおかれていた一般的な事情について、またババッドが語られた当時の歴史観や世界観を知る手がかりとしては重要である。

第二は17世紀以後の歴史的出来事である。特定の王、王国、英雄、あるいは一連の出来事を中心とする語りである。歴史研究者は他の諸史料（とくにオランダ語の文書）と突き合わせることで、これらの史料としての有効性を証明してきた。たとえば、1740年代の動乱の時代について我々は Remmelink 1994; Ricklefs 1998; Aminuddin 2003 というすぐれた3つの研究を持っている。こうした研究において、他の諸史料と同じく、ババッド類が作成された社会的、文化的、また政治的な背景への十分な配慮が必要なことは言うまでもない。なかでも Ricklefs 1998 は文化的背景に重点を置いた研究である〔深見 2003a 参照〕。

1570年代に興った<sup>2)</sup> マタラム王国の史伝である『ババッド・タナ・ジャウイ』は、まさにこの二層からなり、預言者アダムから18世紀の出来事までが語られている。今回翻訳したのは第一層に属する部分であり、全124章のうちの、ババッド・パジャジャラン Babad Pajajaran として括られることのある最初の4章である。

メインスマ版の原文には一見してわかるような明瞭な区切りは存在せず、したがって章のタイトルも存在しない（図1参照）。バライプスタカ版でも本文自体には韻律の変わり目以外の区切りはみられず、章のタイトルも存在しない。全124章に区切り、各々にタイトルをつけたのはバライプスタカ版の編集者である。ラスがメインスマ版の第5版の刊行（1987年）の際に、124章との対応関係を示しており〔Ras 1987b: LV-LXIII〕、本稿はこれに従っている。なお、このことからわかるように、メインスマ版とバライプスタカ版は、『ババッド・タナ・ジャウイ』の多数存在するバージョンのなかで、同一系統のテキストに属する。この系統は大ババッド Grote

図1 メインスマ版（ローマ字版）冒頭部分 [Ras 1987a: 7]

書名も章立てもなく本文で始まる。

Poenika sedjarahipoen para ratoe ing tanah Djawi, wiwit saking nabi Adam, apepoetra Sis. Esis apepoetra Noertjahja. Noertjahja apepoetra Noerasa. Noerasa apepoetra sanghyang Wening. Sanghyang Wening apepoetra sanghyang Toenggal. Sanghyang Toenggal apepoetra bałara Goeroe. Bałara Goeroe apepoetra gangsal, anama bałara Sambo, bałara Brama, bałara Maha-Déwa, bałara Wisnoe, dèwi Sri. Bałara Wisnoe waoe djoemeneng ratoe wonten ing poelo Djawi, adjedjoeloek praboe Sèt. Kadatonipoen bałara Goeroe anama ing Soera-Laja.

Bałara Goeroe waoe kagoengan sengkeran poetri ajoe ing negari Mendang. Karsanipoen, badé kainggahaken ing swarga sarta kada-

Babad (Major Babad) と通称される [Ras 1987b: XIV-XIX]。

『ババッド・タナ・ジャウイ』の全体の構成などについての解説は今後順次取り上げるが、今回の冒頭の4章をババッド・バジャジャランとして括したのは、ラスによれば、ブランデス J. L. A. Brandes [1920: 205-206] であり、ジャワの伝統に従うものであった [Ras 1987b: XXVII-XXVIII]。ブランデスおよびラスによれば、バジャジャラン王国の滅亡までを扱うババッド・バジャジャランや、これに続くババッド・マジャパイト Majapait, ババッド・ドゥマック Demak, ババッド・バジャン Pajang などのタイトルは、書名として扱うのが可能であるが、本来は書物のタイトルというより、内容あるいは時代を大まかに示す標目である。

なお、バジャジャランは、現在一般的なジャワ（あるいはインドネシア）

ババッド・タナ・ジャウイ (1)

の歴史叙述においてマジヤパイトと並立する西部ジャワの王国であるが、『ババッド・タナ・ジャウイ』ではマジヤパイトに先行する王国とされている。

注

- 1) パララトンについては深見訳 2003c, 2003d, 2003e 参照。この拙訳に際して英訳の存在を知らなかったが、じつは新発見写本に基づく英訳 Phalgunadi 1996 がある。
- 2) マタラム王国の建国年次については諸説あるが、1578年説が有力である〔深見 2011〕。

参 考 文 献

- Albada, Rob van en Th. Pigeaud 2007 *Javaans-Nederlands Woordenboek*, KITLV Uitgeverij, Leiden.
- Aminuddin Kasdi 2003: *Perlawanan Penguasa Madura atas Hegemoni Jawa: Relasi Pusat-Daerah pada Periode Akhir Mataram (1726-1745)*, Yogyakarta.
- Brandes, J. L. A. 1920: *Pararaton (Ken Arok) of het Boek der Koningen van Tumapel en van Majapahit*, 's-Gravenhage/Batavia (VBG 62).
- ENI *Encyclopaedie van Nederlandsh Oost-Indië*, 8 Vols., Martinus Nijhoff & Brill, 1917-1939.
- Phalgunadi, I Gusti Putu 1996: *The Pararaton: A Study of the Southeast Asian Chronicle*, Sundeep, New Delhi.
- Pigeaud, Th. 1938: *Javaans-Nederlands Handwoordenboek*, Groningen & Batavia.
- Ras, J. J. ed. 1987a: *Babad Tanah Jawi: De prozaversie van Ngabehi Kertapradja voor het eerst uitgegeven door J. J. Meinsma en getranscribeerd door W. L. Olthof*, Foris.
- Ras, J. J. ed. 1987b: *Babad Tanah Jawi: Javaanse rijkskroniek: W. L. Olthofs vertaling van de prozaversie van J. J. Meinsma lopenden tot het jaar 1721*, Foris.
- Rommelink, W. 1994: *The Chinese War and the Collapse of the Javanese State, 1725-1743*, Leiden.
- Ricklefs, M. C. 1988: “Babad”, *Encyclopedia of Asian History*, New York and London, I: 119.
- Ricklefs, M. C. 1998: *The Seen and Unseen Worlds in Java 1726-1749: History*,

*Literature and Islam in the Court of Pakubuwana II*, Honolulu.

Robson, Stuart and Singih Wibisono 2002: *Javanese English Dictionary*, Hong Kong.

柴田紀男 1991 「ババッド」土屋健治・加藤剛・深見純生編『インドネシアの事典』同朋舎：340.

深見純生 2003a 「近世ジャワ宮廷の文化世界」『岩波講座東南アジア史 別巻 東南アジア史研究案内』岩波書店：63-67.

深見純生 2003b 「18世紀ジャワ史に関する若干の研究と史料」未刊（見えない  
科研報告2003年12月20日

<http://www.h6.dion.ne.jp/~kawan/mienai/20031220FUKAMI-rep.htm>

深見純生訳 2003c 「ケン・アンロク伝」『国際文化論集』（桃山学院大学）27：  
83-104.

深見純生訳 2003d 「シンガサリ諸王伝」『国際文化論集』（桃山学院大学）28：  
109-127.

深見純生訳 2003e 「マジヤパヒト諸王伝」『国際文化論集』（桃山学院大学）29：  
305-324.

深見純生 2011 「マタラムの建国年次について」『国際文化論集』（桃山学院大  
学）44：29-48.

#### 凡例

1. 固有名詞などの初出にローマ字綴りを入れた。原文は旧綴りであるが、訳文では現在のジャワ語の綴り字法に従った。ただし、特殊記号を用いないこととしたため、eの3種類の音の違いは表現されない。
2. 2単語をハイフンで結んである固有名詞のカタカナ表記は、現在のインドネシアにおける慣用に従い、「・」を使わず1単語として扱う（例：ギリ  
ンウシ Giling-Wesi）。ただし、あまりに長くなる場合（おおむね5音節ま  
たはカタカナ7文字以上）は「・」を用いた。
3. 語末が開音節のaの場合、現在のジャワ語ではオと発音されるが、訳文で  
はアのままとした。煩雑と誤りを避けるためである。
4. [ ] は訳者による簡単な注記である。

# ババッド・タナ・ジャウイ

## 第1部 ババッド・パジャジャラン

深見純生

### 目次

1. アダムから神々までの系譜
2. ギリンウシのプラブ・ワトゥグヌン
3. バタラ・ウイスヌとバタラ・ブラマからパジャジャラン王国までのジャワの諸王の系譜
4. シユン・ワナラの運命

### 1. アダムから神々までの系譜

これはジャワの国の王たちの歴史であり、預言者アダム Adam に始まり、〔アダムに〕息子シス Sis がいた。シスに息子ヌルチャフヤ Nurcahya がいた。ヌルチャフヤに息子ヌラサ Nurasa がいた。ヌラサに息子サンヒャン・ウエニン sanghyang Wening がいた。サンヒャン・ウエニンに息子サンヒャン・トゥンガル sanghyang Tunggal がいた。サンヒャン・トゥンガルに息子バタラ・グル bathara Guru がいた。バタラ・グルに5人の子がいて、バタラ・サンボ bathara Sambo, バタラ・ブラマ bathara Brama, バタラ・マハデワ bathara Maha-Dewa, バタラ・ウイスヌ bathara Wisnu, デウイ・スリ dewi Sri といった。バタラ・ウイスヌはジャワ島に君臨し、プラブ・セット prabu Set と称した。バタラ・グルの王宮の名前はスララヤ Sura-Laya といった。

バタラ・グルは、ムンダン Mendhang 国の美しい王女を閉居させていた。

天国へともない、妃にするつもりであった。たまたま旅をしていたバタラ・ウイスヌが、ムンダンの王女を見て恋におちた。父親により閉居させられているとは知らずに妻にした。これはバタラ・ゲルを激怒させた。サンヒヤン・ナラダ sanghyang Narada が遣わされ、この怒りをバタラ・ウイスヌに落とし、王の地位から追い払った。こうしてバタラ・ウイスヌは都から退去し、森に入り7本のワリングン樹の下で苦行をした。妃のムンダンの王女は後に残された。

## 2. ギリンウシのプラブ・ワトゥグヌン

さてギリンウシ Giling-Wesi 国のこと。ワトゥグヌン Watu-Gunung と称する王が治めていた。2人の妃がいて、1人目をデウィ・シンタ dewi Sinta といい、2人目をデウィ・ランドウップ dewi Landep といった。27人の子がいて、みなそろって息子であり、名前をウキル Wukir, クランティル Kurantil, トル Tolu, グンブレッグ Gumbreg, ワリガリット Warigalit, ワリガダン Warigagung, ジュルンワンギ Julung-Wangi, スンサン Sungsang, ガルンガン Galungan, クニンガン Kuningan, ランキル Langkir, マンダシヤ Mandha-Siya, ジュルン・プジュット Julung-Pujut, パハン Pahang, クル・ウェルット Kuru-Welut, マラケ Marakeh, タンビル Tambir, マダンクンガン Madhangkungan, マクタル Maktal, プエ Puye, ムナヒル Menahil, プラン・バカット Prang-Bakat, バラ Bala, ウグ Wugu, ワヤン Wayang, クラウ Kulawu, ドクット Dhukut といった。すべてデウィ・シンタの子であった。

そのときギリンウシの国は疫病の猖獗に見舞われた。おおぜいの小さき者が倒れ、飢えが広がった。日食や月食がしきりにおこった。季節外れの雨が降り、1日に7度も地震があった。このすべては、ギリンウシの国の滅亡の前兆であった。

プラブ・ワトゥグヌンは国民が倒れていくのを見てとても心を痛めた。王は象牙の寝床に横たわり、妃デウイ・シンタは髪の毛を取って、王の頭の傷跡を見つけると、そのわけを尋ねた。王はこうこたえた。まだ子どものときのこと、母親がご飯を冷ましている時にうるさくねだったので、しゃもじで血が流れるほど叩かれた。こうして家をさまよい出た。

デウイ・シンタは王の言葉を聞いて衝撃のあまり、ものが言えなかった。しゃもじで叩かれて出ていったきり戻ってこない息子のことを思い出していた。王の話と同じだった。実の子の妻にされたことに悲嘆にくれ、王から自由になる手だてを求めて考えこんだ。

すっかり黙りこんでしまい、そのわけを訊かれたデウイ・シンタはこたえた。黙っていた間ずっと、王様の高貴さの完全なことを思っていました。ひとつだけ欠けるものがございます。この足りないものは、王様がまだスララヤの天女と結婚なさっていないこととございます。デウイ・シンタの思惑はこうだった。王がスララヤの天女に求婚したなら、きっと戦争が起り王は死に至るだろう。これが夫から自由になる道である。

プラブ・ワトゥグヌンはこのように聞かされるや、スララヤに昇り天女に求婚することにした。ただちに重臣たちと27人の息子たちに兵を集めるよう命じ、王はスララヤをめざして出立した。

バタラ・グルは、ギリンウシの王がスララヤに昇ってくると聞くと、神々を呼び集めた。そしてプラブ・ワトゥグヌンにあえて立ち向かう者はいないか尋ねた。みな一様に尻ごみした。そこでサンヒャン・ナラダがバタラ・グルに、ご息子のバタラ・ウイスヌを呼び出し、もしギリンウシの王に打ち勝つことができたなら、すべての罪を赦すと約束されますよう、なにしろ、プラブ・ワトゥグヌンに立ち向かうことができるのはバタラ・ウイスヌを置いていないのですからと言上した。

バタラ・グルはこれを許した。そこでサンヒャン・ナラダは、バタラ・

ウイスヌを捜そうとスララヤから降りていった。

サンヒャン・ナラダは、7本のワリングンの下で苦行しているバタラ・ウイスヌに会うと、先述のようなバタラ・グルの命令を伝えた。

バタラ・ウイスヌはギリンウシの王を撃退すると約束したが、その前に家に戻り妻に別れを告げる許しを求めた。サンヒャン・ナラダは7本のワリングンの下で待つよう言われた。

こうしてバタラ・ウイスヌはそこを去って妻を捜しにいった。かつてあとに残されたとき、彼女は身ごもっていた。バタラ・ウイスヌはうまれたのが男の子ならスリガティ Srigati と名づけるよう命じていた。男の子がうまれると、この子に夫の指示どおりの名前をつけた。時をへて成人すると、容貌秀麗であった。

さてそこにバタラ・ウイスヌが妻と子に会いにきた。バタラ・グルに命じられてスララヤに昇り、ギリンウシの王に立ち向かうと妻に伝えた。息子は一緒に行きたがったが、バタラ・ウイスヌは許さなかった。妻に別れを告げると立ち去り、7本のワリングンの下でサンヒャン・ナラダに会った。

残されたラデン・スリガティは父の後を追った。7本のワリングンにいくると、父の後ろに座った。サンヒャン・ナラダは、これがバタラ・ウイスヌの息子であり、スララヤについて行くつもりであるとわかると、バタラ・ウイスヌに息子を連れて行かないよう助言した。それはきっとバタラ・グルの逆鱗に触れるだろう。

息子は家に戻るよう命じられた。サンヒャン・ナラダはバタラ・ウイスヌとともにいそいでスララヤへ向かい、ラデン・スリガティは7本のワリングンの下に残された。

サンヒャン・ナラダとバタラ・ウイスヌはスララヤに着いた。ともにバタラ・グルに伺候し、楽しく語らっていると、まもなく残してきたスリガ

ティが父の後を追って、神々の住処に至り、父の後ろに座った。バタラ・グルは見目麗しい若者がバタラ・ウイスヌの後ろに座っているのを見ると、それが何者かサンヒャン・ナラダに尋ねた。

ナラダは、バタラ・ウイスヌがムンダンの王女との間にもうけた息子だと伝えた。バタラ・グルはこの言葉を聞くと激怒し、謁見場から立ち宮廷の中に入ってしまった。ナラダは、バタラ・グルが怒っていると知って、後を追った。

バタラ・グルはサンヒャン・ナラダに、バタラ・ウイスヌの息子に死を命じ天国への捧げ物にせよ、あわせてバタラ・ウイスヌにただちに敵への進撃を下命せよと命じた。

バタラ・ウイスヌはこの命令を受けると、息子に死が命じられるのなら、敵に立ち向かう気はないと答えた。サンヒャン・ナラダはバタラ・グルに、バタラ・ウイスヌの答えがどんなものかを伝えた。そのとき外で騒ぎが起こり、「敵が来た！」と叫びがあがった。バタラ・グルは恐れおののき、サンヒャン・ナラダに何とかするよう求めた。

サンヒャン・ナラダは、もしスリガティを殺したいという願いをお捨てにならないなら、バタラ・ウイスヌは戦いに立つのを拒み、スララヤの陥落は必定でございませと申し上げた。バタラ・グルはサンヒャン・ナラダの助言に従い、スリガティを殺すことを思いとどまり、そしてバタラ・ウイスヌに敵に立ち向かうよう命じた。

バタラ・ウイスヌは息子とともに、ギリンウシの王と対戦するために神々の住処を去った。プラブ・ワトゥグヌンと対面すると、王はバタラ・ウイスヌに、戦いを交えるまでもないのではと申しでた。もし謎を解くことができたら自分の負けで、喜んで殺されよう。しかし解くことができなかつたら、スララヤの神々はすべて降伏し、天女はみな引き渡され、我が妻となる。

バタラ・ウイスヌはこの申しでに同意した。そこで王は謎を口にした。  
「小さい植物で大きな実は何か、大きい植物で小さい実は何か」

この謎にバタラ・ウイスヌは答えた。「小さい植物で大きな実、それは西瓜である。大きい植物で小さい実はワリンギンである」

王は謎が解かれたとわかって一言も発せなかった。バタラ・ウイスヌのチャクラ cakra [円形の武器] によって首を刎ねられた。王の軍勢はみな慌てて散り散りに退いた。

プラブ・ワトゥグヌンが死ぬとデウィ・シンタは号泣し、その轟音はスララヤにまで響き、神々を不安に陥れた。バタラ・グルはサンヒャン・ナラダにこの轟音の原因を訊ねた。サンヒャン・ナラダは、プラブ・ワトゥグヌンの死を悲しむデウィ・シンタの泣き声からこの轟音が生じると答えた。バタラ・グルはサンヒャン・ナラダに、デウィ・シンタのところに降りて泣くのをやめさせよ、3日以内にプラブ・ワトゥグヌンを生き返らせ、下界に下ろして再びギリンウシの王にすると約束せよと命じた。

サンヒャン・ナラダはバタラ・グルの言葉をデウィ・シンタに伝えた。デウィ・シンタは泣くのをやめ、たちまち大轟音は鎮まった。3日が過ぎプラブ・ワトゥグヌンがまだ戻らないのでデウィ・シンタは再び泣き始め、轟音を響かせた。前回はしのぐ激しさだった。

バタラ・グルは再びサンヒャン・ナラダに、轟音のわけを訊ねた。サンヒャン・ナラダは、この轟音を起こしているのはまたもデウィ・シンタで、3日の期限が過ぎたのに、プラブ・ワトゥグヌンがまだギリンウシの国に戻らないからだと答えた。バタラ・グルはサンヒャン・ナラダに、プラブ・ワトゥグヌンを生き返らせてギリンウシの国に戻らせるよう命じた。

プラブ・ワトゥグヌンがサンヒャン・ナラダによって生き返り、ギリンウシの国に戻るよう命じられると、天国が気に入ってしまったので、それを望まなかった。2人の妻と子をみな天国の自分のもとに呼び寄せてほし

いと懇願した。バタラ・グルはこの乞いを許し、妻と子をみな天国に来させるよう命じた。日曜日ごとに1人ずつ受け入れられた。これが30のウク wuku<sup>1)</sup>の始まりである。

### 3. バタラ・ウイスヌとバタラ・ブラマからパジャジャラン王国までのジャワの諸王の系譜

サンヒャン・ナラダのバタラ・グルへの進言によって、バタラ・ウイスヌはマルチャパダ Marcapada〔地上〕に降ろされ、精霊の王となって8つの場所を支配した。ムラピ Merapi 山、パマンティンガン Pamantingan, カバレヤン Kabareyan, ロダヤ Lo-Daya, クウ Kuwu, ウリンギン・ピトゥ Wringin-Pitu, カユ・ランデヤン Kayu-Landheyan, ロバン Roban である。

バタラ・ブラマはマルチャパダに降ろされ、ギリノウシの国で王となり、プラブ・ワトゥグヌンを継いだ。ジャワの島は服従した。やがてバタラ・ブラマは娘をえて、ブラマニ Bramani と名づけた。ブラマニに息子トリ・トルスタ Tri-Trustha がいた。トリ・トルスタに息子パリクナン Pari-Kenan がいた。パリクナンに息子マヌ・マナサ Manu-Manasa がいた。マヌ・マナサに息子サクトルム Sakutrem がいた。サクトルムに息子サクリ Sakri がいた。サクリに息子パラサラ Pala-Sara がいた。パラサラに息子、隠者アビヤサ Abi-Yasa がいた。隠者アビヤサに息子パンドゥ・デワナタ Pandhu Dewa-Nata がいて、アステイナ Astina で王であった。パンドゥ・デワナタに息子アルジュナ Arjuna がいた。アルジュナに息子アビマニュ Abi-Manyu がいた。アビマニュは戦場に没し、臨月の妻がいた。息子が生まれ、パリクシット Pari-Kesit と名づけられ、やはりアステイナの国で王になった。プラブ・パリクシットに息子ユダヤナ Yuda-Yana がいた。ユダヤナに息子グンドラヤナ Gendra-Yana がいた。グンドラヤナに息子ジャヤバヤ Jaya-Baya がいた。そのあと王国は消滅した。

クデイリ Kedhiri のジャヤバヤに息子ジャヤ・ミジャヤ Jaya-Mijaya がいた。ジャヤ・ミジャヤに息子ジャヤ・ミセナ Jaya-Misena がいた。ジャヤ・ミセナに息子クスマ・ウィチトラ Kusuma-Wicitra がいた。クスマ・ウィチトラに息子チトラソマ Citra-Soma がいた。チトラソマに息子パンチャ・ドリヤ Panca-Driya がいた。パンチャ・ドリヤに息子アンリン・ドリヤ Angling-Driya がいた。アンリン・ドリヤに息子プラブ・サウエラ・チャラ Sawela-Cala がいて、ジャワの国に君臨した。その都はブルワチャリタ Purwa-Carita にあった。

プラブ・サウエラ・チャラに息子スリ・マハプングン sri Maha-Pungung がいた。そのパティ patih [宰相] はジュグル・ムダ Jugul-Mudha といった。スリ・マハプングンに息子カンディ・アワン Kandhi-Awan がいた。そのパティはコンタラ Konthara といった。カンディ・アワンに5人の子がいた。長子はパヌフン Panuhun といい、農民の王となり、パグレン Pagelen に宮廷があった。2番目はサンダン・ガルバ Sandhang-Garba といい、商人の王で、ジュパラ Jepara に宮廷があった。真中はカルンカラ Karung-Kala といった。森をさまよふのを好んだ。獵師の王となり、ランバナン Prambanan に宮廷があり、ラトゥ・バカ ratu Baka と称した。次をトゥングル・ムトゥン Tunggul-Metung といった。ヤシ酒を取るのが好きだった。職人の王となった。最後はルシ・ガタユ rsi Gathayu といい、父の跡を継ぎ、コリパン Koripan で王となった。4人の兄弟はみな服従した。

ルシ・ガタユに5人の子がいた。長子は娘で、ララ・スチヤン rara Suciyan といった。2番目はルンプ・アミルフル Lembu-Amiluhur といい、ジュンガラ Jenggala において王になった。真中はルンプ・プトゥン Lembu-Peteng で、クデイリにおいて王になった。次はルンプ・プンガラ Lembu-Pengarang といい、ググラン Gegelang において王になった。最

#### ババッド・タナ・ジャウイ (1)

後は娘でニ・ムルギ・ワンサ ni Mregi-Wangsa といい、シンガサリ Sanga-Sari の王ルンプ・アミジャヤ Lembu-Amijaya と結婚した。

ルンプ・アミルフルに息子パンジ Panji がいて、クディリの王女デウイ・チャンドラ・キラナ dewi Candra-Kirana 別名デウイ・ガル dewi Galuh と結婚した。パンジに息子クダ・ラレヤン Kuda-Laleyan がいて、バジャジャラン Pajajaran で王になった。プラブ・ラレヤンに息子バンジャラン・サリ Banjaran-Sari がいた。バンジャラン・サリに息子ムンディン・サリ Mundhing-Sari がいた。ムンディン・サリに息子ムンディン・ワンギ Mundhing-Wangi がいた。ムンディン・ワンギに息子スリ・パムカス sri Pamekas がいた。スリ・パムカスに息子アルヤ・バンガ arya Bangah とラデン・ススル raden Susuruh がいた。アルヤ・バンガはガル Galuh において王となった。ラデン・ススルはバジャジャラン国の王になることになっていた。

#### 4. シユン・ワナラの運命

さて1人のアジャル ajar [賢者] がいて、バジャジャランの山で苦行し、名をアジャル・チュバカ ajar Cepaka といった。予知能力で有名で、まだ起こっていないことをすでに知っていた。この話が王に伝えられると、王はキヤイ・アジャルの能力を試したいと、パティに側女をつれて山に行き、キ・アジャルに会うよう命令した。側女はあたかも妊婦のように腹部に大きな鉢をいれさせ、キヤイ・アジャルにお腹の子の男女を当てさせようというのである。

パティは山への道をたどり、キ・アジャルに王の命令を伝えた。キヤイ・アジャルは自分の能力が王に試されていることを悟った。お腹の子は男の子だろうと答えた。

パティが王に報告すると、王はアジャルが嘘をついたと大喜びし、側女

に長衣を脱がせてみると、大鉢はなくて、本当に妊娠していた。王は激怒し、アジャルを殺すよう命令した。キ・アジャルが死ぬと、王に声が聞こえた。「おお、バジャジャランの王よ、わしは罪なくしてお前に殺された。いずれお前に仕返ししてやる。シユン・ワナラ Siyung-Wanara という男が現れたら、それがわしの仕返しだ」

その後バジャジャラン王国は激しい疫病の猖獗に見舞われた。大勢の人が死に、王はとても心を悲しませた。占星術師たちを呼びだし、疫病の対策を尋ねた。占星術師たちは申し上げた。王様はごちそうで宴会をなさるのがよろしい。宴が終われば、女性と一夜をお過ごしなさいませ。これが疫病対策になりましょう。しかし、王様はやがて大きな災厄に見舞われ、側女がうんだご自分の子に殺されることになりましょう。

王は占星術師たちの助言を実行した。ごちそうの宴会が終わると、王はひどく酔っぱらい、そして側室と寝た。たまたまそれは、先のキ・アジャルに妊娠の謎をかけさせた女であった。やがて時が満ちて、妊婦は男の子をうんだ。王は占星術師たちの説明を思い出し、赤ん坊に毒を飲ませたが、効き目がなかった。切り刻もうとしたが、乳母たちがこれを妨げた。乳母たちは申し上げた。王様が赤ん坊を殺したい決意が固いのでしたら、箱に入れてクラワン Krawang 川に捨てられますように。王はこれを承知し、赤ん坊は箱に入れてクラワン川に流された。

水に流された箱は、クラワンのキヤイ・ブユット kyai buyut とよばれる釣り人に拾われた。箱を開けると、とてもかわいい赤ん坊が入っていた。キヤイ・ブユットはたいへん喜んで、家に連れて帰り妻に渡した。ニヤイ・ブユット nyai buyut は子がなかったので、とても幸せに思った。赤ん坊はよく世話された。大きくなると、キヤイ・ブユットが実の父と信じなくなり、本当のことを知りたいと強く願うようになった。キヤイ・ブユットはその願いを満たしてやりたいとの思いから嘘をついた。森の奥深くで苦行

をする親戚がいて、言われる前に物事がわかる。きっと願いをかなえてくれるだろう。この男に聞くがよい。キヤイ・ブユットは「若者が森に入りたいはずがない。遠いだから」と考えていた。しかし思惑は外れた。若者は森に連れていってくれるよう頼んだ。2人が歩いていると、若者は猿〔ワナラ〕とシユン鳥を見た。キヤイ・ブユットにその名前を尋ねた。キヤイ・ブユットはその動物と鳥の名前を教えた。すると若者はそれを自分の名前にすることにした。こうして彼はシユン・ワナラという名になった。

道中すでに長くなったので、シユン・ワナラはその親戚の家のことを尋ねた。困ったキヤイ・ブユットは、若者を別の道へ導こうと、その親戚はバジャジャランの都に引っ越した。仕事は鍛冶師だと言った。シユン・ワナラは都を見ることができると思って、とても喜び、鍛冶師の家に連れていってくれるよう頼んだ。キヤイ・ブユットはこれに応じた。鍛冶師の家に到着すると、シユン・ワナラは託され、キヤイ・ブユットは戻っていった。

鍛冶師の家においてシユン・ワナラは鍛冶を習った。すぐに膝を鉄床、拳を金槌、指をやっとこととして使うことができた。たくさん人がシユン・ワナラの超能力を見ようと鍛冶師の家におしかけてきた。

ある日シユン・ワナラは鍛冶師とともに市場に行った。バジャジャランの王の象がちょうど水浴びをしていた。象はシユン・ワナラを見ると、近づいてきて、その前でお辞儀をした。言葉をしゃべることができたなら、きっとこう言っただろう。「ご主人様、どうぞお乗りください。貴方様のお父上、王様にごあいさつにお連れいたします」。シユン・ワナラは牙をなでてやった。これを見てみな驚いた。

さてバジャジャランの王は閲兵のため外に出ていて、一騎討ちをさせて楽しんでいた。シユン・ワナラは見物した。鍛冶師は止めようとしたが、無駄だった。謁見場に行くとシユン・ワナラは王の並びに座った。誰も

これが見えなかった。そして宮廷に入って、サウォ sawo の木でできた椅子の横に立ちどまった。このサウォの椅子は触れるとフルセットのガムラン gamelan のような響きをたてる。この椅子にシユン・ワナラが座った。轟音が響き、王をびっくりさせた。激怒して、椅子に触れている余計者をつかまえるよう命じた。マントリ mantri たちがかけより、サウォの椅子に寝そべるシユン・ワナラに襲いかかった。シユン・ワナラは飛び起きた。マントリたちははね飛ばされ、打ちのめされた。難を逃れた者は逃げ戻って王に報告した。王はシユン・ワナラの超能力を知って喜んだ。シユン・ワナラは召し抱えられ、しばしば軍隊を指揮して他国の征服に送り出された。そのたびに凱旋した。

王の覚えがたいへんめでたかったので、シユン・ワナラは地位が上がり、アルヤ・バニャックウィデ arya Banyak-Wide の名前と 1 万カルヤ karya<sup>2)</sup> の采邑を与えられた。さらに養子に迎えられ、体刑と死刑に処する権限を与えられた。

アルヤ・バニャックウィデは大勢の鍛冶師を集めて、扉のある鉄製の寝台を作るよう命じた。完成し装飾を施すと、館の中に置いた。

あるときパジャジャラン国は敵に攻められ、王は勝利を得た。アルヤ・バニャックウィデは王に申し上げた。王様が戦いに勝利されたときには、自分の館に祝宴にお招きする誓いを立てておりましたと。王はこの招待を受け、アルヤ・バニャックウィデの館に出向き、ごちそうの祝宴に臨んだ。祝宴ののち、王は鉄の寝台を目にすると、アルヤ・バニャックウィデに、このような寝台を作ってどんな役に立つのか尋ねた。アルヤ・バニャックウィデは申し上げた。「この寝台は、疲れたときそこに寝ると回復いたします。熱いときは冷めますし、寒いときは暖かくなります。病人は健康になります」。王は試してみたくなり、鉄の寝台に横たわった。バニャックウィデは王が横になったのを見ると、寝台の扉を閉め、家来に寝台を担い

ババッド・タナ・ジャウイ (1)

でクラワン川に投げるよう命じた。王は激怒し、どんな悪いことをしたか問うた。バニャックウィデは、まだ小さいときにクラワン川に投げられたので、いまこうして復讐するのだと答えた。鉄の寝台は本当に沈められた。

王の息子ラデン・ススルはこのことを知らされると、軍勢を集めてアルヤ・バニャックウィデを捕らえようとした。たちまち激しい戦いが起こった。バニャックウィデの軍勢の多くが、ラデン・ススルの奮戦のため命を落とした。バニャックウィデがラデン・ススルとの戦いに出てきた。両者は対峙した。ラデン・ススルは槍を投げられ、腹帯に当たって切り落とされた。ラデンは恥ずかしくまた怖くなって、後ずさりし、逃げだした。まっすぐ東に向かい、カリグンティン Kali-Gunting 村の未亡人の家に身を潜めた。ラデン・ススルは彼女の子として受け入れられた。

訳注

- 1) ウク wuku。ウクは30週（1週は7日）つまり210日を周期とするジャワおよびバリの暦法であり、今日でも日取りの吉凶占いなどに用いられる。とくにバリではウク暦にもとづく祭礼や行事が行われる。30週の名前は2人の妃シンタ、ランドゥップに始まり、27人の息子の名前が続き、第30週がワトゥグヌンである〔*ENI V*: 405-406 参照〕。
- 2) カルヤ karya。カルヤは農地4バウ bau のこと（1バウは0.70965ヘクタール）〔*Albada 2007*: 339〕。

[Report]

# Four Experiential Learning Programs at Momoyama Gakuin University

Warren DECKER\*

## Introduction

In this paper I describe and compare four experiential learning programs at Momoyama Gakuin University: bread baking, organic vegetable growing, mountain traveling, and volunteer snow-shoveling. In these programs, students learn a variety of concrete skills as well as abstract skills such as communication, creativity, care for the environment, and compassion towards others.

In this paper, it is not my intention to outline the historical background of experiential learning, but rather to describe what I have learned experientially in my efforts to conduct experiential learning programs.

I define experiential learning simply as learning through direct experience. Instead of reading about growing tomatoes, the experiential learner learns about tomatoes by actually growing them. Instead of listening to a lecture

---

\* 本学外国語教育センター外国語科目契約教員

Keywords: experiential-learning, communication, environment, creativity,  
compassion

about compassion, the experiential learner learns by being compassionate.

Figure one below offers a general overview comparing the four experiential learning programs. The following sections describe each program in detail. I conclude with a reflection on the importance of experiential learning and its power to help people find fulfillment and happiness in their lives.

*Figure one: General Overview*

	Bread baking	Organic gardening	Mountain travel	Snow shoveling
Number of students	25	10	7	3
Intensity	Low	Low-High	Very high	Very high
Duration	3 hours	1 day / week, ongoing	5 days- 4 nights	9 days-8 nights
Expense for students	¥100	None	¥3500	¥14000
Expense for school	¥10000	¥5000	None	None
Level of physical challenge	Low	Low-High	Very high	High
Language learning potential	Moderate	Moderate	High	High
Concrete skills learned	Bread baking	Vegetable cultivation	Mountain travel	Snow-shoveling
Abstract skills learned	Communication			
	Creativity			
	Care for the environment			
	Compassion towards others			

## Bread-Baking

### Introduction

Bread is one of the most basic staples of human civilization and sharing food is one of the most fundamental human activities. In this bread-baking project I hoped that students would learn the joy of baking and eating fresh bread, and that they would form bonds with other students from other countries through the process.

## Four Experiential Learning Programs at Momoyama Gakuin University

*Photo from the Momoyama Gakuin University website<sup>1</sup>*



*Figure 2: Bread-Baking Overview*

	Bread
Number of students	31 students: 18 international students and 13 Japanese students
Countries represented	8 countries: Japan, China, Vietnam, Russia, France, United States, Austria, Italy
Intensity	Low
Duration	3 hours in one day, divided into two sessions in the afternoon and evening
Expense for students	¥100 for insurance
Expense for school	About ¥10000 for ingredients and rental of cooking facilities
Status	University supported event
Level of physical challenge	Low: mixing, kneading, and shaping dough
Language learning potential	Moderate: Directions given in English. Group members from various countries.
Primary objectives	<ul style="list-style-type: none"><li>● Learn to make bread.</li><li>● Learn about yeast, flour, and other ingredients.</li><li>● Communicate with people of different nationalities.</li><li>● Understand simple directions in English.</li><li>● Have a positive experience making and eating bread with others.</li></ul>

### Preparation

To prepare for this event we only had to purchase ingredients, find twelve bowls and stirring spoons, reserve a cooking room at our local community center, and find willing student participants. Originally I had planned to have 20

students, half from Japan, and half from other countries, but so many students expressed interest that we decided to raise the number of participants. The ratio of half international students and half Japanese students was roughly maintained with 13 Japanese students and 18 international students for a total of 31 participants.

## **Experience**

Baking bread is very simple and not even very time consuming. The only difficulty from the perspective of an experiential learning event is that there needs to be a 2-6 hour period for the bread to rise. Because of this, we scheduled the event at two times. During the lunch break from 12:30 to 1:20 we met to make the dough. From 4:40 until about 6:30, we baked and ate bread. During the time between these two sessions, the dough was left to rise while students went about their usual daily routines.

### **Session one: Dough**

We used a meeting room for the first session with six dough-making stations for six groups, and a central table with the shared ingredients of flour, salt, oil, yeast, and water. Each station made two bowls of dough, to allow for increased direct participation. Groups were assigned members with as wide a variety of nationalities and languages as possible.

Unlike a standard lecture style class, there was no centralized instruction. As soon as half of a group's members had arrived, I encouraged them to begin making dough. There was a very simple set of instructions on each table:

**Bread dough**

Flour: about 500 grams  
Water: about 250 milliliters  
Oil: about one tablespoon  
Salt: about one tablespoon  
Yeast: about two teaspoons

Mix dry ingredients.

Add water.

Knead until smooth.

The word “about” may seem extraneous, but it was my specific intent to have students learn how fundamentally simple bread really is. It requires only four ingredients, (oil adds flavor but is not essential), and the measurements do not need to be exact at all. To this end, I intentionally did not provide scales or measuring devices, but encouraged students to talk with each other and make their best estimate about the amount of ingredients to use. For example, the flour was in 1 kg and 2 kg bags, so the contents simply needed to be split in half or quartered.

Thus, as groups assembled and introduced themselves to each other, their first task was to pour about 500 kg of flour into each of the bowls. This was a good way to get started because soon flour was floating through the air and spilling on tables and ending up as white handprints on stylish clothing. It is not possible to make bread without getting some flour on you in the process.

Because students started as they arrived, each group was working at a different stage. Along with me there was one other experienced baker who was offering instruction to individual groups. Those groups who had proceeded further could help those that were just beginning.

While I tried to avoid any didactic micromanagement of the bread making,

I did insist that every participant got their hands in the dough and experienced the kneading process. If the dough was too sticky, they could add more flour. If it was too dry they could add more water. The dough will tell you what it needs.

As time passed, groups proudly displayed their smooth balls of dough in their bowls. We covered them with wet towels, marked them with the groups' names and left them in the window in the indirect sunlight to rise through the afternoon.

### **Session Two: Bread**

We reconvened at 4:40 after the fourth period class. After marveling over the dough which had more than doubled in size, we prepared for the trip to a cooking facility at a community center near the university. Some carried their dough by putting the bowl in a shopping bag and some cradled the bowl of dough in their arms like a baby. Others placed the bowl of dough in the basket of their bicycles.

All the people and living yeast arrived safely at the cooking room. Much like the earlier kneading session, I avoided any centralized instruction other than explaining how to turn on the ovens. I wanted students to work together, communicate and directly experience making bread. Whether in loaves, rolls, or any other shape, if you apply heat to bread dough, you can create a delicious edible product. This is what I wanted students to learn first-hand.

Students very quickly began shaping the dough into baguettes, nan, faces, spirals and otherwise, and before long there was the smell of baking bread in the air.

One student took the initiative to bring a tomato sauce and began making

## Four Experiential Learning Programs at Momoyama Gakuin University

pizza. My intention had been to provide only butter as a topping, to emphasize the simplicity of bread, but this pizza was delicious, he graciously brought enough for everyone to share, and he inspired my plan for the next baking event, (see below).

In about two hours, all of the dough had been baked, most of the bread had been eaten, and the cooking room had been restored to its original state. The first international bread baking experiential learning project drew to a close.

### **Good points**

- Students were able to work in an international group to successfully produce a tangible, delicious, nourishing food.
- Students had the chance to be creative.
- Students communicated with others of various nationalities using various languages.
- Students experienced the fundamental simplicity of making bread, and hopefully will have the confidence to try it on their own.
- Although 31 people ate their fill of delicious bread, only a minimal amount of trash was produced during the event.

### **Points for consideration**

- Students did not have enough time to form deep connections with other group members.
- Because of the large number of participants it was not possible for everyone to interact meaningfully with each other.
- As a one time, three hour event, the experience was not of high intensity.
- There was no time set aside for reflection on the event and no formal

means of evaluating the success of the event from the student perspective.

### **Reflections and Future plans**

As I write this, we are already planning a pizza making event. We hope to similarly have two sessions, kneading followed by baking, but this time we will provide cheese and tomato sauce. Students will be asked to bring whatever pizza toppings they choose. This will be slightly more expensive for students and the university, but students will have more of an investment in the program by choosing which toppings to bring, and the finished product will hopefully be even more delicious and nourishing than bread alone. Also, arranging the toppings on the pizza will provide another opportunity for students to express themselves creatively.

During this project I intentionally avoided centralized instruction, but next time I would like to say just a few more words about the environmental benefits of baking bread. It is a source of exercise, relaxation, nourishment. There is a final product to consume, but only after an effort of creation.

I also hope to keep the number of participants fewer than 20 and ideally at about 15. With a group of 30, although there was meaningful communication within the groups, it wasn't possible to have a sense of unified experience and communication between all members of the program. With 15 people, about half Japanese students and half international students, over the course of three hours, I think everyone will have a chance to interact with each other and hopefully form some meaningful bonds over kneading dough and eating pizza.

Finally, I plan to distribute a survey after the event to evaluate the success of meeting the objectives from the students' perspective. From the satisfied smiles and from informal conversations, I feel that students had a positive

## Four Experiential Learning Programs at Momoyama Gakuin University

experience but it would be helpful to evaluate this formally. The survey will also serve the function of giving the students a chance to reflect on their experience.

### Organic Vegetable Gardening

*Photo from the Momoyama Gakuin University website<sup>2</sup>*



	Organic Vegetable Gardening
Number of students	3-10 participants per session, more than a total of 50 in different sessions
Countries represented	10
Intensity	Low
Duration	2 hours every week, students are free to join for any amount of time
Status	University supported event
Expense for students	None
Expense for school	About ¥5000 per semester for seedlings, seeds, and other materials
Level of physical challenge	Low to high depending on level of student involvement. Cultivating the soil, weeding, etc.
Language learning potential	Moderate: Participants from various countries work together.
Primary objectives	<ul style="list-style-type: none"><li>● Learn about all stages of vegetable cultivation through direct experience.</li><li>● Minimize environmental impact and contemplate environmental ethics through local food-production, organic gardening and composting.</li><li>● Communicate with people of different nationalities.</li><li>● Harvest, eat and share the fruits of physical labor.</li><li>● Raise awareness of the miraculous nature of life by watching tiny seeds flourish into enormous plants.</li></ul>

Plant cultivation and composting of organic matter bring me such profound joy that as a teacher I am strongly compelled to share these experiences with my students. At Momoyama Gakuin University, I found a place for a vegetable patch directly across from the administrative buildings. After receiving the necessary permission, students and I planted our first crop of winter vegetables late in 2010. At the time of this writing in the fall of 2011 we are harvesting the last tomatoes, peppers, carrots, and goya of the summer, and preparing the soil for the planting of daikon radish, spinach, mizuna, and other winter vegetables.

### **Preparation**

The preparation for this project had serendipitously already been completed because a vegetable garden had previously been established. The other preparations were very simple, assembling some tools, most importantly shovels, and buying some seeds and seedlings.

### **Experience**

Unlike the bread-baking project, the vegetable garden is a continuous and ongoing event. Also, since it happens weekly on campus, students may participate as they like without any application procedure. Because it is not associated with any class or credit, participation is purely voluntary. There are about four students who come reliably every week, about ten others who come on occasion, and then there are many participants who just drop by for one session out of curiosity when they see us out there moving soil around with shovels or eating freshly picked cherry tomatoes.

At present we have one scheduled session every Friday from 12:30, at the

#### Four Experiential Learning Programs at Momoyama Gakuin University

start of the lunch-break, to about 2:30. Depending on the season, the work varies. At the onset of the project there was lots of work to be done. It was late fall, and we needed to clear the weeds, and lingering summer vegetable stalks, turn the soil, and plant seeds of winter vegetables.

However, once the seeds for the winter crop were planted, the amount of work was reduced considerably. Fortunately, there are always weeds to be pulled. We also spent time just talking with each other and enjoying being outdoors in the brisk winter air. The arrival of spring and summer provided lots of new opportunities for work. Weeds grow faster in the summer, and summer vegetables often need to be staked-up and supported. Students built creative structures to allow the goya and cucumber vines to follow their natural inclination to grow up towards the sun.

In all seasons, we have an active compost pile and I encourage students to use it to convert leftover organic matter from their lunches into soil. The compost pile is a focal point for discussing environmental ethics. A watermelon rind is almost completely made of water and very heavy. If thrown into a trashcan, the rind is sealed in a plastic bag, picked up by a truck, driven to a waste processing facility, and usually burned. If the same watermelon rind is placed on a compost pile, no extraneous resources are consumed, and the rind quickly decomposes into soil and water.

Besides being a place where students can learn about the environment and grow vegetables it is also a great place for bringing different people together. There are Japanese students of different ages from all departments as well as international students from various countries. Because there is not an overt language objective, students can communicate in whichever language is most comfortable for them. Furthermore, because they are engaged in concrete

tasks there is always something meaningful to discuss.

### **Good points**

- Students have successfully grown vegetables. (We ate a harvest of tomatoes, peppers, goya, and carrots this fall.)
- Participants of different ages and from different departments and different countries have had the opportunity to work together and become friends.
- Students have the chance to be creative and productive.
- Students are able to directly engage in the miraculous cycle of life and contemplate their own role within the broader environment.
- Participation is open to anyone without any application procedure or limit to the number of participants.

### **Points for consideration**

- As an event scheduled in the middle of a normal class day, many students are not dressed appropriately.
- Many students just come once and have a positive but very low intensity experience.
- The most important months of the growing season in summer fall during the August and September holidays.
- At times there is more work than can possibly be completed in one session, and at other times there is not much to do.

### **Reflections and future plans**

While students who just come once can have a positive experience of working for an hour in the garden, it is clearly the students who come repeatedly

## Four Experiential Learning Programs at Momoyama Gakuin University

who benefit the most. They form close bonds with each other and see the progression from seed, to plant, to fruit. They are the ones who can truly enjoy the fruits of their labors.

While I am happy that participants work in the garden on a purely voluntary basis, in the future, it might make more sense to select a small number of students who will commit to working in the garden regularly.

Additionally, in the immediate future I am planning to schedule some gardening sessions for Saturdays. By working on a day when most students don't have classes, we would have only the most committed students. We would not have to watch the clock and stop when the next class began, but rather, work until the work was completed. Also, we could all wear clothing and shoes for gardening, without worrying about tracking mud into the classrooms.

## Mountain Travel

When I was 16 I had the privilege of participating in a National Outdoor Leadership School (NOLS) wilderness travel program in remote mountains of Montana and Wyoming<sup>3</sup>. We were completely immersed in wilderness for a month and learned the essentials of safely travelling through those beautiful mountains while adhering strictly to a minimum impact philosophy<sup>4</sup>. The experience heightened my love of wild places and gave me the skills to travel through mountains on my own or as the leader of a team. I am committed to sharing what I learned from this experience with my family, friends, and students.

In Japan, one is never far from beautiful forested mountains. I am 40 min-

*Photo by Bára Postránecká*



Mountain Travel	
Number of students	3 Japanese students
Countries represented	2 countries: 3 students from Japan and me from the United States
Intensity	Very high
Duration	5 days and 4 nights continuously.
Status	Student supported event
Expense for students	About ¥3500 for food and train fare
Expense for school	none
Level of physical challenge	Very high: long days of hiking through mountains with heavy backpacks
Language learning potential	High: A small group together constantly in challenging and beautiful circumstances provides ample opportunities for meaningful communication.
Primary objectives	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Learn essential skills for safely travelling through mountains including: gear selection, packing, fire-building, cooking with fire and camp stoves, map-reading, prevention of hypothermia and other illnesses and injuries, campsite selection, minimum impact travel and camping.</li> <li>● Work effectively as a team.</li> <li>● Contemplate environmental ethics.</li> <li>● Experience the intense beauty of winter mountains.</li> <li>● Experience life in a small isolated group, away from electricity, televisions, showers and other modern amenities.</li> </ul>

utes by train from the heart of urban Namba in Southern Osaka, and yet I am also 40 minutes by train from an extended network of trails that transverse the ridges of the mountains which define the southern boundary of the Osaka

## Four Experiential Learning Programs at Momoyama Gakuin University

metropolitan area. While it is not remote wilderness, it is possible to remain almost completely immersed in the mountain environment for several days or even weeks, crossing only three or four paved roads and seeing signs of modern world only in the distant glimmering lights of the city at night.

### **Preparation**

As this was not an official university event, the recruitment of students was very informal. Basically, I just took a minute after my regularly scheduled English classes to ask if any students were interested in experiencing mountain travel. Most students laughed at the crazy idea of spending four nights in a tent, cooking over a fire, listening to the cold wind blowing through the trees. Thankfully though, in the very last class of the fall semester, three students from the same class approached me. We exchanged emails, set approximate plans for the days of travel, and the first Momoyama mountain expedition was launched.

As an avid backpacker and camper, I already had the gear that we would need as a group of four, particularly, four backpacks, four sleeping bags, and a four-person tent. This would be a considerable expense for organizations considering establishing such a program, but once the equipment was purchased, it could be used repeatedly by many different people.

Two days before our departure we met at the university. I brought all of the gear that I had from my house as well as basic food staples such as rice, pasta and couscous. We worked together to remove any extraneous packaging from our food and distribute it evenly in our packs. I asked the three students to purchase any other foods, sweets, snacks, or seasonings that they would want to accompany our basic staples. This seemed to be a nice compromise in that

I was assured that we had enough calories of rice and grains to survive, but they could also participate in the preparation procedure and choose foods that might give them comfort and strength in the midst of a potentially very challenging experience.

We each took our backpacks home at the end of the day. The students set off together to the supermarket to buy the additional food and I set off towards home to have one more look at the map. We agreed to meet in two days at Nijo station at the base of Katsuragi Mountain on the border between Osaka and Nara.

### **Experience**

Travelling in the mountains, particularly in winter can be very challenging, but the procedure itself is very simple. We put one foot in front of the other and walked through the mountains all day, following the central ridge of the mountain range. We climbed Mt. Katsuragi, Mt. Kongo, and spent our final night on the summit of Mt. Iwawaki.

Each evening we would find an appropriate campsite, set up the tent, and then set to work getting water and preparing dinner. If it was possible to have a small low-impact fire for cooking we gathered firewood and built a fire. If not, we used a camping stove. With four nights and four people, each one of us was responsible for being the head-chef for one dinner. As much as possible I wanted the students to have the chance to learn through experience how to build a fire and cook a meal outdoors after a long day of hiking with a heavy load.

It was early March, and still very cold at night with snow on the ground at the high elevations. The sun was setting at about six o'clock making for very

## Four Experiential Learning Programs at Momoyama Gakuin University

long nights, which lead to some great sessions of cards in the tent before we fell asleep. Those on the outer edge of the tent were subjected to the cold air that penetrated the thin nylon shell, so each evening we rotated our sleeping positions. Those in the middle could enjoy being warm. Those on the outer edge could sleep well, knowing that their discomfort was making others warm.

Each morning we woke up, boiled water for tea and coffee, and repeated the wonderful process again. For five days we ate healthy simple foods, consuming only calories and a minute amount of electricity for our headlamps at night. Aside from the energy consumed by the train to and from the trailhead, we had an extremely minimal environmental impact. The snow covered peaks, rocks, rivers, and trees were spectacular. The bonding experience of living together in this intensity brought us all very close together. I am sure that none of us will forget this event for the rest of our lives.

### **Good points**

- We safely travelled through the mountains for five days.
- The students all experienced a degree of physical and mental discomfort, but were able to overcome it and become stronger for it.
- All participants mastered the basic essential skills. I feel that they would be capable of travelling in the mountains on their own or leading others.
- We had a minimal environmental impact.
- We all remain friends to this day at the time of this writing.

### **Points for consideration**

- Only three students were able to participate in this event.
- Because of the duration and intensity it is difficult to arrange this event

frequently and must be held when there are no classes.

- It would have been far more difficult to arrange if I did not already have the gear.
- Students had to bear the expense, (minimal though it was), on their own.

### **Reflections and future plans**

It would be ideal to purchase a complete set of backpacking gear to keep at the university for use by students. This would require a considerable investment at the onset, but it would provide a resource for outdoor experiential education that could be used for many years to come.

I would like to organize a mountain trip with two Japanese students and one international student, preferably from a country other than my own. The intensity of the mountain trip leads to very close bonds between participants and with three different nationalities present, the potential for language learning and meaningful intercultural communication would be greatly increased.

### **Volunteer Snow-Shoveling**

I first travelled to Takane Village in the winter of 2009 as a member of a group sent by the volunteer NPO, Never-ending, International Work-Camp Exchange (NICE)<sup>5</sup>. Takane is located deep in the mountains near Nomugi Pass on the border of Gifu and Nagano. Many of the remote villages in the area, as with many rural areas in Japan, are populated almost entirely by elderly residents. Their children and grandchildren have moved to the larger cities.

## Four Experiential Learning Programs at Momoyama Gakuin University

*Photo by Olga Górczyńska a participant  
on the snow-shoveling trip*



Volunteer Snow Shoveling	
Number of students	7 students: 3 Japanese and 4 international
Countries represented	5-Japan, Poland, France, Russia, (and including me, the US)
Intensity	Very high
Duration	9 days and 8 nights continuously.
Status	Student supported event
Expense for students	About ¥14000 for round-trip travel expenses by bus
Expense for school	none
Level of physical challenge	Very high: shoveling snow from the roofs of houses for several hours each day
Language learning potential	High: We were together constantly for the duration. International students had opportunities to learn Japanese and Japanese students had the chance to learn other languages.
Primary objectives	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Shovel snow as volunteers for the elderly residents of Takane village, Takayama City, Gifu Prefecture.</li> <li>● Live comfortably in close quarters together, working as a team through effective communication.</li> <li>● Communicate and interact meaningfully with elderly residents of Nokutoi-kan.</li> <li>● Form close connections with people from different cultures.</li> <li>● Experience the joy of being compassionate and helping other people.</li> </ul>

In this area, the winters are so harsh that the local Social Welfare Organization (社会福祉協議会) and the city of Takayama have created a unique facility where elderly residents can come together to live communally for the four harshest months of the winter, returning to their own homes when the spring warmth begins to thaw the snow. This communal home is called Nokutoi-kan, (*nokutoi* meaning *warm* in the local dialect, and *kan* meaning *hall* or *building*)<sup>6</sup>.

The snow fall is so intense during the winter months, that it is necessary to shovel snow from the roofs of houses. As it accumulates and settles, the weight of it can cause structural damage. It also poses a threat by sliding over the eaves in precarious frozen waves. The residents of Nokutoi-kan are reasonably concerned about their houses while they are away from the winter. Thus, when the facility was established, there was also a provision for accommodating volunteers who could come in the winter to shovel snow. In 2011 I returned to Takane and Nokutoi-kan with six volunteers from Momoyama University. Another volunteer joined us from a university in Tokyo, and including me, we had a delegation of eight volunteers, men and women, from Japan, France, Russia, Poland, and the United States.

### **Preparation**

As with the mountain trip, the most important step was to find volunteers. This was an unofficial student-supported event, so I spoke with my students, making announcements before and after classes, and tried to find people who were interested. I had no formal application procedure in place and basically accepted the first people who put their hands up and expressed an interest. We only had to secure our bus tickets from Namba to Takayama and then from

## Four Experiential Learning Programs at Momoyama Gakuin University

Takayama to Takane. Our food and lodging would be graciously provided by the host organization. In return, we would shovel snow, do dishes and anything else to help the small community during the harsh winter.

### **Procedure**

We arrived at Nokutoi-kan at nine in the evening, dazed from a full day on busses. We were shown to our room where we would stay for nine days, sharing three tatami rooms for eight of us. The next morning, and every subsequent morning, we ate a breakfast of rice and miso soup in the with about 15 of the residents of Nokutoi-kan. By day, we drove to various remote houses and helped shovel snow from the roofs. We usually ate onigiri at the house where we were working. In the evening, pleasantly exhausted from a day of hurling incredible amounts of snow from the roofs of houses, we returned to take a bath, and join everyone for a communal dinner of delicious traditional Japanese food. Two people each day were assigned cooking and cleaning duties in preparation for all of our meals.

After dinner was cleared away, we often spent the evenings playing *babanuki* (a Japanese card-game) with the wonderful people in Nokutoi-kan. On a few occasions, especially towards the end of our stay, we shared sake and snacks, and listened to stories about life in Takane as it was over 80 years ago. On one night we staged a talent show. I think the communication that took place in the evening after dinner was as important if not more important than the snow that we shoveled.

The residents of Nokutoi-kan almost all spoke with strong accents of the local area, and even for the Japanese volunteers it was initially difficult to understand them. For the exchange students and the Japanese students, for

many it was their first full immersion into rural Japanese culture. The village of Takane has no convenience store, no fast-food restaurants, and no internet cafes. At night, it became very dark, cold and quiet outside of Nokutoi-kan. The entertainment we had was talking with each other and because of this, the volunteers and the residents formed many close bonds. The student volunteers could directly experience the joy that comes from making other people happy.

### **Good points**

- We had a positive experience shoveling snow and creating happiness for others.
- We overcame the inherent challenges of living communally in an isolated rural area.
- We had excellent physical exercise and a healthy diet for the duration of the program.
- It was a great opportunity for cultural experience and language study for international students.
- Except for travel by bus and car, our environmental impact was minimal. Our time was spent engaged in meaningful physical work instead of meaningless consumption of resources.

### **Points for consideration**

- No one was hurt, but the work can be dangerous. (I clearly expressed to students that they were participating at their own risk.)
- Because of the duration and intensity it is difficult to arrange this event frequently and must be held when there are no classes

### **Reflections and future plans**

At the end of last year's program, I boarded the bus for Osaka shaking hands and giving hugs with promises to be back next winter. Of course it will depend on whether the host organization is able to accept a group of volunteers next winter but I have no reason to think that we won't be invited again.

Next time I will reconsider the application process, taking applications during a specific period, perhaps with a written statement of intention, which would allow me to put together the best team of people genuinely committed to helping the residents of Takane.

Finally, as much as I enjoy leading the trip, it would be a great pleasure for me to watch a Japanese student take over the role of leader. Of course I would still want to participate, but I think it would be a great experience for someone to work with other Japanese students and international students and take responsibility for making a success snow shoveling project. During last winter's trip I already began asking two of the participants from last year if they would be interested in leading next time.

### **Conclusions:**

#### **Sharing experiences**

In comparing these four programs, there is a clear relationship between the number of participants, the duration, and the intensity of the experience. Fewer people and longer duration leads to higher intensity. While experiences do not have to be intense to be educational, I am convinced that a higher intensity experience leads to greater rewards and greater depth of learning, particularly with regard to skills such as communication, creativity, care and compassion. Baking together for 3 hours may lead to some interesting communica-

tion, but students who spend five days and four nights together in the mountains will communicate on a much deeper level. Students who drop by the vegetable garden to harvest a single tomato will not care for that tomato in the same way as a student who has committed many hours of work and watched it grow from a tiny seed.

Some educators may be concerned that high intensity, long-duration, small group experiential learning programs will not have a broad enough benefit to justify the efforts and costs, but I think this is a misjudgment. If three students can learn, through direct experience, the skills of communication, creativity, compassion for others, and care for the environment, they will surely share what they have learned with others. It is not only the three students who will benefit from their experience, but also their friends, family, community, and the natural environment around them.

### **Learning through Direct Experience**

Certain skills and concepts are best learned through direct experience. Take bread for an example. I could tell a group of students in a classroom that making bread was easy and enjoyable. I could tell them that anyone can do it. Even if they listened carefully to my words and understood what I was telling them, they would not gain the skills and confidence to bake bread on their own. However, if students directly experience making bread, and if, as they knead the dough with their own hands, they come to realize how simple it really is, then they will be able to enjoy baking bread on their own.

Similarly, a teacher could tell students in a classroom, “making other people happy will make you happy too”. This may be an appealing idea to students, and they may understand it intellectually, but this altruistic idea is far more

## Four Experiential Learning Programs at Momoyama Gakuin University

meaningful and profound if learned through direct experience. Imagine a student who feels happiness when she shovels snow then sees the beautiful and gracious smiles of the people she has helped. In this case, she not only understands the idea in her mind, but she feels it in her exhausted muscles, she sees it with her own eyes, and she feels it in her own heart.

### Notes

- 1) Momoyama Gakuin University Official Website. 桃山学院大学. 外国語教育センター English event. Available from: <http://www.andrew.ac.jp/l-center/event.html#03>. [Viewed at 10/2/11]
- 2) Momoyama Gakuin University Official Website. 桃山学院大学, 学生サポート (仲間作り支援), St. Andrew's Field. Available from: <http://www.andrew.ac.jp/campuslife/support/community.html>. [Viewed at 10/2/11]
- 3) National Outdoor Leadership School (NOLS) homepage: <http://www.nols.edu/>
- 4) For more information about minimum impact wilderness ethics:  
Hampton, Bruce and David Cole. "Soft Paths: How to enjoy the wilderness without harming it." Stackpole Books, Harrisburg: 1988
- 5) NICE (Volunteer NPO) homepage: <http://www.nice1.gr.jp/>
- 6) For more information about Nokutoi-kan:  
Iwanami, Tomonori. *Togetherness makes senior citizens glow*. Daily Yomiuri Online. Available from: <http://www.yomiuri.co.jp/dy/photos/zoomup/lens270.htm>. [Viewed at 10/2/11]  
冬季高齢者ファミリーホーム「のくとい館」事業。施策事例7健康福祉関連施策。高山市。  
Available from: [http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000039122.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000039122.pdf) [Viewed at 10/2/11]

Articles

The Montaperti Phenomenon (M. P.) Happened Also  
in Modern China .....YONEYAMA Yoshiaki 1

Language Rights, Legislation about Language:  
Language Planning Viewpoint .....HASHIUCHI Takeshi 97

Japanese Suffix *chikku* Derived from English “-tic”:  
Investigation Using Two Kinds of Data .....MURANAKA Toshiko 115

Translation

*Babad Tanah Jawi I: Babad Pajajaran* .....FUKAMI Sumio 145

Report

Four Experiential Learning Programs  
at Momoyama Gakuin University .....Warren DECKER 165